

小倉進平『朝鮮語方言の研究』所載資料  
による言語地図とその解釈  
第3集



福井玲 編

東京大学大学院人文社会系研究科

韓国朝鮮文化研究室

小倉進平『朝鮮語方言の研究』所載資料  
による言語地図とその解釈  
第3集

2022年3月3日

福井玲 編

東京大学大学院人文社会系研究科

韓国朝鮮文化研究室

小倉進平『朝鮮語方言の研究』 所載資料による言語地図とその解釈  
第3集

初版 2022年3月3日 (PDF版および冊子版)

編者 福井 玲 (fkr@l.u-tokyo.ac.jp)

(連絡先)

113-0033 東京都文京区本郷 7-3-1

東京大学大学院人文社会系研究科

韓国朝鮮文化研究室

本篇は、平成 27～29 年度科学研究費補助金（基盤研究 (C)(一般)、課題番号 15K02504、研究代表者 福井玲、研究課題名「小倉進平による朝鮮語方言資料の言語地図化と言語地図作成ソフトウェアの開発」）による成果の一部である。

Geolinguistic studies of the Korean language based on the data collected by  
Ogura Shinpei. Volume 3.

First edition. March 3, 2022 (PDF and print versions)

Department of Korean Studies, Graduate School of Humanities and Sociology,

The University of Tokyo

Edited by Fukui, Rei (fkr@l.u-tokyo.ac.jp)

Copyright (c) 2022 Authors of respective articles.

This work was partly supported by Grant-in-aid Scientific Research (C), 15K02504, 2015–2017.

## 目次

はじめに		iii
凡例		v
■天文		
暁	福井玲	1
夕焼け	福井玲	5
陽炎（かげろふ）	立川真理恵	9
■地理・河海		
村落	堀内唯	13
丘	國分翼	17
穴	許秦	23
波	奈良林愛	29
泉	國分翼	35
■人倫		
弟	堀内唯	39
姉妹	徐旻廷	43
女	福井玲	47
■身体		
顎	前田夏菜	51
■家屋		
煙出し	澁谷秋	57
■飲食		
肉魚	岩井亮雄	61
饅頭	前田夏菜	65
■花果		
榛の実	許秦	71
山葡萄	梁紅梅	77
桃	梁紅梅	81
■器具		
独楽	李美姫	85
抽斗（ひきだし）	福井玲	89
■飛禽		

啄木鳥	奈良林愛	93
■形容詞		
近い	立川真理恵	99
酸い	國分翼	103
眠い	徐旻廷	109
■動詞		
誦んずる	岩井亮雄	115
■副詞		
僅かに	福井玲	119
却って	朴美花・福井玲	123
速かに	福井玲	127
■雑		
独り	福井玲	131

執筆者一覧

## はじめに

本篇は、2017年度に公表した第1集、2018年度に公表した第2集の続編である。第1集は32篇の小論で33の語彙項目を扱い、第2集では30篇の小論で31の語彙項目を扱ったが、今回の第3集では29篇の小論で29項目を扱った。この三冊で扱った項目数の合計は93項目となる。

この第3集は、第2集のあと引き続いて2019年度に行った大学院の授業での発表などに基づき2020年に公表する予定でいたが、思いがけず起こったコロナ禍のため、約2年間遅れることとなってしまった。早々と原稿を寄せてくれていた諸氏におわび申し上げる。

第2集までと同様、この第3集も小倉進平の『朝鮮語方言の研究』(1944年、岩波書店)に掲載されている朝鮮語方言資料を言語地図化し、その結果と文献上のデータをつきあわせることによって各語彙項目の歴史を立体的に再構成し、その解釈を示したものである。

小倉進平(1882-1944)は、朝鮮語の諸方言の研究に力を入れ、1910年代から1930年代にかけて朝鮮半島全土について調査を行ない、多くの論文やモノグラフにその成果を発表したが、亡くなる直前の1944年には上記の著書においてその集大成を行なった。その後、彼の方言研究は河野六郎に引き継がれ、また戦後は韓国において、多くの学者による方言研究が行なわれたが、残念なことに、彼が集めた方言調査資料はいまだに十分に活用されてきたとはいえない状態にある。本編は、そのような状態にあつて、それをできるだけ活用することを目指したものである。

彼の残した方言資料の特徴とそれを扱う際の留意点については、凡例に示した筆者の論文などですでに述べてきたのでここでは省略する。

言語地図化の作業には、現在開発を行なっている言語地図作成用ソフトウェア Seal 8.0 を用いた。これは科学研究費(平成27~29年度科学研究費補助金 基盤研究(C)(一般)、課題番号15K02504、研究代表者 福井玲、研究課題名「小倉進平による朝鮮語方言資料の言語地図化と言語地図作成ソフトウェアの開発」)を得て、開発を続けているものである。このソフトウェアはもともと福嶋秩子・福嶋祐介夫妻が開発されたもので、今回、それを Windows の最新の環境(Visual Studio)に合わせて移植し、さまざまな機能の追加を行なったものである。なおこの Seal 8.0 およびマニュアルも本篇と同じウェブページで公開される予定である(Seal 8.0 の公開もコロナ禍の影響もあり大幅に遅れているが、2022年度中には行う予定である)。

最後に、オリジナルの Seal のソースコードを提供して下さった福嶋秩子先生、故福嶋祐介先生、さまざまな研究会において研究発表の機会を作ってくださっている遠藤光暁先生はじめ多くの先生方に感謝する。また、これまで筆者の授業に参加した多くの学生諸君からは有益なコメントをいただいた。そのうち何人かの方々に編集作業を手伝っていただいたことにも感謝したい。表紙の写真(慶州、古墳公園)はこのゼミに参加してきた澁谷秋氏

にご提供いただいたものである。感謝申し上げます。

2022年3月3日

福井 玲

## 凡 例

▶本書では『朝鮮語方言の研究』上巻に記載された資料のうちから29項目を選んで、解説および言語地図を提示する。

▶各項目の名称は原則として小倉進平による日本語による表記に従う。ただし読みにくい場合には括弧内に読み仮名を付した。

▶語形の転写は原則として『朝鮮語方言の研究』下巻の「総説」13-14頁に示されている小倉進平の音声表記に従っているが、便宜上、次の3つの記号は本書では別の記号に変更して示す。

小倉の記号	本書の記号
ü (上点つきの u)	i
o (o の斜体字)	ʌ
ö (o ウムラウトの斜体字)	œ

これらのうち、「o の斜体字」と「o ウムラウトの斜体字」は濟州島の独自の母音を表わすのに用いられているが、斜体字は誤読されやすいので、上で示した記号で代替させることにする。また、「上点つきの u」はハングルの ‘으’ の母音の転写に用いられているが、Times New Roman など現行のユニコード準拠のフォントでは単独の文字としては定義されておらず、特定のソフトウェアの上で補助記号の重ね合わせによって表現することは可能であるが、可搬性が低いので、やむを得ずこの母音によりふさわしいと考えられる ‘i’ で代替させることにしたものである。なお、小倉進平が用いた音声記号についての詳細な検討は編者による次の論文を参照されたい。

福井玲 (2016) 小倉進平の朝鮮語方言調査について—『朝鮮語方言の研究』所載資料の活用のために—『東京大学言語学論集』37: 41-70. 東京大学言語学研究室.

なお、激音に現れる有気性を表わす記号として、小倉進平は ‘*h*’ を用いているが、本編では項目によって、それをそのまま用いている場合と、現行の IPA の標準である *h* (上付きの *h*) を用いる場合の両方がある。また、濃音の表記に用いられる声門閉鎖音の記号も項目によって通常の大きさのもの(?)と、『朝鮮語方言の研究』で用いられている上付きのもの(?)の両方の場合があることをお断りしておく。

▶小倉進平による調査地点は『朝鮮語方言の研究』下巻の「総説」15–20 頁によれば 259 地点とされているが、実際に資料編に登場する調査地点はそれより 5 地点多い 264 地点である。これについても詳細は編者による上掲論文を参照されたい。なお、調査地点一覧とその位置を示す地図を凡例の末尾に掲載する。

▶過去の文献資料に見られる語形については主に中世語、近代語、開化期について提示した。その際、刊行年、書名、用例の張数などの情報を次のように略記する。なお、書名の漢字表記には日本の現行の漢字の字体を用いた。

例 무위為電 <1446 訓民正音解例本 56a>

この例では 1446 が刊行年、次いで書名、最後に張数と表裏（表が a, 裏が b）である。なお、正確な刊行年が不明の場合は次のように表示した。

例 16-- 1600 年代で下 2 桁が不明の場合  
160- 1600 年代で下 1 桁が不明の場合

▶各項目にはそれぞれ参考文献を付けたが、次の 2 つはほぼすべての項目に共通するので、個別の項目で掲げるのは省略する。それ以外のものは各項目において個別に掲げることにした。

小倉進平 (1944) 『朝鮮語方言の研究』上下 2 巻. 東京：岩波書店.

李翊燮・田光鉉・李光鎬・李秉根・崔明玉 (2008) 『韓国言語地図』ソウル：太学社.

なお、上記以外のもののうち、多くの項目を通じて本編でしばしば言及されるものを参考までに次に掲げておく。なお、日本の読者のために、著者名、書名、出版社名で漢字表記が可能なものは漢字に直して表記した。

韓国精神文化研究院語文研究室編 (1987–1995) 『韓国方言資料集』全9巻. 城南：韓國精神文化研究院.

姜吉云 (2010) 『比較言語学的語源辞典』ソウル：韓国文化社.

金敏洙 (1997) 『우리말語源辞典』ソウル：太学社.

金武林 (2012) 『韓国語語源辞典』ソウル：知識と教養.

金泰均編著 (1986) 『咸北方言辞典』ソウル：京畿大学校出版局.

金履浹編著 (1981) 『平北方言辞典』城南：韓国精神文化研究院.

玄平孝 (1962, 修正版 1985) 『済州島方言研究』(資料篇・論考篇) ソウル：二友出版社.

- 国立国語研究院 (1999) 『標準国語大辞典』 ソウル：斗山東亜.  
 崔鶴根 (1978) 『韓国方言辞典』 ソウル：玄文社.  
 崔鶴根 (1990) 『増補 韓国方言辞典』 ソウル：明文堂.  
 志部昭平 (1990) 『諺解三綱行実図研究』 東京：汲古書院.  
 李基文 (1991) 『国語語彙史研究』 ソウル：東亜出版社.  
 李基文 (1998, 修正版 2002) 『新訂版 国語史概説』 ソウル：太学社.  
 劉昌惇 (1964) 『李朝語辞典』 ソウル：延世大学校出版部.  
 한글학회 (1991) 『우리말큰사전』 ソウル：語文閣.

なお、上記のうちで『標準国語大辞典』は現在ではオンライン版が最新のものとなっている。また、標準語形でないものはオンラインで公開されている『우리말샘』もしばしば参照したことを付記しておく。

#### ▶調査地点一覧

番号は『朝鮮語方言の研究』下巻 15–20 頁に基づくが、そこで漏れている地点については、\* を表示した。各地点の行政上の所属が現在とは異なる場合があるが、これもすべて『朝鮮語方言の研究』に基づく。

##### 全羅南道 (済州島を含む)

- |       |       |       |       |       |       |       |
|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| 1 済州  | 2 城山  | 3 旌義  | 4 西歸  | 5 大靜  | 6 突山  | 7 麗水  |
| 8 光陽  | 9 順天  | 10 筏橋 | 11 高興 | 12 寶城 | 13 長興 | 14 康津 |
| 15 莞島 | * 智島  | 16 海南 | 17 珍島 | 18 靈岩 | 19 木浦 | 20 咸平 |
| 21 靈光 | 22 羅州 | 23 和順 | 24 光州 | 25 長城 | 26 潭陽 | 27 玉果 |
| 28 谷城 | 29 求禮 |       |       |       |       |       |

##### 全羅北道

- |       |       |       |       |       |       |       |
|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| 30 雲峰 | 31 南原 | 32 淳昌 | 33 井邑 | 34 高敞 | 35 扶安 | 36 金堤 |
| 37 裡里 | 38 群山 | 39 全州 | 40 任實 | 41 長水 | 42 鎭安 | 43 茂朱 |
| 44 錦山 |       |       |       |       |       |       |

##### 慶尚南道

- |       |       |       |       |       |       |       |
|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| 45 蔚山 | 46 梁山 | 47 東萊 | 48 釜山 | 49 金海 | 50 馬山 | 51 巨濟 |
| 52 統營 | 53 固城 | 54 咸安 | 55 宜寧 | 56 晋州 | 57 泗川 | 58 南海 |
| 59 河東 | 60 山淸 | 61 咸陽 | 62 居昌 | 63 陝川 | 64 昌寧 | 65 密陽 |

##### 慶尚北道

- |       |       |       |       |       |       |       |
|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| 66 淸道 | 67 慶山 | 68 永川 | 69 慶州 | 70 浦項 | 71 興海 | 72 盈徳 |
| 73 大邱 | 74 高靈 | 75 星州 | 76 倭館 | 77 知禮 | 78 金泉 | 79 善山 |
| 80 軍威 | 81 義城 | 82 尚州 | 83 咸昌 | 84 聞慶 | 85 醴泉 | 86 安東 |
| 87 榮州 | 88 乃城 | 89 英陽 | 90 青松 | 91 道洞 |       |       |

##### 忠清南道

- |       |       |       |       |       |       |       |
|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| 92 大田 | 93 公州 | 94 論山 | 95 江景 | 96 扶餘 | 97 鴻山 | 98 青陽 |
|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|

99 舒川	100 藍浦	101 大川	102 保寧	103 炭浦	104 廣川	105 洪城
106 海美	* 葛山	107 瑞山	108 唐津	109 沔川	110 禮山	111 溫陽
112 天安	113 鳥致院					
忠清北道						
114 清州	115 報恩	116 沃川	117 永同	118 鎭川	119 陰城	120 槐山
121 忠州	122 丹陽	123 堤川				
京畿道						
124 平澤	125 安城	126 水原	127 龍仁	128 利川	129 驪州	130 楊平
131 廣州	132 京城	133 永登浦	134 仁川	135 金浦	136 江華	137 開城
138 長湍	139 汶山	140 議政府	141 漣川	142 抱川	143 加平	
江原道						
144 歙谷	145 通川	146 長箭	147 高城	148 杆城	149 襄陽	150 注文津
151 江陵	152 三陟	153 蔚珍	154 平海	155 旌善	156 寧越	157 平昌
158 原州	159 橫城	160 洪川	161 春川	162 華川	163 楊口	164 麟蹄
165 淮陽	166 金化	167 鐵原	168 平康	169 伊川		
黃海道						
170 金川	171 延安	172 海州	173 甕津	174 苔灘	175 長淵	176 松禾
177 殷栗	178 安岳	179 信川	180 載寧	181 沙里院	182 黃州	183 瑞興
184 南川	185 新溪	186 遂安	187 谷山			
咸鏡南道						
188 新高山	* 高山	189 安邊	190 元山	191 德源	192 文川	193 高原
194 永興	195 定平	196 咸興	197 五老里	198 新興	199 洪原	200 北青
201 利原	202 端川	203 豐山	204 甲山	205 惠山	206 三水	207 長津
咸鏡北道						
208 城津	209 吉州	210 明川	211 鏡城	212 羅南	213 清津	214 富居
215 富寧	* 烟台洞	216 茂山	* 明臣	217 會寧	218 鍾城	219 穩城
220 慶源	221 慶興	222 雄基				
平安南道						
223 中和	224 平壤	225 鎭南浦	226 龍岡	227 江西	228 江東	229 成川
230 陽德	231 孟山	232 寧遠	233 德川	234 价川	235 順川	236 順安
237 永柔	238 肅川	239 安州				
平安北道						
240 博川	241 寧邊	242 熙川	243 雲山	244 泰川	245 龜城	246 定州
247 宣川	248 鐵山	249 龍岩浦	250 新義州	251 義州	252 朔州	253 昌城
254 碧潼	255 楚山	256 渭原	257 江界	258 慈城	259 厚昌	

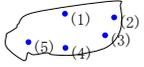
次頁に上記の地点番号を示す地図を掲載する。1-259 までの番号は小倉進平によるものと同じであり、上で述べたように、\* で表示した筆者が追加した 5 地点はそれに続く 260-264 の番号を次のように割り当てて表示してある。

咸北：260 烟台洞，261 明臣，咸南：262 高山，全南：263 智島，忠南：264 葛山



(91)

0 100km





# 暁

福井玲

## 1 はじめに

この項目は小倉進平 (1944: 上 4-5) では「天文」の中で「暁」(あかつき)という項目名で扱われ、全部で9個の語形が記録されている。現在の韓国の標準語は새벽であるが、これは『標準国語大辞典』では次のように定義されている。

- (1) 먼동이 트려 할 무렵. = 효단, 효신. 「東の空が明るくなる頃。暁旦，暁晨。」
- (2) (주로 자정 이후 일출 전의 시간 단위 앞에 쓰여) ‘오전’의 뜻을 이르는 말. 「(主に子正以後，日の出前の時間の単位の前に使われて)「午前」の意味を言う言葉。」

(1) は日本語の「夜明け，明けがた」にあたり，(2) は現代日本語では普通用いられないが，「古くは夜半過ぎから明け方までをさした」(三省堂『大辞林』)とあるように古い日本語では用いられた。しかし，どちらもやや文語的で日常語としてはさほど使われないが，韓国語の새벽は日常的に普通に使われるという点は異なる。

## 2 語形の分類

小倉進平のデータに見られる9個の語形はすべて2音節語で，第1音節はすべての語形においてseであり，第2音節は必ずbで始まっている。違いは第2音節の母音と，第2音節末の子音kの有無のみである。語形の分類は，第2音節の母音の種類，第2音節末の子音kの有無，という2つの観点から行なうことができる。

### 分類1

- (1) se-bjɔk, se-bɔk
- (2) se-bok, se-buk
- (3) se-be, se-bi, se-be, se-bek
- (4) se-bak

### 分類2

- (1) se-bjɔk, se-bɔk, se-bok, se-buk, se-bek, se-bak
- (2) se-be, se-be, se-bi

### 3 その他の語形

この項目に関しては全羅南道および済州島のデータが含まれていないが、玄平孝 (1962, 修正版 1985)によると, 全域について se-be と se-bek という語形が見られる。se-bek は小倉進平のデータには見られないものである。

### 4 語形の地理的分布

まず, 標準語形の se-bjok は京畿道, 黄海道, 江原道, 忠清道など, 主に半島中央部で多く使われている。これに対し, 平安道, 咸鏡道などの北部地域ではもっぱら se-bak が使われている。またこの語形は慶尚北道の一部でも使われている。一方, 全羅道, 慶尚道などの南部地域では, まず, se-bok が忠清南道, 全羅北道, 慶尚北道と, 慶尚南道の1箇所に見られるほか, se-bok, se-buk という語形が忠清道, 慶尚道および江原道の海岸沿いに見られる。また, 語末子音 k を伴わない se-be, se-be, se-bi などの語形は慶尚道にのみ見られる。この他に, se-bek という語形が江原道と慶尚北道のそれぞれ1地点に見られるが, これは se-be とのつながり, あるいは se-bak のウムラウト形という2つの可能性が考えられる。この語形の分布領域は se-bak の地域に属するので, 後者の可能性が高いのかもしれない。

### 5 過去の文献上の記録

一方, 過去の文献上の記録を見ると, 새박, 새배, 새베, 새벽, 식벽, 식배という都合6種類の語形が見られるが, 15~16世紀の中世語の段階では, 새박と새배のみが見られる。現代の標準語形につながる새벽という語形の出現は遅く, 18世紀以降の文献から見られるようになる。また, 第1音節の母音が식と表記された식벽, 식배という語形も存在するが, それらは18世紀末以降に見られる<sup>1</sup>。

演若達多 | 문득 새바기 거우루로 나출 비치오 (演若達多忽於晨朝以鏡照面)

<1465 円覚経諺解序 46b>

門 뒤희 가 새바기 省히더라 公綽이 스스일 결단히며 (皆東帶晨省於中門北)

<1588 小学諺解 6:95a>

우므리 새배 어렛고 오시 업스니 (井晨凍無衣) <1481 杜詩諺解 3:25a>

취머리 스론 곶을 새배 늬 아니 기러셔 몬져 기론 우므르레 <1489 救急簡易方 7:29a>

長樂에 鍾이 울매 새벽 殿이 열리니 (長樂鍾鳴曉殿開) <1721 伍倫全備諺解 3:12a>

우리 새벽에 적이 밥 먹고 <1741 蒙語老乞大 3:20b>

형실이 남다르오셔 날마다 식벽이면 스우의 죄읍스오시고 <1796-1805 恨中錄 12>

<sup>1</sup> このうち, 식배は『李朝語辭典』に18世紀の『女四書諺解』の用例(卷2:13)として1例挙がっているが, 筆者は影印本においてこの例を確認することができなかった。

これらの語形のうち、用例未確認のㅅㅂ을を除く 5 つの語形を出現する時代順に並べると次のようになる（△は用例数が非常に少ないもの）。

	15世紀	16世紀	17世紀	18世紀	19世紀	20世紀
새ㅅㅂ	○	○	○	○	△	
새ㅅㅂ	○	○	○	○	○	
새ㅅㅂ			○	○		
새ㅅㅂ				○	○	○
ㅅㅂ				△	○	○

語形の分類については、こうした歴史的な背景を踏まえて、次のような新たな分類を行なうこともできる。ただし se-bok と se-buk の位置づけは課題として残される。

### 分類 3

- (1) (a) se-bak, (b) se-bek
- (2) (a) se-be, (b) se-be, (c) se-bi
- (3) (a) se-bjok, (b) se-bok
- (4) (a) se-bok, (b) se-buk

なお、実際の用例をみると、さまざまな課題が浮かび上がる。まず、새ㅅㅂは用例が少ないのに対し、새ㅅㅂは『杜詩諺解』(1481)、『救急簡易方』(1489)などに大量の例が見られる。また、새ㅅㅂには処格助詞が付いた形が見られず、これ自体で副詞のように使われている。

## 5 考察

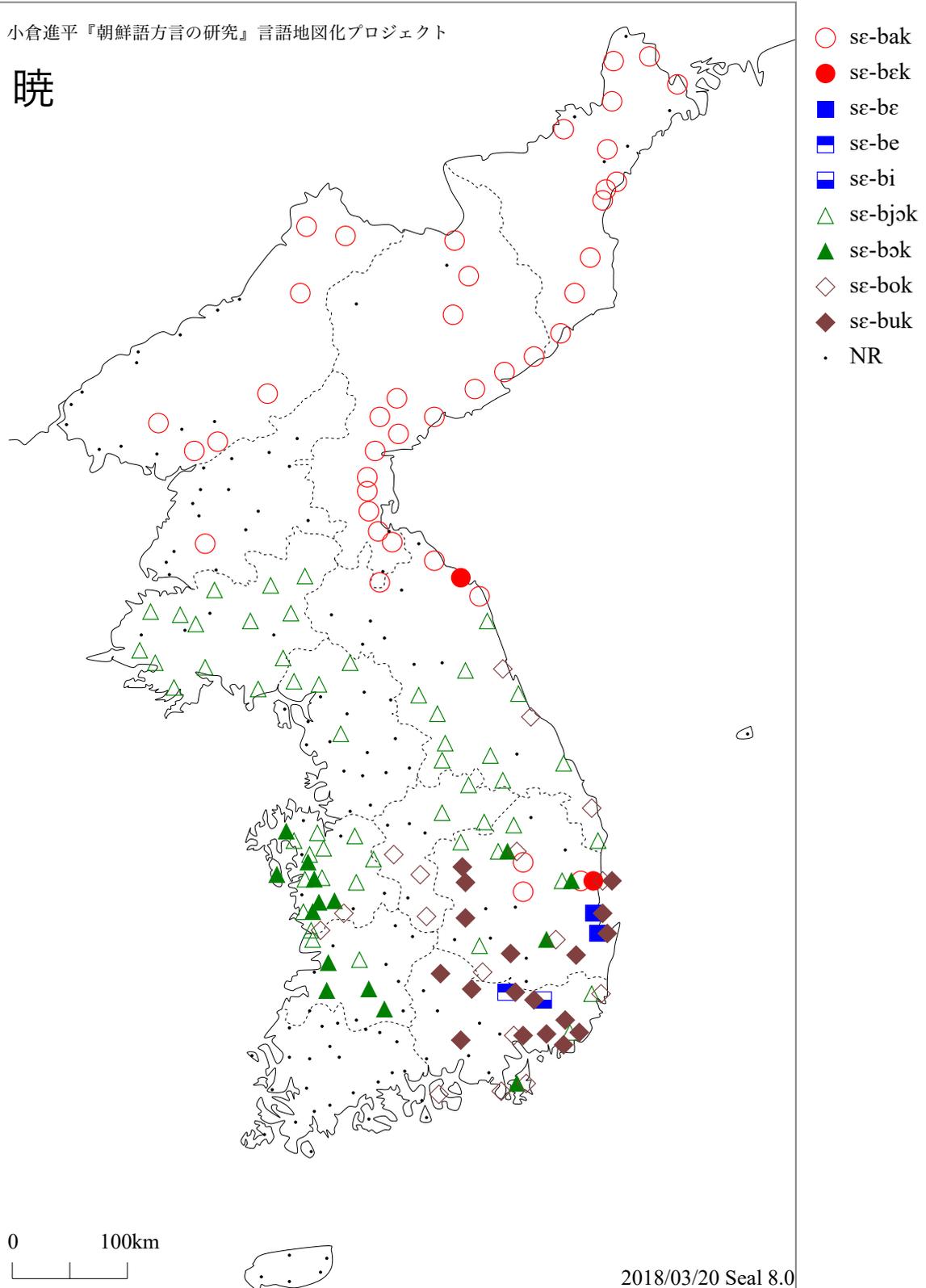
共時的な語形の分類だけでは分からなかった重要な点は、まず、この語形の古い形が새ㅅㅂと새ㅅㅂの2つであることが地理的分布に反映していることである。まず北部地域に幅広く se-bak が見られ、慶尚道に se-be およびそれに近い語形が見られるのに対し、半島の中央部には se-bjok が見られる。すなわち半島の周辺に見られる se-bak と se-be が古い語形の残存するものであることが、地理的分布の面からも裏付けられる。

となると、現在の標準語形 se-bjok がどのようにして成立したのかが課題となる。18世紀頃にできた語形と考えられるが、それより古い se-bak と se-be をもとにしつつ、漢字語「開闢(개벽)」への類推によって新たに作られたものかもしれない。

### 参考文献

玄平孝 (1962, 修正版 1985) 『済州島方言研究』(資料篇・論考篇) ソウル：二友出版社。

# 暁



## 夕焼け

福井玲

### 1 はじめに

日本語の「夕焼け」にあたる韓国語の標準語は노을である。ただし, 노을は「夕焼け」と同義ではなく, 『標準国語大辞典』による定義で “해가 뜨거나 질 무렵에, 하늘이 햇빛에 물들어 벌겍게 보이는 현상.” (日の出や日の入りの頃に空が日光に染まって赤く見える現象) とあるように, 日本語の「朝焼け」と「夕焼け」を含んでいる。以下では韓国語の노을を基準として考察する。

小倉進平 (1944: 上 8-9) では「天文」の中の「夕焼け」という項目で都合 20 個の語形が記録されている。

### 2 語形の分類

大きく分けると no:l 系と puk-se 系の 2 つに別けられるが, その他に特定の地域でのみ使われる u-ne と he-dzi-gi という語形も存在する。また, no:l 系と puk-se 系はそれぞれ多くのバリエーションが存在し, 後で述べるように, その中には語源的に異なるものが混じっている可能性もあるが, ここではひとまずこの形にまとめておく。(1a)は no:l およびそれに類似した語形である。第 1 音節の母音は o と u の両方の場合がある。現在の標準語形노을は現れないが, no:l がそれにもっとも近い。(1b)は第 1 音節と第 2 音節の間に b, g, ŋ という子音を含むものである。(1c)は第 1 音節の母音が a であるものである。(2a)は puk-se のように第 1 音節に puk を含むもの, (2b)は第 1 音節に pul を含み, 第 2 音節が se であるもの, (2c)は第 1 音節に pul を含む点では(2b)と共通するが, 第 2 音節以降は(2a),(2b)とは異なるものである。(3), (4)はそれぞれ 1 種類の語形しか存在しない。

#### (1) no:l 系

(1a) no:l, no:-ri, no-o-ri, nu:-ri

(1b) no-bul, nu-bu-ri, ni-bu-ri, nu-gu-ri, noŋ-o-ri

(1c) na-bul, na-bu-ri, na-o-ri, na-o-rɛŋ-i

#### (2) puk-se 系

(2a) puk-se, ?puk-sal

(2b) pul-se, ?pul-se

(2c) pul-go-dzi

#### (3) u-ne

#### (4) he-dzi-gi

### 3 その他の語形

『韓国言語地図』には、小倉進平のデータにはない語形として、忠清道に *noŋ-il/ol/ul/ol* (表記はいずれも小倉進平方式に直す) などが見られる他、忠清南道の 1 地点に *no-il*、済州島の 1 地点に *hwaŋ-on* (漢字語の「黄昏(황혼)」に由来する) が見られるが、全体的にそれほど大きな違いはない。

### 4 語形の地理的分布

まず、(1)の *no:l* 系は北部方言と中部方言を中心として分布し、さらに忠清北道、慶尚北道にも及んでいる。その中でも(1a)は京畿道、平安道、黄海道、江原道、忠清北道と慶尚北道の一部に分布し、(1b)は咸鏡道を中心に分布する。後者の中で第 1 音節末に軟口蓋鼻音を含むもの (*noŋ-o-ri*) は忠清北道に 1 地点(永同)のみ見られる。ただし『韓国言語地図』ではそれが忠清道から江原道にかけて、もう少し多く分布している。(1c)の第 1 音節に母音 *a* を含むものは慶尚北道を中心に分布し、その他に咸鏡南道最南端と、江原道の最南端に見られる。

次に、(2)の *puk-se* 系は全羅道と慶尚南道を中心に分布し、(2b)の *pul-se* は慶尚道の海岸部、(2c)の *pul-go-dzi* は黄海道に分布する。また、(3)の *u-ne* は慶尚北道に 1 地点(慶州)見られるのみであり、(4)の *he-dzi-gi* は済州島にのみ見られる。

### 5 過去の文献上の記録

過去の文献上の記録を見ると、中世語から近代語にかけて *no:l* 系の語形がいくつか見られるが用例数はそれほど多くない。16 世紀前半は *노을*、16 世紀後半以降は *노을* の形が最も普通に見られ、これが小倉進平のデータの *no:l* に対応すると思われる。なお、「霞」という漢字は日本の訓読みでは「かすみ」、即ち靄か霧のようなものを指すが、この字の本来の意味は韓国語の *노을*、日本語で言えば「夕焼け」と「朝焼け」を意味する。

霞 노을 하 <1527 訓蒙字会上 1b>

霞 노을 하 <1576 新增類合上 4a>

早霞 아츰 노을 晚霞 저녁 노을 <1690 訳語類解上 2a>

霞 노을 火雲 노을 <1790 蒙語類解上 1b>

その反面、(1b)のように語中子音を持つ例や、(1c)のように第 1 音節に母音 *a* を持つ用例は見られない。ただし、(1c)については、意味は上記のような *노을/노을* とは異なるが、次のような例に見られる *노을*、*나을* という語と何らかの関係があるのかもしれない。これは「炎」や「炎のように明るい花、金属」を意味する。

그 고지 노을 붉고 貴흔 光明이 잇더라 <1447 釈譜詳節 11:31b>

紫金은 노을 붉곤 金이라 <1459 月印釈譜 4:34b>

(河瀬幸男 (2010) 訳「紫金とは炎のように鮮やかな金である。」)

靈령흔 붉 나오리 빛나 (靈焰烜赫) <1482 金剛經三家解 3:29b>

この中で、『月印釈譜』の例(노을 붉곤)は、붉곤の頭子音が摩擦音化を起こしている点で興味深い。直前の노을と合わさって一語化していたものと考えられる。

次に、puk-se 系の語形は 19 世紀末の『韓仏字典』に見られる次の用例が最も早いものと思われる。

紅雲 복새 <1880 韓仏字典 340>

それ以外の語形は今のところ文献上には見られないようである。

## 6 考察

現在の標準語である노을は文献上もっとも古い 16 世紀初めの『訓蒙字会』の用例が確認できるが、それと(1)の no:l 系の他の語形との関係は不明である。あるいは(1b)のように第 1 音節と第 2 音節の間に子音がある語形がより古い可能性も考えられるが、文献上は確認できない。ただし、そもそも中世語では母音連続 (hiatus) をもつ語形が稀であることを考えると、そうであった可能性も否定はできない。また、(1c)の na-o-ri などは一部の地域で、上にあげた「炎」を意味する別語が転用されたものかもしれない。

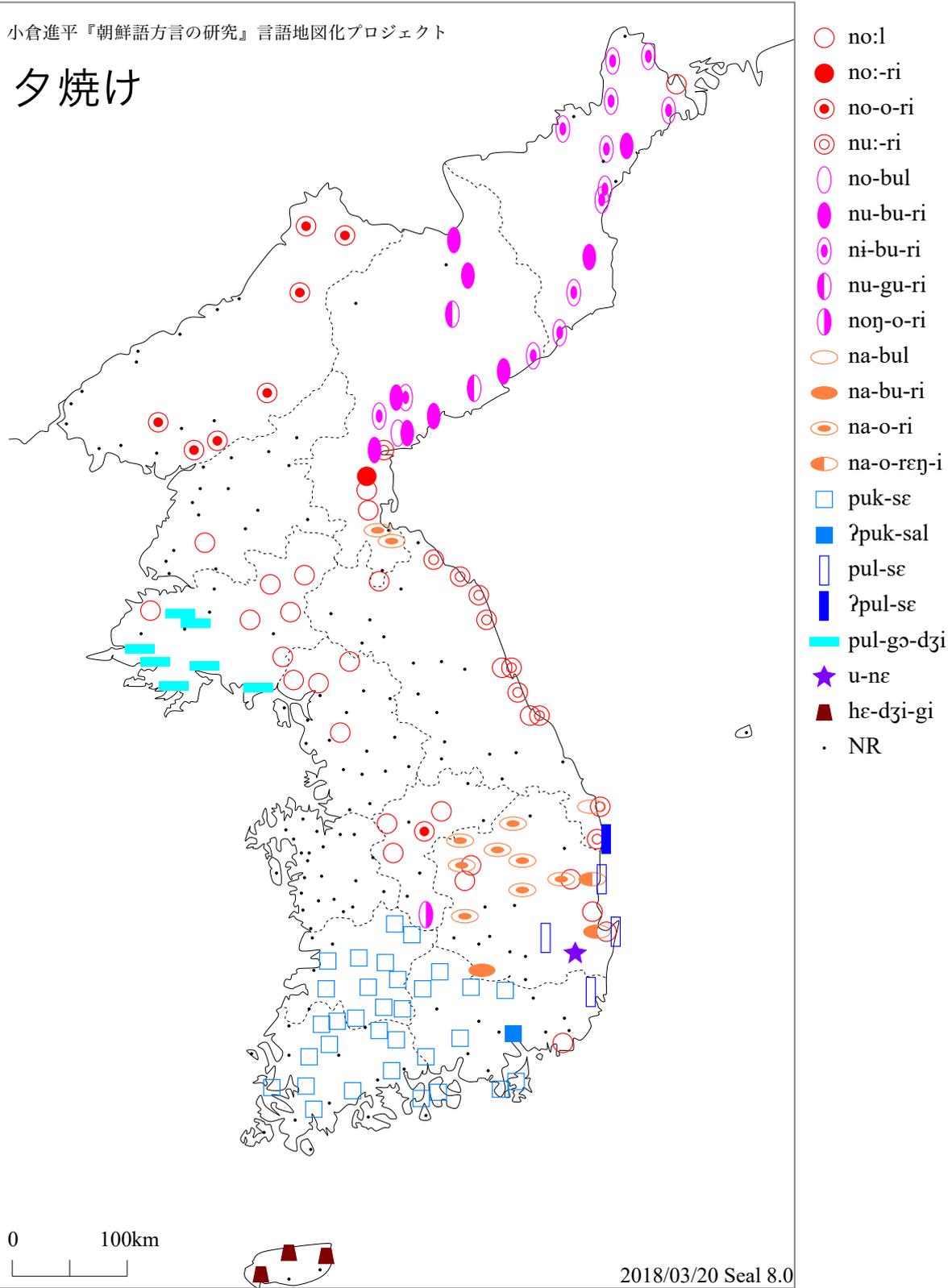
これに対して、puk-se 系の語形は文献上の記録も少なく、語源は不明であるが、(2a)のように puk で始まるものと、(2b), (2c)のように pul で始まるものが共存するところから考えると、「赤」を意味する色彩形容詞の purk-(中世語では pirk-) という語根との関係が考えられる。

その他の語形については、濟州島の he-dzi-gi は「日没」の意味であると思われるが、もう 1 つの u-ne は由来は未詳である。

## 参考文献

河瀬幸男訳 (2010) 『釈譜詳節』上下 横浜：春風社。

# 夕焼け



## 陽炎 (かげろふ)

立川 真理恵

### 1 はじめに

韓国の標準語は a-dʒi-raŋ-i (아지랑이) であり、これにあたる語は『朝鮮語方言の研究』の「天文」に「陽炎 (かげろふ)」という項目名で 14 種記録されている (上: 9-10)。『표준국어대사전』(以下『표준』)では「주로 봄날 햇빛이 강하게 쬐 때 공기가 공중에서 아른아른 움직이는 현상」(主に春, 陽射しが強く照りつける時に空気が空中でゆらゆらうごめく現象) と定義されている。これらの語形は第一音節の音素によって以下の 3 系統に分類できる。

#### (1) a-系

(1a) a-dʒi 系: a-dʒi-rɛŋ-i / a-dʒi-rɛ-i / a-dʒi-raŋ-i / a-dʒi-ra-mi

(1b) a-si 系: a-si-rɛŋ-i / a-si-rɛŋ-i

(1c) a-mi 系: a-mi-rɛ-mi / a-mu-rɛ-mi

#### (2) seŋ-系

seŋ-dɛŋ-i / seŋ-dɛ / seŋ-dɛŋ / seŋ-daŋ-i

#### (3) その他

sam-sɛ-mi / an-ge

(1) a-系は第二音節の子音の種類(dʒ/s/m)によって更に 3 つに分けられる。また, (2) seŋ-系には第一音節が seŋ である語形, (3)その他には sam-sɛ-mi 及び an-ge を分類した。

### 2 その他の語形

『韓国方言資料集』では, 뱃가랑이/뱃마맹이/아지랭이 (濟州島), 땀뽀/뽀 (江原道), 알랑개미/알랑개비/알랑개비/아리사리 (慶尙北道), 아지래기/아시래기/아라랭이/운애 (慶尙南道), 애매미 (全羅北道), 삼사미/삼세미/땅찌개 (全羅南道)などが見られる。なお, 同書では小倉進平のデータにおける an-ge が見当たらない。

### 3 地理的分布

(1)のうち, (1a) a-dʒi 系は咸鏡北道及び濟州島を除いた地域に広く分布する。現在の標準語 a-dʒi-raŋ-i は京畿道, 黄海道及び嶺東方言地域に見られ, 咸鏡南道, 慶尙南道, 全羅道の一部にも見られる。また, a-dʒi-rɛŋ-i は半島南部全域に広く見られるほか, 平安道, 黄海道,

江原道, 咸鏡南道の一部にも分布する。その他, a-dʒi-re-i が黄海道沿岸に, a-dʒi-ra-mi が慶尚北道の 1 地点に見られる。なお, (1b) a-si 系は忠清南道の西部に集中しており, (1c) a-mi 系のうち a-mu-re-mi が咸鏡南道の南部に, a-mi-re-mi が江原道の 1 地点で確認できる。

次に, (2) の seŋ-系はいずれの語形も咸鏡道に分布する。このうち, 第二音節が ε である語形は咸鏡道全域に見られ, seŋ-daŋ-i が分布するのは咸鏡北道の 2 地点のみである。また, (3) の sam-se-mi は慶尚南道及び全羅南道の一部地域に, an-ge は濟州島に見られる。

#### 4 文献上の記録

文献上最も古い語形は a-dʒi-raŋ-i で, 主に 18 世紀以降の文献に現れた。いずれも辞典や類積本の類の文献で, 「靄」「野馬」「游絲」等の漢字が訳語として記載されている。

아즈랑이 애靄 <1781 倭語類解 上 02b>

野馬 아즈랑이 <1778 方言類積 申部方言 5b>

游絲 아즈랑이 <1790 蒙語類解補 1b>

また, 現在の標準語である a-dʒi-raŋ-i は 19 世紀末以降から見られるようになった。

아지랑이 遊絲 野馬 <1895 国漢会語 202>

(1) の a-si 系と a-mi 系, (2) seŋ-系及び (3) の sam-se-mi は文献上に現れなかった。なお, an-ge は一般的に「靄」を意味するが, 以下の文献では「靄」の漢字が充てられていた。

안개 하 (靄) <1664 類合 3a>

#### 5 考察

文献上の記録に基づくと, 近代語から現代語の間に a-dʒi-raŋ-i > a-dʒi-raŋ-i の変化が生じたことが説明できる。いずれの語形も中期語の用例が見られないため, 通時的な音韻変化は不明である。しかし, 『韓国方言資料集』と小倉進平のデータを比較すると約 50 年の間に生じた方言形の変化を見ることができる。特に顕著なのが a-dʒi-raŋ-i > a-dʒi-reŋ-i の拡大である。小倉の地図では a-dʒi-raŋ-i が比較的広く分布していたのに対し, 『韓国方言資料集』では연천及び고양地域等の一部地域に範囲が縮小しており, その他の地域には a-dʒi-reŋ-i が分布している。このことから a > ε の現象が小倉の時期よりも活発化していることが分かる。

更に, 形態的には大半が〈形態素+接尾辞〉の形になっている。例えば, (1a) の a-dʒi-raŋ-i は〈形容詞語幹 a-dʒil+接尾辞 aŋ-i〉による語形と考えられる。形容詞아질하- (a-dʒil-ha-) の古形である아질하- (a-dʒal-ha-) は主に中期語の文献に現れる。この語の第二音節は ʌ > i の変化を経た後, 前舌高母音化によって i > i に変化した。아지랑이의 語源を〈a-dʒil+aŋ-i〉

と見る場合、少なくとも第二音節の  $i > i$  が起きる前後には生成が生じていたと考えることが出来る。また, 아무래미や아므래미は形容詞아물거리-, 아스랭이や아시랭이는形容詞아슬하-の語幹に接尾辞がついた語形ではないかと推測される。

ここで, これらの派生名詞の構成要素について考えると, いずれも視覚的な捉え方と関係がある用言語幹に接尾辞が接続した語形であることが分かる。例えば, 아질하- (<아질하-) は眩暈がしたりくらくらしたりする様子を表す。この時, 知覚者における「見方」に焦点を置くと, 「眩暈がする」ことや「くらくらする」ことは「視界の歪みやぼやけ」という視覚的な特徴と時間隣接の関係にある。一方, 陽炎が発生した場合もその先の風景が歪んだりぼやけたりして見えることから, 両者の背景にはメトニミー (換喩) 的な拡張関係の存在が考えられる。同様に, 아물거리- (意味: 작거나 희미한 것이 보일 듯 말 듯하게 조금씩 잇따라 움직이다) や아슬하- (意味: 아찔아찔할 정도로 높거나 낮다) についても, それぞれ「対象物がぼやけて見える様子」や「眩暈がするほど高い・低い様子」を表す(『표준』)。このことから, 朝鮮語における「陽炎」を表す方言形の多くは〈視覚関連の用言語幹+接尾辞〉という派生によって成立した可能性が高いといえる。

一方, 濟州島で an-ge が「陽炎」を指すことに関しては, 近代語の an-ge が「霧」と「靄」の意味を内包していたことから, 元来の an-ge が「空気中の水蒸気が飽和状態になり微細な水滴となった様子」を広く示す語であったことと関係があるのではないかと考えられる。なお, 形態的に見ると sam-se-mi 及び seŋ-系 も接尾辞が後続した語形と考えられるが, 具体的な語源は不明である。

## 参考文献

국립국어연구원 (1999) 『표준국어대사전』 서울: 두산동아.

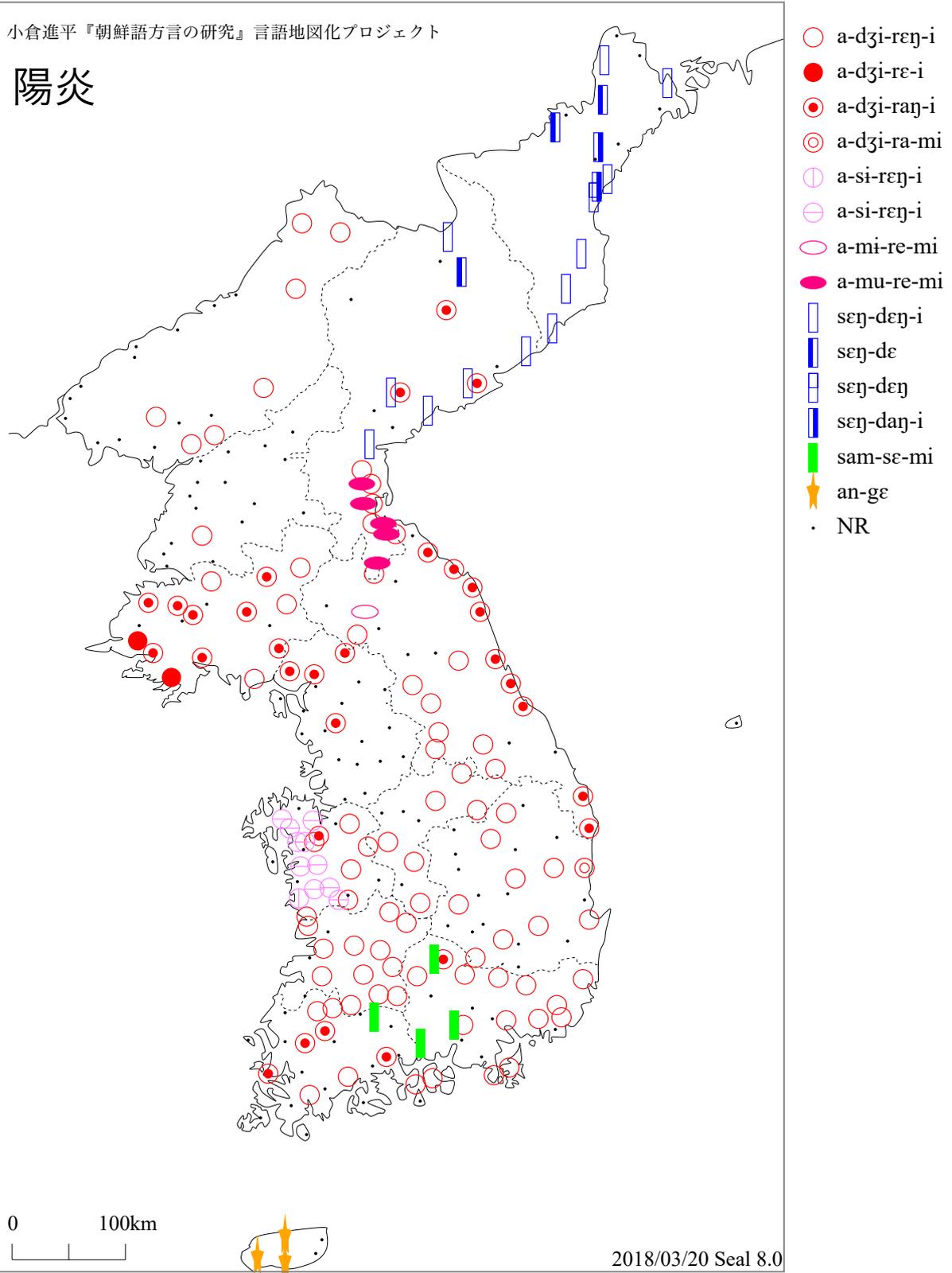
劉昌惇 (1964) 『李朝語辭典』 서울: 延世大學校出版部.

박상규 (2012) 『新滿洲語大辭典』 서울: 集文堂.

韓國精神文化研究院 (1987-1995) 『韓國方言資料集』 城南: 韓國精神文化研究院.

刘厚生 他編 (2005) 『漢滿辭典』 北京: 民族出版社.

# 陽炎



## 村落

堀内唯

### 1 はじめに

韓国語の標準語は ma-il(마을)である。これにあたる語は『朝鮮語方言の研究』の「地理・河海」に「村落」という項目名で11種の語形が記録されている(上:27-28)。これら11種類の語形には1音節語と2音節語があり、第1音節の母音 a / ʌ / o / ɔ の4種類によって(1) ma-系, (2) mʌ-系, (3) mo-系, (4) mɔ-系の4つに分類することができる。

#### (1) ma-系

(1a) ma-sil / ma-sil

(1b) ma-ul

(1c) ma:l

#### (2) mʌ-系

(2a) mʌ-sul / mʌ-sil

(2b) mʌ-ul

#### (3) mo-系

(3a) mo-sul / mo-sil

(3b) mo:l

#### (4) mɔ-系

mɔ:l

(1) ma-系と(2) mʌ-系の語形は、さらに第2音節が‘s’で始まる語形(1a)(2a)とそうでない語形(1b)(2b)に分けられる。(1a)の語形は語中母音に i / i の2種類がみられ、(2a)の語形は語中母音に u / i の2種類がみられる。また、(1) ma-系の語形は1音節語(1c)もみられた。

(3) mo-系の語形は、2音節語(3a)と1音節語(3b)に分けられる。(3a)の語形は第2音節が‘s’で始まり、語中母音に u / i の2種類がみられる。

(4) mɔ-系の語形は、1音節語の mɔ:l のみがみられた。

ここで、これら11種の語形のうち ma-ul, mʌ-sul, mʌ-ul, mo-sul の4つの語形の第2音節の母音 u が、小倉進平の表記原則におけるハンゲルのㄹを表す記号である上点つきの u の上点が付けられていない誤記である可能性が高い。その理由は次の通りである。

・小倉進平の記録の中には、標準語の ma-il の語形のように第2音節の母音が i で現れている語形が全羅南道の一つの地点でしかみられなかったため。

・『韓国語方言資料集』や『平北方言辞典』、『済州島方言辞典』等、多くの辞典や資料集に上の4つのような語形はみられなかったが、この4つの語形の第2音節の母音がuではなくiで現れている語形が多くみられたため。

## 2 その他の語形

小倉進平の『朝鮮語方言の研究』では平安道のデータが少なかったが、『平北方言辞典』の「마을」の項目には모을という語形がみられた。『咸北方言辞典』の「마을」の項目には마랑と오래のような語形がみられた。そのほか、「隣家に遊びに行く」という意味で使われる「마을 가다」の項目には「마실 가다」のような語形もみられた。また、『韓国方言資料集』の慶尚北道の資料の「마을」の項目には, 마のような語形がみられた。

## 3 語形の地理的分布

(1b)の ma-ul の語形は, 全羅道, 忠清道, 江原道, 京畿道, 咸鏡道, 平安北道に広く分布する。第2音節が's'で始まる(1a)(2a)(3a)の語形は, 全羅道や慶尚道の南部地域に多く分布する。また, 1音節語の (1c)(3b)(4) の語形は, (1c) ma:l と(3b) mo:l は黄海道を中心に京畿道, 咸鏡道, 平安道に広範囲に分布するが, (4) mo:l は黄海道の延安にのみ分布する。‘ʌ’を含む(2)の ma-系語形の語形は済州地域にのみ分布する。

## 4 過去の文献上の記録

ma-il の文献上最も古い語形は마늘 ma-zʌlh で, 日本語で「秋」という意味の ka-il の最も古い語形である ka-zʌlh と非常によく似た語形である。休止の前や子音で始まる助詞の前では「ㅎ」が脱落し, 「마늘」で現れる。ここでは『釈譜詳節』(1447)と『月印釈譜』(1459)にある例を示す。

舍利弗이 날오되 마슬히 멀면 乞食히디 어렵고 <1447 釈譜詳節 6:23b>

여선 小國과 八百 마슬홀 가젼더시니 <1459 月印釈譜 22:15b>

16, 17 世紀には, 小倉進平の項目の中には無かったが, 모을や모을, 마을などの語形が多くみられた。

그 남으닐난 형테을 준대 모을 사름이 날오되 <1581 続三綱行実図考 22a>

좁은 모을히 이심을 사름이 그 근심을 이기디 못히거늘 <1588 小学諺解 4:47a>

京邑에 오니 마을 올모든 엇테 님금 쓰디시리오 <1632 重刊杜詩諺解 3:23a>

また, 現代の標準語である ma-il は 18 世紀から 19 世紀後半にかけて多くみられるようになるが, この時期には 모을や마을など表記上では・を維持していたと思われる語形も多く

みられた。

집이 가난하야 마을 가온대서 글을 마르티더니 <1758 種徳新編 29b>  
마을 사람이 들이지 안이문 그 예루살임을 향하여 <1887 聖教全書>

## 5 考察

文献上の記録から ma-il の語形変化について考察すると次のように変化したと考えられる。まず、第2音節の半歯音△[z]が消失する。その後第2音節の・[Λ]が一[i]に変化し、続いて第1音節の・[Λ]がト[a]に変化した形が現在の標準語の ma-il であると考えられる。北部の特に平安道や黄海道地域では、縮約された ma:l / mo:l / mo:l で発音されていたと考えられる。

mΛ-zΛlh > mΛ-Λlh > mΛ-ilh > ma-il  
> ma:l / mo:l / mo:l (北部)

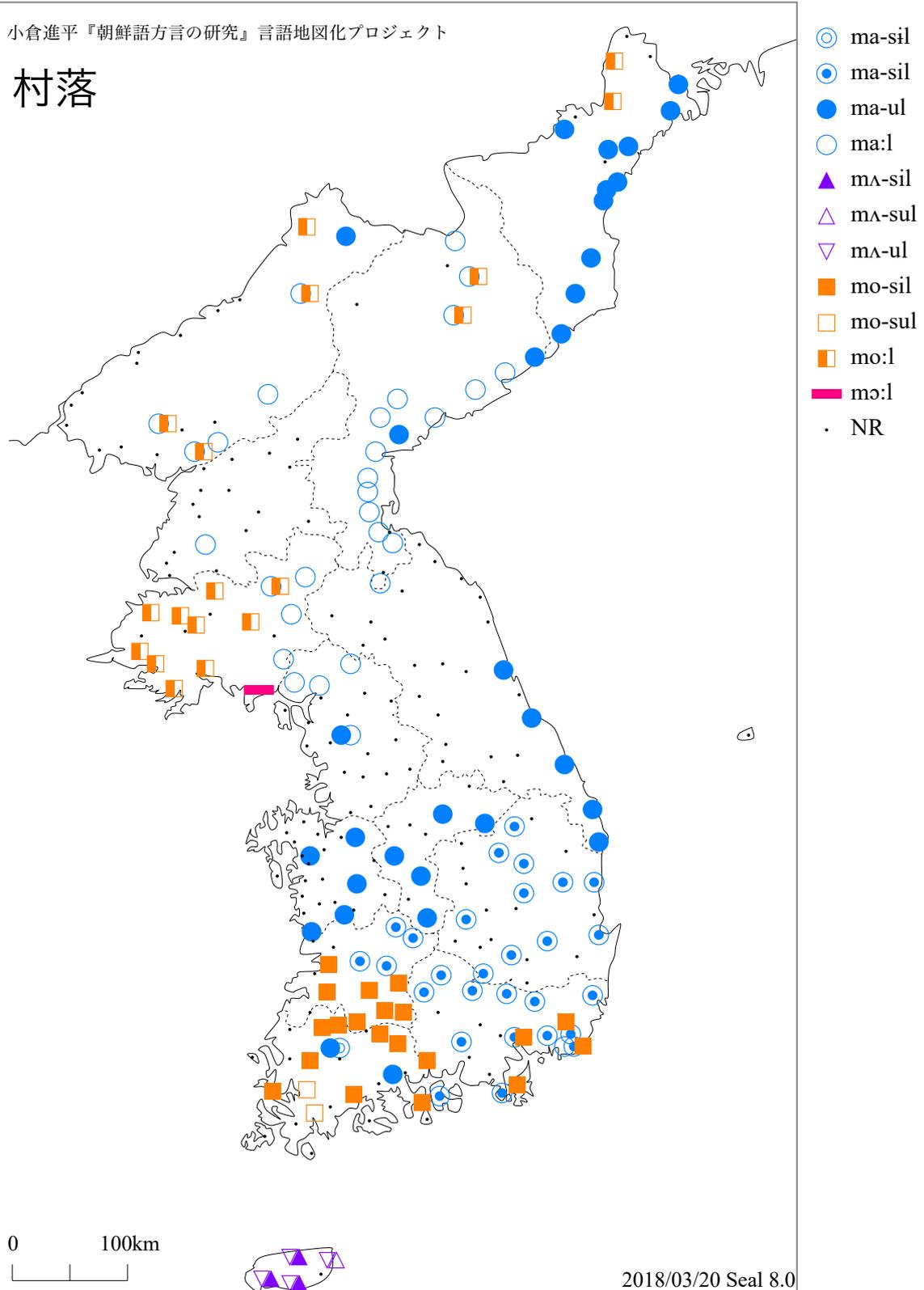
また、全羅道、慶尚道の南部地域では、第2音節の半歯音△[z]が入[s]に変化した mΛ-sΛlh を仮定することができ、そこから・[Λ]の変化が起こりその後入[s]を保持して発音されていたと考えられる。また、済州島地域では他の地域とは異なり、第1音節の・[Λ]を保持して発音されていたと考えられる。

> (mΛ-sΛlh) > ma-sil > ma-sil (南部)  
> mo-sil > mo-sil (南部)  
> mΛ-il (済州島)  
> mΛ-sil > mΛ-sil (済州島)

## 参考文献

- 金覆浹 (1981) 『平北方言辞典』城南：韓国精神文化研究院。  
李基文 (1981) 『新訂版 国語史概説』ソウル：太学社。  
金泰均 (1986) 『咸北方言辞典』ソウル：京畿大学校出版局。  
韓国精神文化研究院語文研究室編 (1987-1995) 『韓国方言資料集』全9巻。城南：韓国精神文化研究院。  
国立国語研究院 (1999) 『標準国語大辞典』ソウル：斗山東亜。

# 村落



## 丘

### 國分翼

#### 1 はじめに

韓国の標準語は *ɔn-dək* (언덕) であるが、これにあたる語は『朝鮮語方言の研究』の「地理・河海」に「丘」という項目名で13種記録されている(上:29-30)。これらは次のように4つのグループに分類することが出来る。

##### (1) *ɔn-dək* 系

(1a) *ɔn-dək/ɔn-ʔək*

(1b) *ɔŋ-dək/ɔŋ-ʔək*

(1c) *ɔ-dək*

##### (2) *tun-dək* 系

(2a) *tun-dək*

(2b) *tu-dək/tu-duk*

(2c) *tun-dɔŋ/tu-dɔn*

##### (3) *toŋ-san* 系

*toŋ-san*

##### (4) *ki-dʒək* 系

*ki-dʒək/kii-dʒɔŋ*

(1)は第1音節が母音 *ɔ* で始まるタイプの語形である。第1音節の音節末の子音が */n/* であるもの、*/ŋ/* であるもの、または開音節であるものの3種類に下位分類できる。なお、(1a)(1b)では、第2音節の初声が平音か濃音かのバリエーションが存在する。

(2)は第1音節が *tu* から始まる語形である。第1音節の終声 */n/* の有無によって、(2a)と(2b)に下位分類され、(2b)には母音の違いによるバリエーションも存在する。また、第2音節の終声が鼻音で現れるものは(2c)に分類される。

(3)は(2)と同様に、第1音節の初声が */t/* であるが、第2音節の初声が */s/* で実現される点で区別される。このタイプの語形は *toŋ-san* の1種類のみである。

(4)は第1音節が *ki* で始まり、第2音節の初声も破擦音で実現されるタイプの語形である。第1音節の母音が単母音 */i/* で現れ、かつ第2音節の終声が */k/* であるものと、第1音節の母音が二重母音 */ii/* で現れ、かつ第2音節の終声が鼻音で現れるものとの2種類が観察されている。

## 2 その他の語形

この項目では、京畿道と江原道のデータが少なく、平安南道と咸鏡北道のデータが存在しない。前者の2地域について、『韓国方言資料集』(1990, 1995)を参照すると、京畿道では大部分に 언덕이 分布するが、楊州、南楊州で接尾辞の結合した 언덕빼기 という語形が見られ、華城では 언덕이 という語形が見られることがわかる。また、江原道については、全域で 언덕이 のみが見られるという報告がされている。

また、後者の2地域について、『方言辞典』(1980), 『韓国方言辞典』(1978)を参照すると、平安南道の南浦では 채뚝 や 쉼뚝 이 という語形が見られるほか、平原では 언덕배기 が見られるとされている。咸鏡北道については、더거지가 漁郎, 새별, 恩德, 穩城, 会寧で, 영터막이 雄基でそれぞれ見られるとしている。

## 3 地理的分布

(1)の ɔn-dɔk 系は、忠清道以南の大部分と黄海道全域、江原道の東海岸地域と京畿道の4地点、済州島で確認される。このうち、(1b)は忠清南道舒川、江景と全羅道に分布し、(1c)は全羅南道の康津、潭陽の2地点で確認されている。なお、(1a)と(1b)のうち、第2音節の初声が濃音で現れるもの(ɔn-ʔtɔk, ɔŋ-ʔtɔk)は、主に全羅北道に集中するほか、慶尚南道でも東萊と釜山の2地点で

(2)の tun-dɔk 系のうち、(2a)は咸鏡南道の全域と黄海道の東部に見られる。(2b)のうち、tu-dɔk は慶尚南道と全羅南道を中心とした南部地域に分布し、慶尚北道の禮泉でも見られる一方、tu-duk は慶尚南道居昌でのみ確認される。(2c)のうち、tu-dɔn は平安北道、全羅南道光州、慶尚北道高靈、慶尚南道梁山で確認され、tun-dɔŋ は黄海道の広い地域と平安北道に分布している。(2)の分布を(1)と併せて見てみると、丁度(2)が(1)を挟むように分布しており、圏論的な分布を成していることがわかる。

(3)の toŋ-san 系と(4)の ki-dʒɔk 系は、済州島でのみ見られる語形である。(3)は済州島のほぼ全域で見られる形であるのに対し、(4)は済州島の南部でのみ確認される。

## 4 文献上の記録

(1)の ɔn-dɔk 系は中世語から現代語にかけて、ɔn-dɔk が多くの文献で現れる。そのうち、最も古いものは『訓蒙字会』に現れる例である。

崖 뒹 언덕 애 <1527 訓蒙字会 上 2a>

一方、(2)の tun-dɔk 系については、1459年の『月印積譜』を始めとする15世紀の文献には、두툼 という語形が見られる。

그 두들게 가 절히시니 두려븐 光明이 두들 우희 現히시고 <1459 月印積譜 2:68b>  
나라가디 아니흐느니 두들 우희 急難을 일즉 디내요라 <1481 杜詩諺解 8:39b>

この두들から変化したと考えられる語形として、두덕が17世紀末に見られる。また、둔덕という語形は20世紀初めになって初めて現れる。

阜 두덕 부 <1700 千字文 18a>  
탄금성의 둔덕 영월루 상에서 나고 <1908 송뢰금 2>

また、15世紀の文献には、두던という語形が見られ、第2音節の終声に鼻音が現れるものとしてはこれが最も古い語形である。

프레 주근 사르미 잇거든 살오덕 두던에 올이고 <1489 救急簡易方 1:72b>

なお、第2音節の終声位置に/ŋ/が現れる用例は、19世紀以降になってから現れる。

두덩 厓岸 <1895 国韓会語 85>

また、(3)のton-sanは、「東山」という漢字表記で15世紀から用例が見られる。また、ハングル資料としては『訓蒙字会』に例がある。

오직 太子祗隨의 東山이 사토 平히며 나모도 盛히더니 <1447 積譜詳節 6:23b>  
苑 동산 원 <1527 訓蒙字会上 3b>

## 5 考察

(1)のタイプについて、金敏洙編(1997:733)によれば、on-dokは本来、√언[堤]と√덕[高阜]からなる複合語である。『李朝語辞典』(1964)によれば、√언は語幹末にㅎを持つ名詞である。これを考えると、第2音節の初声/h/が激音化した語形が方言形として現われてもおかしくないが、こうした語形は見られない。これは、언덕が文献上に現れる以前に、語幹末ㅎが消失したためであると考えられる。ここで、언ㅎについて、文献上の記録を確認すると、以下の1例のみが見られる。

닐굽차힌 뭇 언혜 떠디여 <1447 積譜詳節 9:37a>

また、語幹末ㅎが脱落した後の用例として最も古いものは、『東国新統三綱行実図』に現れる以下の例である。

아히 손즈를 업고 언의 느려더 <1617 東国新統三綱行実図 烈女伝 3:31b>

2つの用例の年代差は170年あるため、文献上の例から消失の時期について推定するのは難しい。安秉嬉・李珖鎬(1990:148-149)によれば、語幹末々の消失は、基本的には近代語の時期に入ってから確認されるが、早いものでは15世紀の文献で既に見られるようである。つまり、언의の語幹末々も15世紀の時点で消失した可能性があり、そうだとすれば、의の消失後に 언덕 という複合名詞が形成されたと説明できる。

(1)の各語形について、まず、第2音節の初声が濃音で現れる語形は全羅道付近に集中しているが、この地域では語頭の平音が濃音で現れることが多く<sup>1</sup>、√덕の初声が濃音で現れることにより、√언と結合した場合もそれが維持されたと考えられる。また、ɔŋ-dək と ɔŋ-ʔək については、√언にあたる要素が ɔŋ という語形で現れる地域<sup>2</sup>で、これに√덕にあたる dək または ʔək が後部要素として結合したと考えられる。ただし、(1a)の第1要素である ɔn と(1b)の第1要素である ɔŋ のどちらがより古い形であるかは不明であり、故に(1)の最も古い語形が ɔn-dək と ɔŋ-dək のどちらであるかも推定できない。

(2)の tun-dək 系の中世語形は前述の通り、ㄷㅌ系である。これに最も近い語形は居昌でのみ確認された tu-duk という語形であるように思われるが、慶尚道地域では母音/i/と/o/の対立が存在しないという点を考慮すると、最も古い形は、慶尚道地域で現れる tu-dək であると考えられる。また、このタイプの語形は、語根に結合した接尾辞の種類によって異なる方言形が生まれたと推定される。即ち、-k が結合したもの、-ək が結合したもの、-ɔŋ が結合したものが考えられる。尚、(2a)の tun-dək という語形については、第1音節の終声/n/以降が ɔn-dək からの類推による混交ではないかと考えられる。これらの変化をまとめると以下のようになる。

√tu-dil- + -k → tu-dilk > tu-dik (tu-dək: 慶尚道) > tu-duk  
+ -ək → (tu-dil-ək) → (tu-di-ək) → tu-dək > tun-dək  
+ -ɔŋ → (tu-dil-ɔŋ) → (tu-di-ɔŋ) → tu-dɔŋ > tun-dɔŋ

このように考えると、tu-dɔn という語形はどの時点から分化したかを推定するのは難しいが、15世紀の資料からも確認されることを考えると、かなり古い時期に分化したのではないかと考えられるだろう。

なお、(2)の tun-dək 系の分布について見てみると、半島北部と南部に分かれ、(1)の ɔn-dək 系を挟むように分布しているため、圏論的分布を成していると言える。ただし、ɔn-dək 系

<sup>1</sup> 崔鶴根(1991:609-613)、韓国方言学会(1977:314-315)を参照。

<sup>2</sup> ただし、崔鶴根(1978)によれば、언덕の意味にあたる語形として 영 が現れるのは慶尚南道梁山のみである。

については、南部地域にも広く分布しているが、中央語形である *ɔn-dɔk* だけではなく、慶尚南道の一部で *ɔn-ʔɔk* という形が見られるため、*ɔn-dɔk* 系が分布していたと考えられる。よって、*ɔn-dɔk* 系の側からみると、圏論的分布というよりは、南北対立型の分布であると言える。

(3)の *toŋ-san* は前述の通り「東山」という漢字が当てられる漢字語であるが、現代語では「丘」の意味でこれを用いるのは済州島のみである。『標準国語大辞典』にもこの意味で記載があるのだが、なぜ済州島のみで用いられるのかは不明である。

(4)の *ki-dʒok* 系も済州島のみで見られる語形であるが、こちらの語源は不明である<sup>3</sup>。

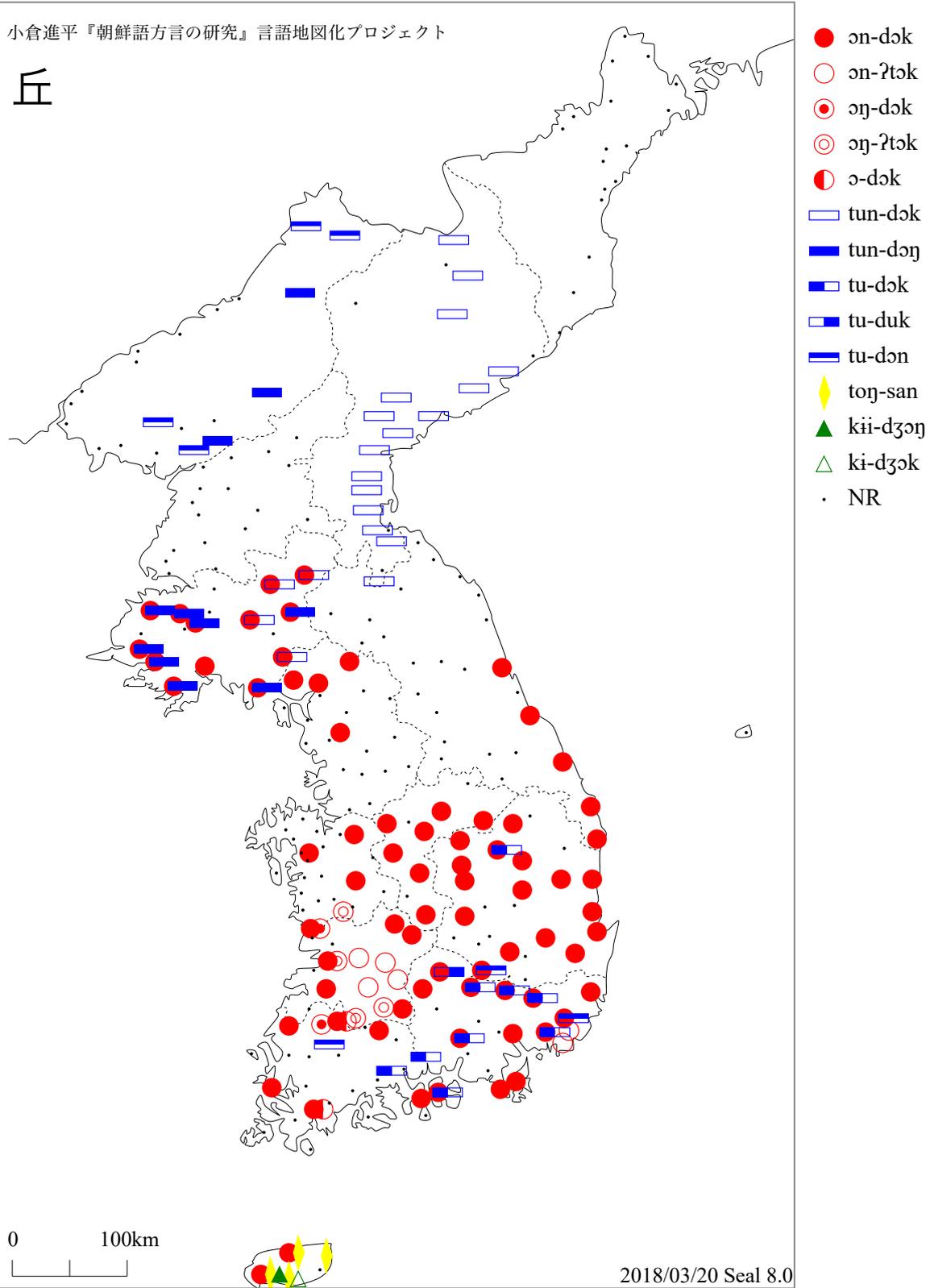
### 参考文献

- 安秉嬉・李珧鎬(1990)『中世国語文法論』ソウル: 学研社.  
李崇寧(1984)『国語造語論攷』重版, ソウル: 乙酉文化社.  
韓国精神文化研究院語文研究室編(1990, 1995)『韓国方言資料集』第I・II巻, 城南: 韓国精神文化研究院.  
韓国方言学会(1977)『国語方言学』第3版, ソウル: 螢雪出版社.  
金敏洙編(1997)『우리말語源辞典』ソウル: 太学社.  
金炳濟(1980)『方言辞典』平壤: 科学, 百科事典出版社.  
国立国語研究所(1999)『標準国語大辞典』ソウル: 斗山東亜.  
崔鶴根(1978)『韓国方言辞典』ソウル: 玄文社.  
崔鶴根(1991)『国語方言研究』ソウル: 明文堂.  
劉昌惇(1964)『李朝語辞典』ソウル: 延世大学校出版部.

---

<sup>3</sup> この語形について、はっきりした語源は不明であるが、徳廣彌十郎(1998:68)によれば、モンゴル語には「突起した(所)。隆起した(所)。小高い(所)。」という意味を持つ *küdügürhen* という語があり、これとの関連が考えられる。

丘



## 穴

許 秦

### 1 はじめに

韓国語の標準語は ku-məŋ (구멍) であるが、これにあたる語は『朝鮮語方言の研究』の「地理・河海」に「穴」という項目名で 18 種類記録されている (上: 36-37)。これらは (1) ko-maŋ 系, (2) ku-məŋ 系, (3) kuŋ-gi 系の三つに分類できる。いずれの語形も固有語から変化を辿ったものだと考えられる。この三種類の語形を更に分類すると以下の通りである。

#### (1) ku-məŋ 系

(1a) ku-məŋ / ku-mək / ku-mu, (1b) ku-njəŋ / ku-nəŋ / ku-njək / ku-njuŋ, (1c) ku-jəŋ / ku-jaŋ

#### (2) kuŋ-gi 系

(2a) kuŋ-gi / kuŋ-gii, (2b) kuŋ-gəŋ / kuŋ-gaŋ / kuŋ-geŋ-i / kuŋ-ge, (2c) kuŋ-jəŋ

#### (3) ko-maŋ 系

(3a) ko-maŋ, (3b) ko-njaŋ

(1) ku-məŋ 系は第一音節の母音が u で終声を持たないものである。(1a)は第二音節の子音が m のもの, (1b)は第二音節の子音が n のもの, (1c)は第二音節が j で始まるものである。

(2) kuŋ-gi 系は第一音節の終声に ŋ が現れるものである。(2a)は第二音節の子音が g で始まり, 母音 i を持つもの, (2b)は(2a)と同じく第二音節の子音が g で始まるが, 第二音節の母音が i ではないものである。また, (2b)では kuŋ-ge を除いて全語形の第二音節の終声に ŋ が来る。(2c)は第二音節が半母音 j で始まるものである。

(3) ko-maŋ 系は第一音節が o で, (3a)と(3b)は第二音節の子音の違いによって分けられる。

### 2 その他の語形

まず、『韓国方言資料集 江原道篇』に su-tʃe-ʔku-njəŋ<sup>1</sup> という複合語が見られる。これは標準語の「수철구멍」にあたり, 「入」の影響で第三音節が濃音化したと考えられる。また, 対格助詞がついた kuŋ-gi という語形も江原道の平昌, 溟州, 旌善, 三陟に見られる。次に, 『韓国方言資料集 全羅北道篇』では完州, 撫州, 金堤に ku-njek という語形が記載されている。それから, 『韓国方言資料集 慶尚北道篇』では ku-mjəŋ, ku-mi<sup>2</sup>, ku-i<sup>2</sup>-i などの語形が見られる<sup>2</sup>。ku-mjəŋ は漆谷, ku-mi<sup>2</sup> は善山, ku-i<sup>2</sup>-i は清道に記されている。最後に, 『韓国方言資

<sup>1</sup> 江原道寧越郡に見られる。

<sup>2</sup> これらの表記は『韓国方言資料集』の表記法を参考に, 一部を小倉進平の表記法に書き換えたものである。

料集 慶尚南道篇』では ku-njín, ku-njík, kúmg- などの語形が確認できる<sup>3</sup>。ku-njín は金海, ku-njík は咸陽, kúmg- は梁山に記されている。

### 3 地理的分布

(1) ku-məŋ 系の(1a)のうち, 現代標準語と同じ語形の ku-məŋ は主に黄海道に分布し, 全羅南道, 慶尚南道, 忠清南道, 京畿道と咸鏡南道の一部にも分布する。ku-mək は京畿道と全羅道, ku-mu は慶尚道にしか見られない。

(1b)は咸鏡南道を除いた全国に幅広く見られるが, ku-njəŋ は黄海道と江原道から南の方と咸鏡北道の北の方で見られる。ku-nəŋ は全て平安道に見られ, ku-njək は京畿道, 忠清道, 全羅道など, 朝鮮半島の西南地域に分布する。また, ku-njuŋ は慶尚南道の一部にしか見られないが, 『韓国方言資料集 慶尚南道篇』にはこの語形が見当たらない。

(1c)は咸鏡道, 慶尚道を中心に朝鮮半島の東側に分布する。その中で ku-jaŋ は咸鏡南道に限られている。

(2) kuŋ-gi 系は咸鏡道に幅広く分布する。また, kuŋ-gii は濟州島だけに見られ, 江原道の蔚珍と慶尚北道の青松に kuŋ-geŋ-i, 江原道の三陟に kuŋ-jəŋ が分布する。しかし, kuŋ-geŋ-i と kuŋ-jəŋ は『韓国方言資料集』には示されていない。

(3) ko-maŋ 系は濟州島にのみ見られる。

### 4 文献上の記録

文献上で現れる「穴」の一番古い語形は『釈譜詳節』の「구무」(単独形「구무」, 対格形「굵글」)である。主格形「굵기」と向格形「굵그로」は『月印釈譜』から, 処格形「굵기」は『郷藥救急方』から現れ始める。「굵그로」が最後に確認されたのは18世紀の『女四書』(1737)で, これ以外は全て19世紀末から20世紀初頭の文献でも見られる。また別の処格形「굵게」は17世紀の文献に現れる。更に, 「구무」と似たような語形の「구모」も15世紀の文献から見られる。これは『朝鮮語方言の研究』で示されていない語形である。

눈 가진 거북과 흰 구무 가진 남기 잇느니 굵글 어 <1447 釈譜詳節 21:40a>

磨龔은 돌 마다드물씨라窟은 굵기라 <1459 月印釈譜 1:21a>

머리 퍼디게 햐야 도흔 프를 무터 컷 굵기 녀허 그 <1466 救急簡易方下:44a>

네 門문스 쇿 굵그로 오라 阿항難난이 즉재 쇿 굵그로 <1459 月印釈譜 25:9a>

少康을 비고 굵그로 나가 드디여 中興을 닐외며 <1737 女四書 4:60a>

檄木으란 二年木으로 쓰되 통 굵게 벵듯게 햐고 <1635 火砲式諺解:2a>

남진은 윈 녀 곶구모 겨집은 올흔 녀 곶굵기 썰어 <1489 救急簡易方 1:48a>

る。ここで, 右肩の'は弱化した軟口蓋鼻音を, 「'」は高いピッチを表す。以下同様。

<sup>3</sup> -jiのような綴りが出てくるが, これは発音上 -i- と変わらないと思われる。

(1) ku-məŋ 系の(1a)は 17 世紀の『痘瘡集要』(1608)から見られる。そして、19 世紀末の文献で「구떡, 구메, 구멍」などの語形が現れる。「구메」も「구멍」も『朝鮮語方言の研究』で示されていない語形であるが、「구멍」の方は『韓国方言資料集 慶尚北道篇』で示されている。

조고만 구멍을 돕고 디룽을 녀코 조히로 그 굼글 블라 <1608 痘瘡集要 8b>

조곰만흔 구떡을 쫄코 그 구떡으로 <1896 大朝鮮獨立教會會報 17>

구메노사 穴農 <1895 國韓會語 36>

꼬리논 길고 솟으며 색에 구멍을 파고 그 속에서 <1896 新訂尋常小學 2:6b>

(1) ku-məŋ 系の(1b)は 19 世紀末の辞書に見られる。更に、『朝鮮語方言の研究』で示されていない「구냥」の語形が新小説の『洗劍亭』に確認できる。また、(1c)の「구영」は 19 世紀末の『蚕桑輯要』(1886)から見られる。

구멍 孔 구녕 <1880 韓僂辭典 205>

구무 穴 (구멍 혈) -> 구녁 <1897 韓英字典>

조그만하게 기구냥처럼 쭈르데로가셔 무슨표인지 스셔 <洗劍亭 86>

쌍으로 처진 가지을 구영을 한 즈만 파고 <1886 蚕桑輯要 5a>

(2) kuŋ-gi 系は母音で始まる助詞と結語した形のほか、「궁개」と「궁영」の語形が文献上に見られる。「궁개」は『國韓會語』(1895)に、「궁영」は『春香伝 洪允杓所藏本』に現れる。

어림궁개 고기 뛰다 魚陟負氷 <1895 國韓會語 210>

권쥬가 읍시면 목궁영의 안니 넘어가너 <春香伝 洪允杓所藏本 131b>

## 5 考察

ku-məŋ は中世語で特殊な語幹の交替を持つ体言であり、単独形は「구무」であるが、母音で始まる助詞が後にくる場合の曲用形は「꺾-」になる。似たような語幹交替をするものは「나모~남」(木), 「녀느~녀」(他), 「불무~불」(冶) などである。

李基文(1961)は、木の「나모」は古い時期に「\*나목」であったが、ある理由により子音の前で語末子音が脱落し、単独形は「나모」になり、母音の前では「남-」になったと推測している。また、박종희(1997)は、上述の語形が語幹末に浮動音<sup>4</sup>「ㄱ」を持ち、表面形の段階で浮動音「ㄱ」が音節構造内に割り当てられるか、若しくは脱落し、逆に、後ろに母音で始

<sup>4</sup> 박종희(1997)は、複線音韻論の観点から、自身の skeletal slots を持たない melody の単位を浮動音として名付けている。詳しくは박종희(1997: 119)を参照。

まる語尾が付く場合、語幹末の母音が脱落すると同時に、浮動音が再音節化され、次の音節の初声として実現されると述べている。

更に、「나모, 구무, 불무」は「ㄴ」, 「ㄷ」で終わっているが、先行子音が「ㄹ」若しくは先行音節の母音が「ㄷ」であるため、このような環境はこれらの語形の末音節の母音が「·」または「ㅡ」であったことを示唆している。つまり、「·」と「ㅡ」が先行する「ㄹ」, 「ㄷ」によって円唇化され、「ㄴ」と「ㄷ」になり、母音の前で「·」と「ㅡ」が脱落し、終声の「ㄷ」が後の音節に移ることで「남기, 굶기, 불기」などになったと考えられる。

以上のことから、「穴」の古形を\*ku-mik と想定すると、次のような第二音節の母音が脱落するか否かによる二つの変化が想定できる。

\*ku-mik > \*ku-mi > ku-mu > ku-mo  
 > \*ku-mik > ku-miŋ > \*ku-iŋ > ku-iŋ-i  
 > ku-njik > ku-njiŋ  
 > ku-mək > ku-məŋ > ku-miəŋ  
 > \*ku-məi > ku-me  
 > ku-njək > ku-njəŋ > \*ku-njəŋ > ku-njuŋ  
 > ku-niaŋ  
 > ku-nəŋ  
 > ku-jəŋ > ku-jaŋ  
 > \*ko-məŋ > ko-maŋ > ko-njaŋ

\*ku-mik > kumg- > kum-gi > kuŋ-gi  
 > kum-gi > kuŋ-gi > kuŋ-gii  
 > \*kuŋ-gə > kuŋ-gəŋ > kuŋ-gaŋ > kuŋ-gaŋ-i > kuŋ-gəŋ-i > kuŋ-ge  
 > kuŋ-jəŋ

第二音節の母音が脱落しない上のパターンでは、先ず、語末の子音の脱落により ku-mu, ku-mo などの語形ができ、次に、第二音節の母音 i が前舌化によって\*ku-mik > \*ku-mik > ku-mi<sup>5</sup> > \*ku-i<sup>5</sup> > ku-i<sup>5</sup>-i の変化、i > ə<sup>5</sup>による\*ku-mik > ku-mək > ku-məŋ > ku-miəŋ, \*ku-mik > ku-mək > ku-məŋ > \*ku-məi > ku-me などの変化が想定できる。ここで、ku-miəŋ の語形が ku-məŋ より後に現れる点から、恐らく何らかの原因で半母音が添加されたと思われる。

また、第二音節の語頭の両唇鼻音 m が硬口蓋鼻音 nj へ変化したことは注目すべきである。これは恐らく第二音節末の k の影響によるものと思われるが、この音韻変化が起こった原因については適切に説明できない。若しこの変化が実際に起こったとすれば、音節末の k の鼻音化によって ku-njəŋ ができ、その半母音が脱落して ku-nəŋ, ə > a の変化により ku-niaŋ

<sup>5</sup> 方言形で母音 i の変化については김경숙(2015)を参照されたい。

になったと考えられる。しかし、ku-njuŋ の語形は ku-njɔŋ から直接変化したとは考えにくいので、\*ku-njoŋ という中間段階の語形が存在したかもしれないが、現段階では検証できない。また、上述の ku-miɔŋ の語形の出現もこの m > nj の変化と関係していると思われる。更に、ku-nɔŋ から鼻音の脱落が起こり、ku-nɔŋ > ku-jɔŋ > ku-jaŋ のような変化が生じたと言える。

ku-njik, ku-njiŋ の語形はどの段階で形成されたのか確定できないが、i の前舌化と共に生じた可能性が高い。

濟州島に見られる ko-maŋ, ko-njaŋ の語形は第一音節の母音が u > o の変化を経て形成されたと思われる。

第二音節の母音が脱落する下のパターンは比較的想定しやすい。まず、主格形若しくは対格形が広く使われ、有声軟口蓋破裂音の前で m > ŋ の変化を経た後、それらが単独で語彙的な資格を持つことになり、kuŋ-gi, kuŋ-gii<sup>6</sup>などの語形が形成されたと思われる。

kuŋ-gɔŋ, kuŋ-gaŋ, kuŋ-gaŋ-i, kuŋ-geŋ-i, kuŋ-ge などの語形は恐らく ku-mɔŋ 系の語形と併用される過程で、それにひかれて\*kuŋ-go の音節末に ŋ が付け加えられたかもしれない。その後、ɔ > a, ウムラウトなどの現象が起こり、他の語形ができたと想定できる。最後に、kuŋ-jɔŋ は、kuŋ-gɔŋ などの語形から g が脱落したものだと考えられる。

以上、「穴」の各方言形が辿ってきた可能な音韻変化の過程について考察したが、未だ解明できない部分が幾つかあり、今後の課題として残る。

## 参考文献

韓国精神文化研究院語文研究室編(1987-1995)『韓国方言資料集』全9巻. 城南:韓国精神文化研究院.

김경숙(2015)『한국 방언의 지리적 분포와 변화』ソウル:亦樂.

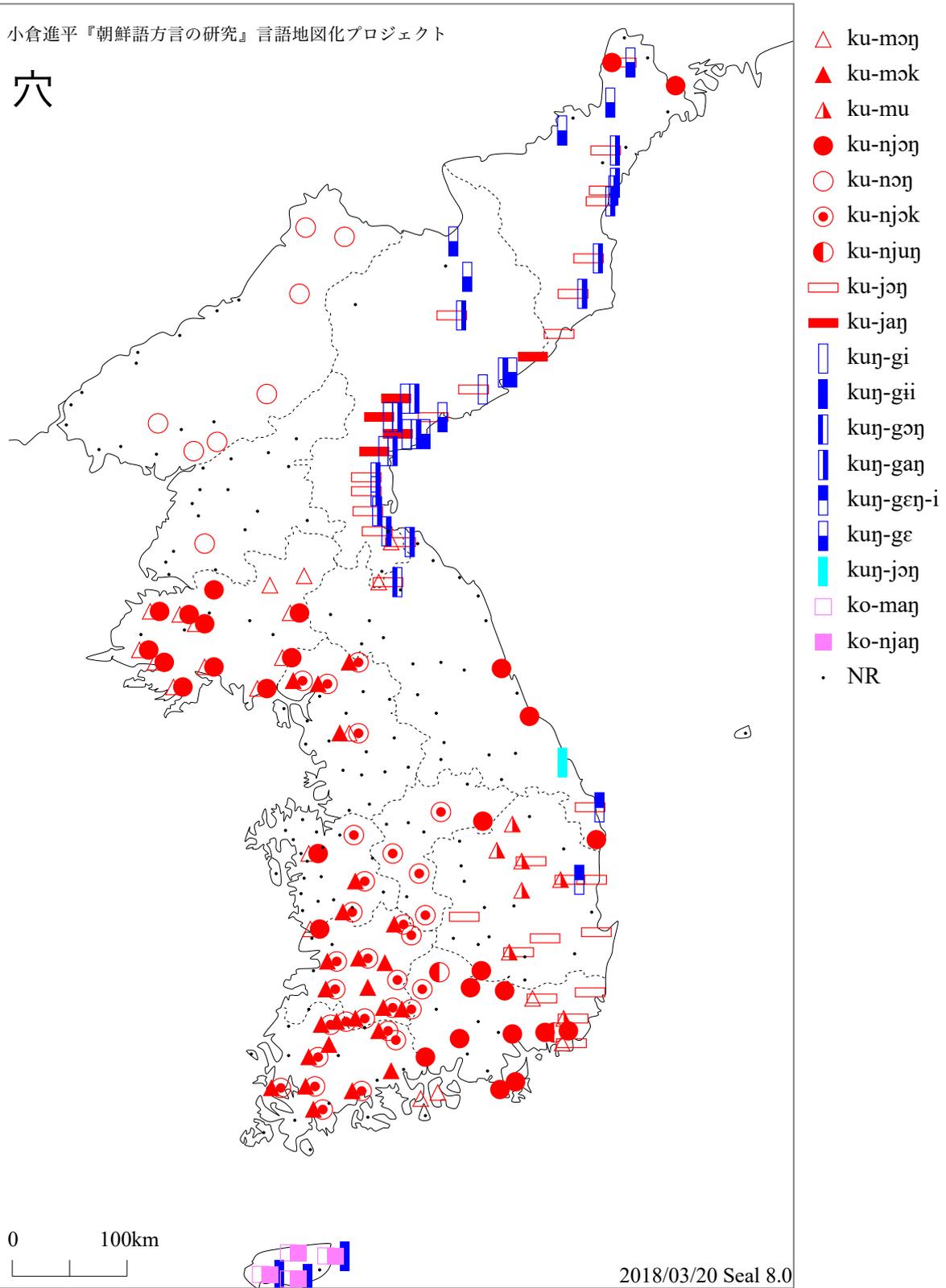
李基文(1961)『国語史概説』ソウル:民衆書館.

박종희(1997)「중세국어 특수어간 교체의 음운론적 해석」『国語国文学』119: 1-28.

---

<sup>6</sup> これは対格形 kuŋ-gi に、更に接辞 i が付いたものだと考えられる。

# 穴



## 波

奈良林 愛

### 1 はじめに

日本語の「波」にあたる韓国語の標準語は물결である。『小学館 韓日辞典』で, 결という項目の用例(この場合, その項目の語を構成要素とする複合語)として물결が挙げられているように, 물(水)に결(これ自体, 波を意味した。『李朝語辞典』の「결」の項目参照)が組み合わさった語構成だと考えられる。결は「木目, きめ」などの意味も持つが, 物や目に見える現象の表面に現れた模様, と抽象化して捉えると, 「波」と共通する部分があると思われる。

물결の類義語として漢語由来의 파도(波濤)があり, そちらも19世紀末までには使われていた語である(『韓仏字典』や『韓英字典』に載る)ので, 質問の仕方によってはこの語を回答する人がいてもおかしくなかったように思われるが, そのような回答は記録されていない<sup>1</sup>。

『朝鮮語方言の研究』では「波」という項目で計9個の語形が記録されている。(1)(2)(4)については, 물(水)に他の名詞が結合してできたものと思われる。

(1) mul-kjɔl<sup>2</sup>系

(1a) mul-kjɔl

(1b) mul-kel

(2) mul-<sup>3</sup>sal

(3) mɔl-gi 系

(3a) mɔl-gi

(3b) mɔl-mi

(3c) mɔl

(4) mu-no-ri 系

(4a) mu-no-ri

(4b) mul o-ri

(5) tʃɔl

<sup>1</sup> この2つの語は, 比喩的用法として例えば「개화의 물결」「개화의 파도」のどちらも可能であるように意味の類似度が高いが, 『우리말 큰사전』(1992, 한글학회)で「파도 ①큰 물결」と説明されるように, 파도가典型的には海の大波を指すという語感を持つ母語話者が多いようである。

<sup>2</sup> この項目で, 第2音節初声の k に声門閉鎖を示す記号は付けられていないが, 基本的に濃音で発音されたものと思われる。この環境での濃音化は自動的なものとして捉えられたか。

## 2 地理的分布

現代標準語と同じ語形である(1) mul-kjɔl 系が、平安北道から全羅南道・慶尚南道まで南北に広く分布している。全羅南道・慶尚南道では(2) mul-<sup>2</sup>sal との併用が目立つ。現代標準語でも 물살は「流れ、水勢」の意味で使われる(살は헛살の後部要素と同じものであり、一方向的に勢いを持って進むものといった意味成分を持っていると思われる)が、現代標準語の場合と異なる使い分けがあったのだろうか。(3) mol-gi 系は、半島東側の咸鏡北道から江原道に分布する。済州島では tʃɔl の語形のみが記録されている。

## 3 その他の語形

江原道・慶尚北道は『朝鮮語方言の研究』で記録が無い地点が大部分である。『韓国方言資料集』を見ると、慶尚北道は(1a) mul-kjɔl が大半だが、南部の高霊・清道・月城では mul-<sup>2</sup>tʃɔl が出ており、済州島の tʃɔl との関連を思わせる。どちらも kjɔl から tʃɔl へ口蓋音化してできた語形と推測される。江原道も mul-kjɔl が多く現れるが、北部の麟蹄・襄陽で(2) mul-<sup>2</sup>sal が現れ、江原道南部沿岸の三陟で mu-<sup>2</sup>sal が現れている。

咸鏡北道について、小倉(1944)ではこの地域は mol-gi のみ記録されているが、『咸北方言辞典』を見ると mul-kjɔ-li が穩城, mul-kɔ-li が慶源, 会寧で現れている。これらは mul-kjɔl から変化した語形であると思われる。また, mul-<sup>2</sup>sal が明川に現れている。

『韓国方言資料集』を見ると、慶尚北道安東で물나오리 mul-na-o-ri が現れている。これは、京畿道に1地点ずつ現れた(4a) mu-no-ri, (4b) mul o-ri との関連を考えさせる。『韓国方言資料集』でも 물노을/물놀이 の語形が京畿道に記録されており、また忠清北道で 물농을/물농오리가記録されている。これらの語形の後部要素は、もしかすると「夕焼け」(노을)の項で紹介される、『金剛經三家解』に出てくる 景 나을 (焰) の語の나을と起源が同じであるかもしれない<sup>3</sup>。「夕焼け」(1b)および(1c)に分類された語形の中に noŋ-o-ri や na-o-ri という共通するものが見られる。立ち昇る焰と波頭は、形状や動きに似たところがあると感じられ、また火と水は対照的に捉えられる2つの概念であるため、類似した発想から語が生まれることはあり得るように思われる<sup>4</sup>。ただし、『朝鮮語方言の研究』で「波」の隣の項目である「海水のうねり」(現代標準語너을)で、地域によっては na-u-ri, na-ul, na-bul が出ており、これらとの関係も検討しなければならない。

済州島の(5)tʃɔl は、『韓国方言資料集』でも他の地域では記録されていないが、『우리말 큰사전』の절<sup>8</sup>(見出し語として並ぶ절の8番目)は「①→과도. (경기). ②→물결. (제주).」となっているので、意味するところに若干の違いはあっても、京畿道でもその語形が存在したようである<sup>5</sup>。

<sup>3</sup> 靈령 景 나오리 빛나 (靈焰烜赫) 〈1482 金剛經三家解 3:29b〉

<sup>4</sup> 日本語の「ほのお」は「火の穂」が語源だが、この「穂」(ほ)は、「《稲の穂、山の峰などのように突き出ているもの。形・色・質において他からぬきんでいて、人の目に立つもの》」である(『岩波古語辞典』)。波頭を指して「波の穂」という言い方もあった。나을の意味はこれに近いものであったと推測する。

<sup>5</sup> 一方、『표준어로 찾아보는 제주어 사전 (標準語で引く済州語辞典)』では、물결の項に물결, 물절とい

#### 4 文献上の記録

mul-kjol が最初に文献に登場するのは『釈譜詳節』(1447年)である。近代語の時期(17世紀末の『訳語類解』以降)に、両唇音に続く一の母音が円唇化する変化を経ているため、中期語に遡れば第一音節の母音が異なっている。

毗摩質多는 바궤 물궤 소리라 혼 마리니 바궤 므를 터 겨를 니르왈느니라 <1447 釋譜詳節 13:9b>

この文では、毗摩質多と漢訳されたサンスクリット語の意味として「海の波の音」と説明しており、さらに文後半では、波を「海の水を打って模様を起こす」と言い換えている。ここから、同時期に尙だけでも文脈によっては「波」の意味を表すことができたことがわかる。15世紀に景결は『月印釈譜』『楞嚴經諺解』『救急方諺解』『杜詩諺解』などで大量の用例が現れている。

물결という表記で最初に現れるのは、『新增類合』(1576年)であり、「浪」「波」「濤」の3つの字に물결の語が宛てられている(上 6b)。また、外国語の文字に転写されたものとして、『朝鮮語方言の研究』でも触れられているように、日本で刊行された木村理右衛門の『朝鮮物語』(1750年)に「波(なみ)ヲむるける」の記録がある。

『訓蒙字会』(1527年、現存最古は壬辰倭乱時に日本にもたらされた叡山文庫本)では、「浪 ㅁ결 瀾 ㅁ결 波 ㅁ결」(上 2b)とあるように、ㅁ결の形で現れる。これは、불(火) + 꽃(花)が同書でㅁ결の形で現れるのと、並行的な現象だと思われる。終声にㄷを持つものに複合名詞を造る入が結びついたとき、ㄷが消えたと見える例として、他に「뽕벌」(蜜蜂)が『杜詩諺解』初刊本(18:4)に見える。

ㅁ결の文献上最も古い用例は『牧牛子修心訣』に現れ、2番目に古い用例は『杜詩諺解』初刊本に現れるが、これらの文献では景결とㅁ결が共存している。

多生애 習氣 | 기쁘니 바람이 그쳐도 물결리 오히려 느긋고 理 나타도 念이 손지 侵  
勞き <1466 牧牛子修心訣 24b> (...風が止んでも波はむしろ湧き立ち...)

文章은 曹植의 물결리 어원 듯고 藥 머구문 劉安의 德業이 尊호 <1481 杜詩諺解  
11:7b> (...文章は曹植のように波瀾に富んでいて...)

咸鏡から江原道に広がる mol-gi については、『우리말샘』では次のような釈義になっている(筆者訳)。

---

う現地で使用される語形が、ㅁ결の項に결の語形が載せられており、ㅁ결 / 물결との対応関係が『우리말큰사전』と異なっているので、これらの使い分けについては今後さらに調査と確認が必要である。

멀기 「名詞」「北韓語」「海洋」 風が吹いていたのが止んだり、あるいはとても弱くな  
った時、もしくは風の方向が45度以上変わったあとに現れる、海の大きな波。바람물결  
〔筆者補注=바람물결の項によれば、強い波と一緒に起こる波。北韓語。〕よりも高さは  
平坦で、波高に対し波長が長い。高くないとはいえ強力なエネルギーを持っていて、水中  
の構造物や船、また海岸地形を破壊することがある。

また, 물멀기という語も北韓語として『우리말샘』に立項されており,他に셋멀기/맛멀기  
/까치멀기의複合語も採録されている。

李泰俊(1904~? 江原道鉄原出身)の短編小説『바다』の冒頭に, 멀기의語が登場する。

“야, 과연!”

“무스게라능야?”

“멀기 말이오, 멀기.....과연 기차당이.”

“무시게?”

“멀기 말임동, 과연 무섭지 앙이오?”

そこでは,音を聞いただけでも恐ろしい波と,降りしきる雨の情景が描かれている。朝鮮  
半島北部の東海岸は,地形図を見るとわかるように,半島西部・南部の海岸とはかなり様相  
が異なる。同じく「波」であるとしても,西部・南部の人のイメージする물결と北東部の人  
のイメージする멀기はかなり印象の異なるものではないかと想像する<sup>6</sup>。

(3) mol-gi 系として括ったうちの(3b) mol-mi は乗り物酔いを意味する멀미と語源が同じか  
もしれず,この意味での멀미は『伍倫全備記諺解』(1721年)などに用例がある。(2) mul-<sup>2</sup>sal  
は歴史文献上用例が見つけれなかった。

## 5 考察

『鷄林類事』に「水曰沒」とあるように『訓民正音』より古い時代から「水」を意味して  
물の語が使われてきたが,물결もやはり古くから使われていただろう。결だけでも「波」を  
表すことができるが,多義語であるから必要に応じて물결を使ったと思われる。결の口蓋音  
化した形が,濟州島の語形ではないかと推測する。

慶尚南道・全羅南道に多く現れる mul-<sup>2</sup>sal は,標準語で「流れ」「水の勢い」を表す물살  
(살は,헛살の後部要素と同じであり,一方方向の直線的な流れ・勢いを表していると思わ  
れる)が「波」の意味としても使われているということか。mul-kjol と併用する地域が多い  
が,横方向の運動の「流れ」と,水面の上下動の「波」に関して,この地域ではどのような  
語の使い分けがあるのか興味深い。

<sup>6</sup> 研究室に所属する中国朝鮮族の複数の学生に 멀기の語を知っているか尋ねたところ,いずれも聞いたこ  
とがないという答えだった。

『朝鮮語方言の研究』には mul-<sup>2</sup>sal が現れる全州に、注記として「全羅南北道では「波の力」の義にも用ひられる」ことが書かれている。また、京畿道京城で現れた mu-no-ri には、「(さゞなみ)」と注記されている。

こうしたことから窺えるように、同じ語形でも地域によって意味がずれることや、近い意味を持つ語との関係を考えることが、自然現象を表すこの項目においては特に重要であると思われる。

#### 参考文献

韓国精神文化研究院語文研究室編(1987-1995)『韓国方言資料集』全9巻 城南：韓国精神文化研究院。

玄平孝・姜榮峯(2014)『표준어로 찾아보는 제주어 사전』濟州特別自治道：凶書出版각。

京都大学文学部国語学国文学研究室編(1970)『朝鮮物語』京都：京都大学国文学会。

金泰均編著(1986)『咸北方言辞典』ソウル：京畿大学校出版局。

한글학회(1991)『우리말큰사전』ソウル：語文閣。

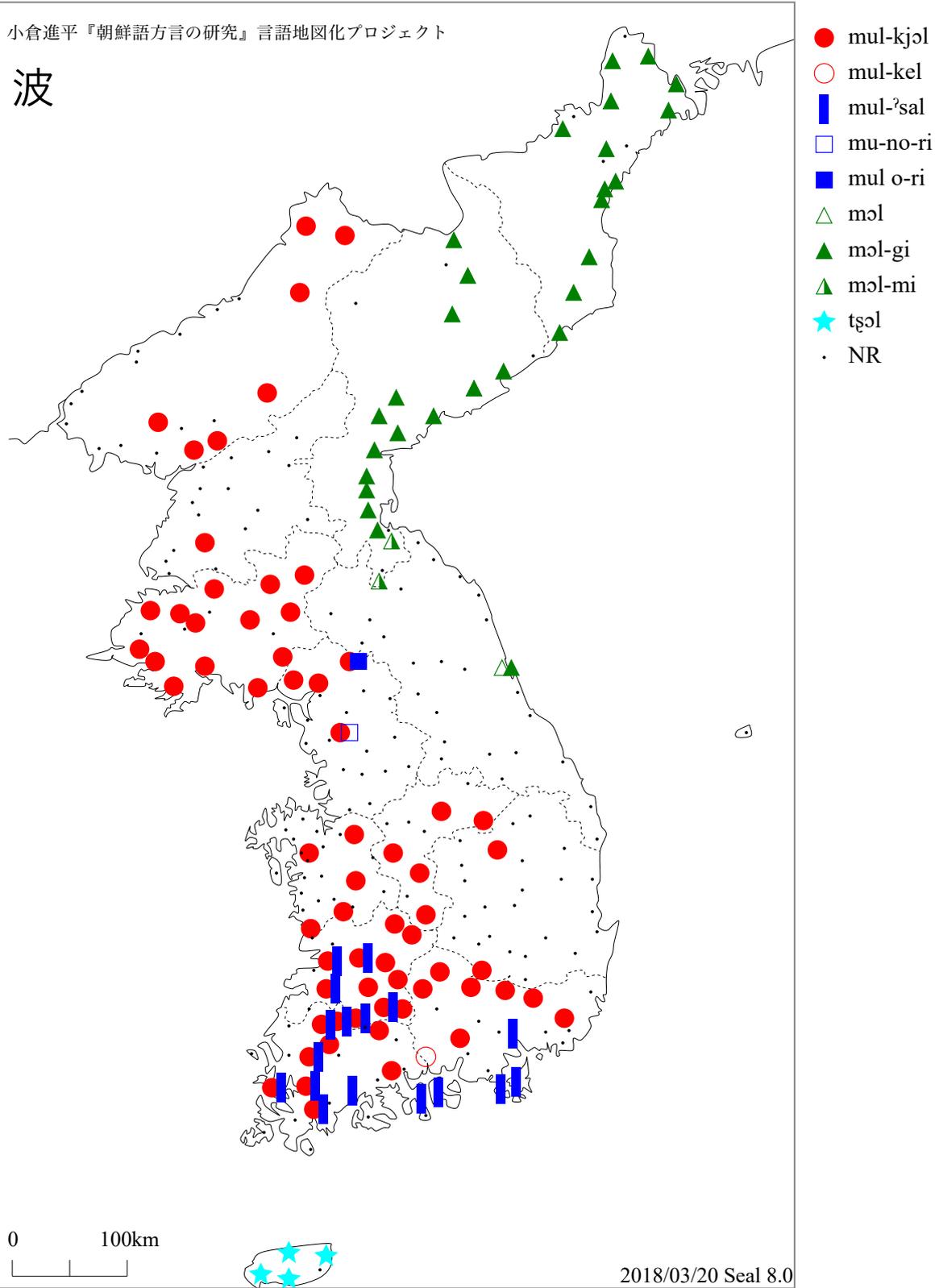
油谷幸利ほか編(2018)『小学館 韓日辞典』東京：小学館。(旧版『朝鮮語辞典』1992)

李基文(1998)『新訂版 国語史概説』ソウル：太学社。

劉昌惇(1964)『李朝語辞典』ソウル：延世大学校出版部。

李泰俊(2014)『解放前後：李泰俊 短編全集 2』(한국문학을 권하다 18)ソウル：애플북스。

# 波



# 泉

## 國分翼

### 1 はじめに

韓国の標準語は *se:m* (샘) であるが、これにあたる語は『朝鮮語方言の研究』の「地理・河海」に「泉」という項目で14種記録されている(上:48-49)。これらは次のように4グループに分類することができる。

#### (1) *se-am* 系

*se-am/se-am-mul*

#### (2) *se:m* 系

(2a) *se:m*

(2b) *sem-mul/sem-ŋʰi*

(2c) *se-mi/se-mi-mul*

(2d) *se-mε/se-mε-mul*

(2e) *se-mul*

#### (3) *si-am* 系

*si-am/si-am-mul/to-ne-gi si-am*

#### (4) *sam* 系

*sam-ŋʰi*

(1)は語根が2音節で、第1音節の母音が *ε* かつ第2音節の母音が *a* で現れる形、(2)は語根部分の母音 *ε* が長母音で現れるか、それが短母音化したと考えられる形、(3)は語根の第1音節の母音が *i* で現れる形、(4)は語根の母音が *a* で現れる形である。

また、(2)は(2a)語根の母音が長母音となるもの、(2b)語根が短母音化したもの、(2c)語根に *i* が後続するもの、(2d)語根に *ε* が後続するもの、(2e)語根の末音 *m* が脱落したものに下位分類できる。なお、語根に *mul* が結合した形が4グループいずれにも見られ、*-ŋʰi* が結合した形が(2b)、(4)で見られる。

### 2 その他の語形

この項目では、平安道、咸鏡道、江原道嶺西地域の記録が少ない。『平北方言辞典』によれば、平安北道では *se:m*, *se:m-mul*, *se:m-ŋʰi*, *se:m-tʰo* など、主に(2)の *se:m* 系が用いられるようである。また、김병제(1980:382)によれば、咸鏡南道には삼치, 咸鏡北道には샘치가中

心的に現れるようである。また、『韓国方言資料集』によれば、江原道嶺西地域では, se:m, se:m-mul, se:-mi, se:-me などが用いられるようである。

### 3 地理的分布

この項目で最も広範囲に現れたのは(2)であり, そのうち, (2b)の sem-mul が濟州島, 全羅南道, 慶尚北道, 忠清道, 京畿道, 黄海道, 永興以南の咸鏡南道で現れ, 最も多く確認された。また, (2a)は江原道嶺東地域, 永興以南の咸鏡南道のほか, 全羅南道, 慶尚北道, 忠清北道, 黄海道に散在的にみられる。(2c)は濟州島, 慶尚道で見られ, (2d)は慶尚南道統営と梁山で, (2e)は慶尚南道咸陽, 青松で確認された。

その他, (1)は黄海道, 全羅南道, 忠清北道永同, 慶尚北道金泉で見られる。(3)は全羅道を中心に忠清道, 黄海道といった, 半島西部で見られる。

また, 接尾辞-ŋi が結合した(sem-ŋi, sam-ŋi)は咸鏡南道でのみ見られた形である。

### 4 文献上の記録

中世語の例としては, 15 世紀の文献に심という語形が現れる。

山 ㅅ시에 혼 심 심 잇고 <1447 釈譜詳節 11:25a>

심 기픈 므른 마래 아니 그츨씨 <1447 龍飛御天歌 2>

また, 심암という語形は 19 世紀の文献に現れる。ただし, 語頭の ʌ は 18 世紀には既に a に変化し, 音素としては消失しているため, ʌ は表記上の揺れとして現われているといえる。

泉 심암 <18-- 광재물보 4a>

### 5 考察

まず, (2)の se:m 系は sʌim を起点として, ʌ>a と下降二重母音の単母音化を経たことにより成立したと考えられる。また, se:m では ε が長母音であることで 2 モーラが維持されているが, 接尾辞が結合した場合や複合名詞となった場合は, ε が短母音化し, 1 モーラとなっていることがわかる。

(3)の語根 si-am については ε:>ia という変化を経た結果であると考えられる。河野(1945)によれば, 黄海道西南部においてこうした例が現れるようであり, si-am の他, ㅽ가 pi-am で現れる例が取り上げられている。なお, 前述の通り si-am は全羅道にも存在するが, これは河野(1945)では言及のないものである。黄海道と全羅道に分布する si-am の周辺には, (1)の語根である se-am が分布しているが, さらにその外側には se:m 系が分布していることから, se-am は si-am と se:m または sem との混交形であると考えられる。なお, 全羅道で確認され

る to-ne-gi si-am は「深く掘った泉<sup>1</sup>」という意味であり、si-am を単独で用いるよりも対象はより狭いようである。

語根に i 及び ε が後続する語形(se-mi/se-mi-mul, se-mε/se-mε-mul)については、√sem-に主格助詞 i 及び処格助詞 ε が結合したものが語幹となったものであると考えられる。ただし、前述の通り、ε で終わる語形は慶尚南道でのみ現れるが、これらの地域では、e と ε が弁別されないため、実際には ε で発音されたものではない可能性が高い。

(4)について、語根の sam は se:m または sem という語形から、前舌母音化に対する hyper correction によって形成されたものであると推測される。

また、この項目では、語根と mul との結合による複合語が現れた。『標準国語大辞典』によれば、mul との複合語は標準語において、「泉から出る水」を表し、「泉」そのものを指す se:m とは区別されるようである。なお、(4)の sam-ŋʰi という語形の第2音節については、詳しくはわからないが、「池」という意味の漢字語に由来するもの、물건의意の接尾辞-ŋʰi が結合したものなどが考えられるだろう。

なお、中世語形 sAim の語源について、『우리말語源辞典』によれば、用言 sA-i-ta [漏] の語幹 sA-i-に名詞化語尾-m が結合したことにより成立したとされる。但し、語幹 sA-i-は平声であるのに対し、sAim は上声で現れるため、アクセントの交替という面で疑問が残るだろう。語根部分の変化の順序は以下の通りになる。

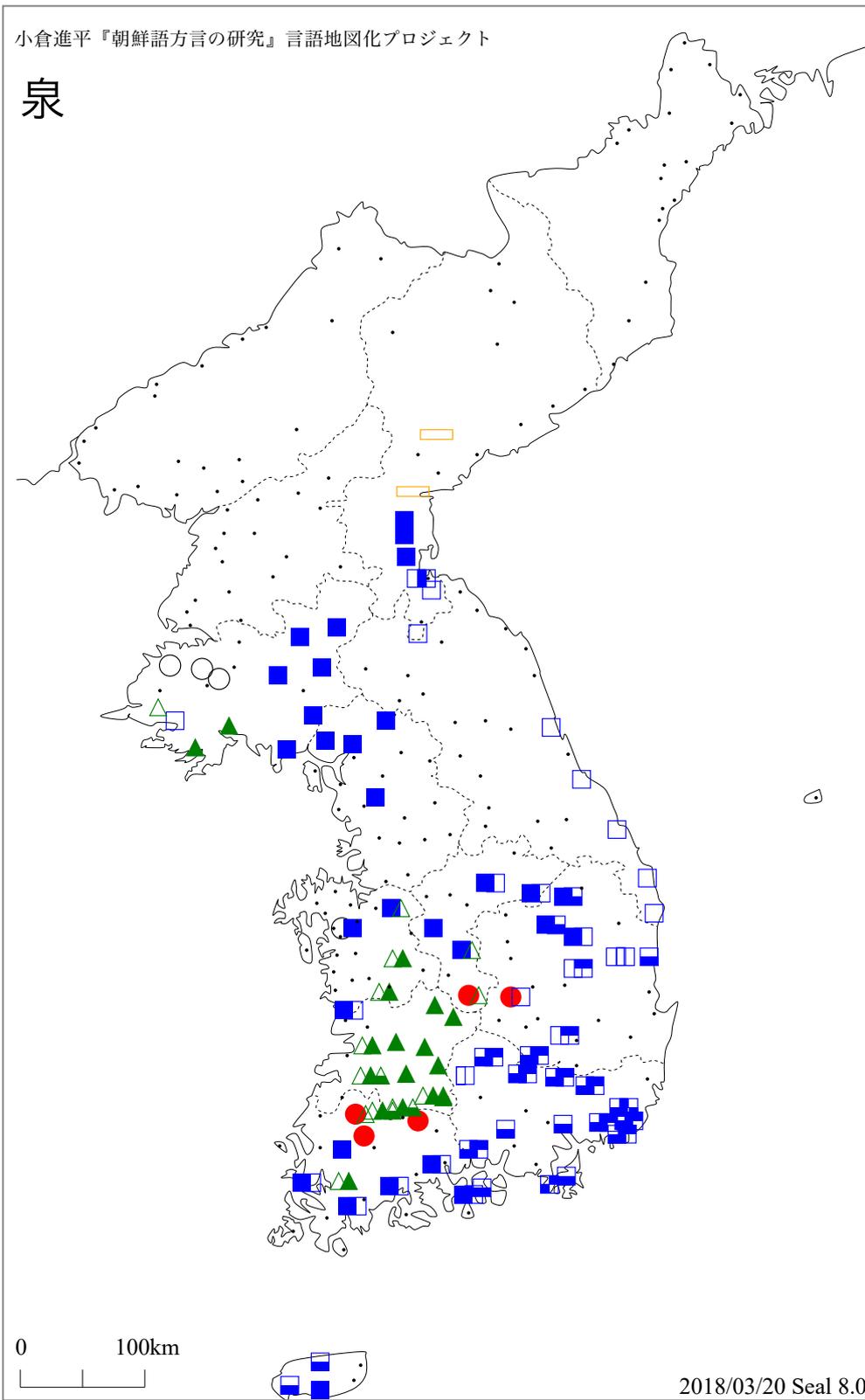
$$\begin{array}{ccccccc}
 \text{sA-i-+m} & \rightarrow & \text{sAim} & > & \text{se:m} & > & \text{sem} \\
 & & & & & & > & \text{si-am} \\
 & & & & & & > & \text{sam}
 \end{array}
 \left. \vphantom{\begin{array}{c} \text{sem} \\ \text{si-am} \\ \text{sam} \end{array}} \right\} \text{se-am}$$

## 参考文献

- 韓国精神文化研究院語文研究室編(1990)『韓国方言資料集 2:江原道編』城南:韓国精神文化研究院.
- 金履浹編(1981)『平北方言辞典』城南:韓国精神文化研究院.
- 金敏洙(1997)『우리말語源辞典』ソウル:太学社.
- 김병제(1980)『方言辞典』平壤:科学・百科事典出版社.
- 河野六郎(1945)「朝鮮方言学試攷—『鋏』語考」京城帝国大学文学会論纂 11, 東京書籍京城支店. (河野六郎(1979)所収)
- 国立国語研究院(1999)『標準国語大辞典』ソウル:斗山東亜.

<sup>1</sup> 『標準国語大辞典』の도내기 샘という項目を参照した。

# 泉



- sɛ-am
- sɛ-am-mul
- sɛ:m
- sɛm-mul
- ▣ sɛm-tʰi
- ▤ sɛ-mi-mul
- ▥ sɛ-mi
- ▧ sɛ-mɛ-mul
- ▨ sɛ-mɛ
- ▩ sɛ-mul
- △ si-am
- ▲ si-am-mul
- ▴ to-nɛ-gi si-am
- ▭ sam-tʰi
- NR

0 100km

2018/03/20 Seal 8.0

## 弟

堀内唯

### 1 はじめに

韓国語の標準語は a-u (아우) である。『標準国語大辞典』では、「同じ両親から生まれた間柄、身内での世数関係が同じ兄弟で年下のことをいう。年老いた親しい女性達の間で年上が年下を呼ぶ際に使う。(筆者訳)」これにあたる語は『朝鮮語方言の研究』の「人倫」に「弟」という項目名で6種の語形が記録されている(上: 61-62)。これら6つの語形は(1) a-u 系, (2) 接尾辞 -i がついたもの, (3) po-ri ton-sɔŋ の3つに分類することができる。

#### (1) a-u 系

(1a) a-u

(1b) a-si

#### (2) 接尾辞 -i がついたもの

(2a) a-i

(2b) ak-ki / ek-ki

#### (3) po-ri ton-sɔŋ

(1) a-u 系は、さらに(1a)母音のみで成る語形と(1b)第二音節に子音 s が含まれている語形に分けることができる。

(2)の語形は接尾辞 -i がついた語形であるが、さらに(2a)母音のみで成る a-i と(2b)語中に子音 k が含まれている ak-ki, ek-ki に分けることができる。

そして、(1)や(2)の語形とは異なる(3) po-ri ton-sɔŋ という複合語もみられた。

また、小倉進平は a-si の語形について「弟妹の生れることを [a-si pon-da] といふ」という用例を加えている。

### 2 その他の語形

『韓国言語地図』(2008)にはこの項目は含まれていないが、『韓国方言資料集』にはこれ以外に (1) a-u 系の語形において、済州島を除くほとんどの地域で아오という語形がみられた。全羅南道ではこのほかに아오님という語形が挙げられている。また、咸鏡北道のデータとして『咸北方言辞典』(1986)では아스という語形がみられた。

(2) a-i 系の語形のうち、(2b)に分類されると思われる애끼のような語形が『咸北方言辞典』(1986)に아우にあたる語としてみられた。

小倉進平のデータでは京畿道のデータが無かったが、『韓国方言資料集』によれば아우にあたる語として아우のほかにあ오という語形が挙げられている。

### 3 地理的分布

これらの語形の地理的分布は次のようになっている。

(1) a-u 系：(1a) の a-u は主に全羅道，慶尚道，忠南道に多く分布し，その他，平安道，黄海道にも一部分布している。(1b) a-si は主に済州島，全羅道，慶尚道に多く分布し，江原道では慶尚北道により近い三陟にのみ分布している。

(2) a-i 系：(2a) a-i は平安北道にのみ広く分布している。(2b) の ak-ki は咸鏡北道にのみ分布しているが，ek-ki は咸鏡道に広く分布している。

(3) po-ri ton-seŋ は慶尚道の南海にのみ分布している。

ただし，どの語形においても京畿道のデータがみられなかった。

### 4 文献上の記録

文献上では，15世紀中頃から16世紀にかけて 아스 と 앞○ という交替形で現れた。前者は単独形と共同格助詞がついた場合にみられ，後者は格助詞がついた場合にみられた。

앞이 모딜오도 無相猶矣실씨 <1447 龍飛御天歌 103>

내 ㅎ마 아스와 누위를 츠자볼 지비 업수니 <1481 杜詩諺解 23:46a>

四寸 앞을 사르미 다 뒷거늘 <1481 杜詩諺解 24:61b>

兄은 사랑커든 아스는 공경ㅎ며 <1518 翻譯小学 3:43b-44a>

15世紀中頃以降には，半齒音が消失した語形も多くみられた。

그 ㅍ 善友 | 앞을 불러 닐오디 <1459 月印積譜 22:49a>

형이 모로매 아을 사랑ㅎ며 아이 반드시 형을 공경ㅎ여 <1579 重刊警民編 6a>

兄은 사랑호디 벌마티 ㅎ며 아은는 공경호디 <1588 小学諺解 2:75a>

어느 時節에 업스려뇨 故郷애 아은와 누의왜 잇느니 <1632 重刊杜詩諺解 1:31b>

現代語の a-u (아우) は 19 世紀に多くの用例がみられた。

아들네 아우의게 히히 비 되엇시니 <1852 太上感応篇 4:46a>

남의 고모나 누의가 그 족하와 그 아우를 대 ㅎ야 곶으치며 <1896 獨立新聞>

### 5 考察

過去の文献上の記録から，中世語では 아스 や 앞○ のような交替形で現れており，最も古

い語形は \*아속 であったと推定できる。

(1) a-u 系は, 아속 の半歯音が消失し, 母音 · が第二音節で i に変化し, その後母音の円唇音化が起こったものと思われる。一部 (1b) a-si のような語形は, 主に南部地域でみられたが, この地域ではよく半歯音に対応して ㅅ が現れることがある。これらの語形の変化は次のように整理することができる。

\*아속 > 아ㅅ > 아으 > 아으 > 아우 / 아오

(2)の語形のうち, (2a) a-i は特に平安道でみられたが, 앞ㅇ の半歯音が消失し, 接尾辞 -i がついたものと思われる。また, (2b) ak-ki, ek-ki は主に咸鏡道で多くみられたが, この地域では語彙の第二音節に k や g がよくみられ, この語形のほかにも naŋ-gi(木) guŋ-gi(穴) などの例が挙げられる。これらの語形の変化は次のように推測できる。

\*아속 > 앞ㅇ > 아이 (平安)  
> \*앗ㄱ > \*앗기 > 아끼 > 애끼 (咸鏡)

(3) po-ri ton-seŋ については『高麗大韓国語大辞典』に 아우 の方言だと記されている。しかし「国立国語院」のホームページには, 現在は慶尚南道の統営と固城で使われている 보리동생 は, 語源の通りに解説すると 아우 ではなく「첫째 동생 (最初の兄弟)」を意味する語であると説明している。보리동생 の由来については不明である。

#### 参考文献

金泰鈞 (1986) 『咸北方言辞典』ソウル：太学社。

韓国精神文化研究院語文研究室 (1987-1995) 『韓国方言資料集』全9巻。城南：韓国精神文化研究院。

国立国語研究科 (1990) 『標準国語大辞典』ソウル：斗山東亜。

李基文 (1998, 修正版 2002) 『新訂版 国語史概説』ソウル：太学社。

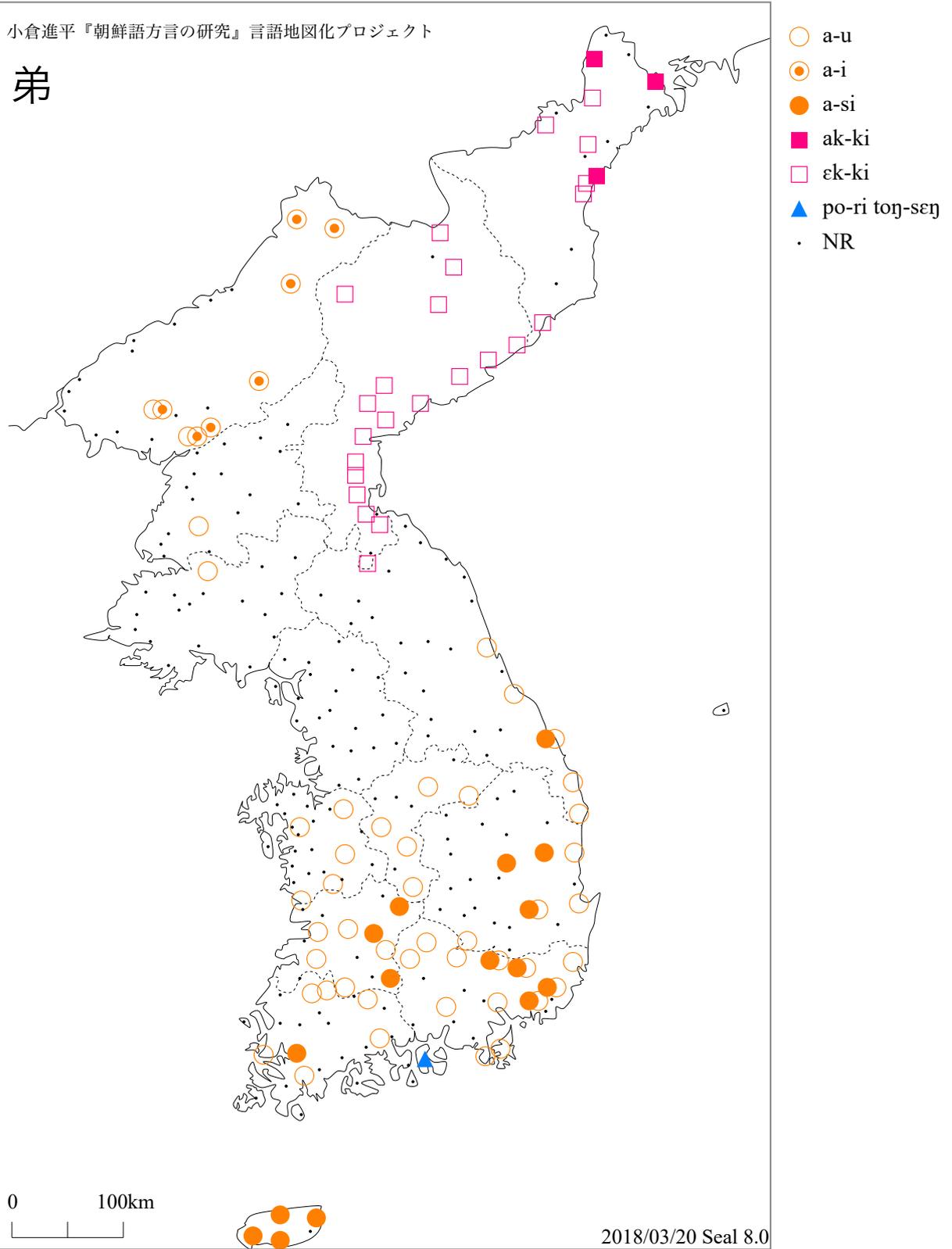
Ramsey, S. R. (1977) Velar lenition in Korean. 『李崇寧先生古稀紀念 国語国文学論集』ソウル：塔出版社。

꼬시고 재미있는 경남 방언 둘러보기. 국립국어원 온라인 소각지 썬표, 마침표.

(<https://news.korean.go.kr/index.jsp?control=page&part=view&idx=11574>)

最終アクセス日：2019.11.26

# 弟



## 姉妹

徐 旼 廷

### 1 はじめに

小倉進平(1944: 上 62-63)には「人倫」類の中の「姉妹」という項目で11種の語形が記録されている。日本語の「姉妹」にあたる韓国語の標準語は자매であり, 자매は『標準国語大辞典』によると, “여자끼리의 동기(同氣). 언니와 여동생 사이를 이른다.”(女性同士の同氣。姉と妹の仲を指す)と定義されている。ところが, 小倉進平(1944)に記録されている語形は韓国語の標準語누나と関連のある語形であり, 누나의定義は『標準国語大辞典』によると, “같은 부모에게서 태어난 사이거나 일가친척 가운데 향렬이 같은 사이에서, 남자가 순위 여자를 이르거나 부르는 말”(同じ父母から生まれた仲,あるいは一家の親戚の中の同じ世数の仲で, 男が目上の女性を呼ぶ言葉)である。

### 2 語形の分類

語形は, 語中にbが含まれているか否かによって, nu-i系とnu-bi系に二分することができる。nu-i系は殆どが2音節語で, 第1音節の母音はuであるが, 第2音節の母音にはi/u/ui/jaのバリエーションがある。nuŋ-uはnu-uの第1音節の末にŋが付いたものだと考えられる。また1音節語にはnuとnuiがあるが, これらの語形は, それぞれnu-iから第1音節の消失, 縮約の変化を経たと考えられる。nu-bi系は全て第2音節の語頭がbで始まる2音節語である。nui-bi以外の語形は第1音節がnu-であり, 第2音節の母音にはi/u/εのバリエーションがある。

(1) nu-i系: nu-i, nu-ii, nu-u, nuŋ-u, nu-ja, nu, nui

(2) nu-bi系: nu-bi, nu-bu, nu-bε, nii-bi

### 3 その他の語形

『咸北方言辞典』によると, 내, 누님, 누애, 누왜, 누위, 누배, 누비のような語形が見られる。

### 4 地理的分布

最も広い分布を見せているのは(1) nu-i系である。中でも nu-i は慶尚道を除いた広い地域に分布し, 全羅道, 忠清道, 京畿道, 黄海道, 咸鏡道に見られ, また江原道の海岸にも3か所, 平安道にも1か所見られる。1音節語 nu は主に全羅道を中心に分布しているが, 他に慶尚

道, 江原道の一部と平安道の 1 か所にも見られる。nui は平安北道と忠清道の一部に見られる。nu-ui は忠清南部の一部に, nu-u は慶尙南道の一部と咸鏡南道の一部に, nu-ja は慶尙南道の一部に見られる。また nuŋ-u は慶尙南道の 1 か所のみに見られる。nu, nui, nu-u は隣接していない, 離れた地域で見られる特徴がある。

(2) nu-bi 系は主に咸鏡道と慶尙道に見られるが, nu-bi は咸鏡道を中心に見られ, また慶尙南道にも 1 か所見られる。nu-bu は慶尙道のみ分布している。nu-be は咸鏡北道の 1 か所, nii-bi は咸鏡南道の 1 か所に見られる。

## 5 文献上の記録

文献上の記録を見ると누의, 누위, 누으님이見られ, 最も古い語形は누의である。(1) nu-i 系の中で最も広く分布している語形누이は見当たらなかった。

어마님내 되습고 누의님내 더브러 즉자히 나가니 力士와 百姓들 <1459 月印稷譜 2:6b>  
남지녀 이를 다스리고 누의는 겨지비 이를 다스릴씩 <1459 月印稷譜 4:11b>  
횃도로 안자셔 말호물 아스와 누의를 스랑하야 <1481 杜詩諺解 11:11a>  
그 엄이 흥가진 아이며 누의를 마자 써 도라왔더니 <1588 小学諺解 6:32b>

비록 즈조 누위를 爲하야 粥을 수고져 흥들 쏘 어루 得하려 <1475 内訓 3:42b>  
내 하마 아스와 누위를 츠자불 지비 업수니 <1481 杜詩諺解 23:46a>  
누위니를 어럿더니 屠岸賈 | 趙朔이를 주기고 <1481 三綱行実凶런던忠 25>

대군이 나가 우르시며 대던 형님이 누으님이란 어엿비 흥고 날난 본 테도 아니시니  
<16-- 癸丑日記 上 7a>

nu-bi 系と関連する語形は文献上の記録には見つからなかったが, 小倉進平(1944:下 50-53)によると, 『華夷訳語』(15 世紀)には「妹」を「餒必」とし, 「必」[pi]を使用している。小倉進平は, 他に「段」[pi-dan]を「必膽」, 「廣」[nu-run pit]を「努論必」, 「白」[hen-pit]を「害必」など, [pi], [bi]の音に「必」を当てていることから, 「妹」「餒必」は[nu-bi]である方言的な発音を映したものとしている。

## 6 考察

小倉進平 (1944:下 50-53) の解説のように, 『華夷訳語』(厳密には『朝鮮館駅語』)に「妹」「餒必」の記録があることから, 文献上の記録にはないものの, nu-bi が 15 世紀に方言形として存在したことが考えられる。また, 方言の分布を見ると, 語中に b が含まれている(2) nu-bi 系は, 主に咸鏡道と慶尙道に分布している。これは ㅁ の通時的な変化の地理的な違い, 即ち咸鏡道方言と慶尙道方言では ㅁ に変化し, 他の地域では w に変化したことと類似して

いる。また이기문(1998)によると, 비の場合は wi または i に変化し, wi に変化した場合は主に‘위(uy)’で表記したという。このことから, 古形 \*누비を再構することができ, 文献上に記録がある누위は, \*누비から비>위の変化を経た語形であることと推測される。但し, 文献上の最も古い語形누의は \*누비からの変化が考えにくいいため, \*누비의前の語形 \*누뵘があった可能性も考慮に入りたい。即ち, \*누뵘は \*누비あるいは누의になり, さらに누의は누으に, \*누비는누위になる変化を経たと考えられる。また, 누이は누위から w が脱落した語形で, 누야, 뉘は누이から j の挿入と縮約の変化を経た語形であろう。さらに, 누우は누으から第 1 音節の母音の影響によって変化した語形であり, また누우から눔우と누になっただろう。なお(2)nu-bi 系は \*누비から뵘>ㅁの変化を経た語形だと考えられる。

\*누뵘 > 누의 > 누으 > 누우 >눔우  
> 누

> \*누비 > 누위 > 누이 > 누야  
> 뉘

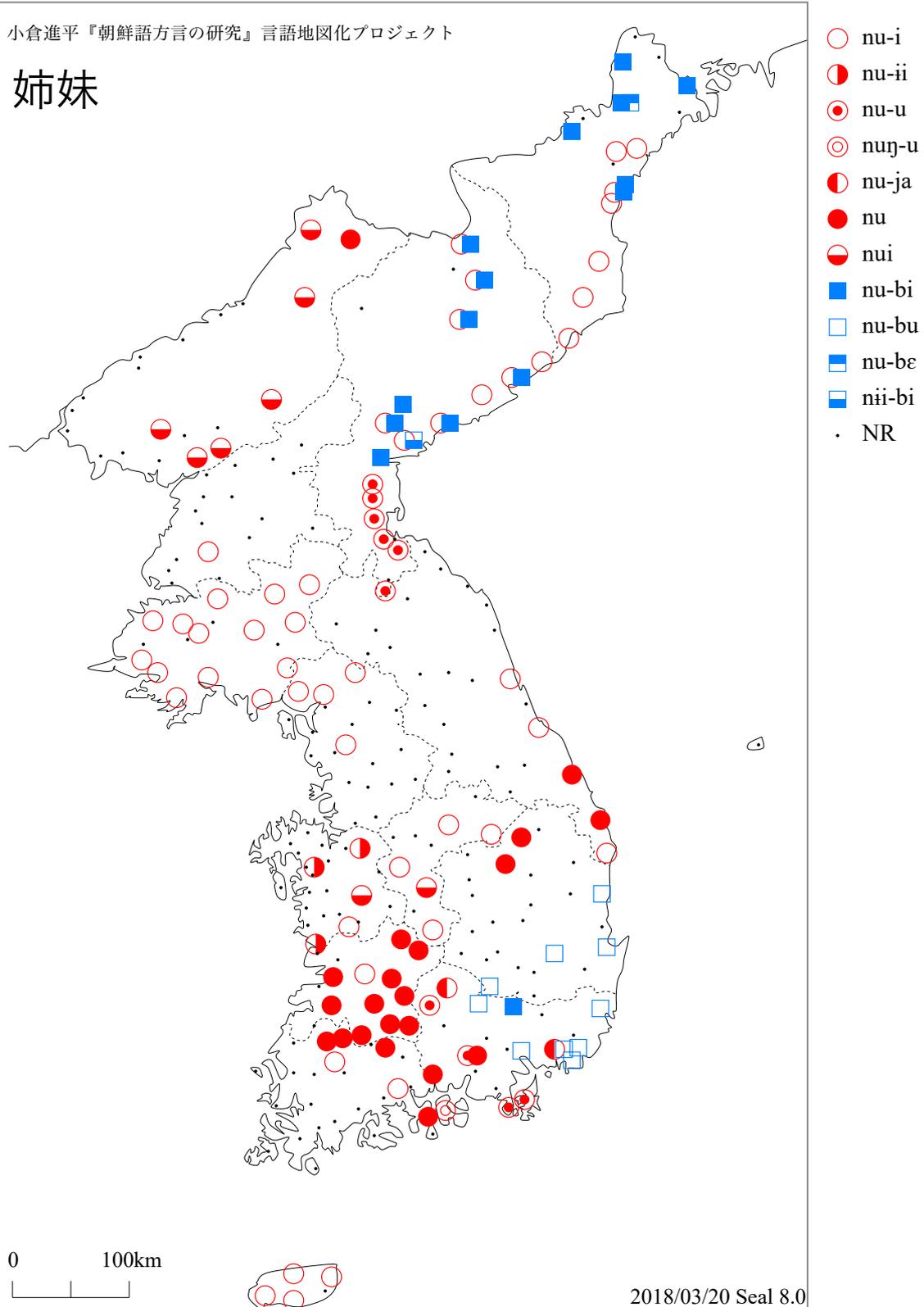
> 누비 > 누부/누배/뉘비

なお, 咸鏡道に(2) nu-bu 系の語形 nu-bi のみならず, (1) nu-i 系の分布も見られることから, この語においては咸鏡道でㅁの2つの変化が同時に起きたことが考えられる。

#### 参考文献

- 国立国語研究院(1999)『標準国語大辞典』ソウル：斗山東亜.  
 金泰均編著(1986)『咸北方言辞典』ソウル：京畿大学校出版局.  
 李基文(1998)『新訂版 国語史概説』ソウル：太学社.  
 劉昌惇(1964)『李朝語辞典』ソウル：延世大学校出版部.

# 姉妹



# 女

福井玲

## 1 はじめに

小倉進平 (1944: 上 65-67) には「人倫」の中で「女」という項目が2つ掲載されている。そのうち1つは, je-p<sup>h</sup>en-ne を代表語形とする卑語であるが, ここではそれは扱わず, kje-dzip を代表語形とするものを扱う。意味的には, 一般的な「女」の他に「妻」の意味で使われることもある。また, 現代語では意味的な低下が起こって半ば卑語化しているが, 中世語の段階ではそこまでの卑語化は起こっていなかったと考えられる。

## 2 語形の分類

この項目には以下の7つの語形が記録されている。これらは語頭子音が k のものと tʃ のものの2つに大別することができる。

### (1) kje-dzip 系

(1a) kje-dzip, (1b) ke-dzip, (1c) kɛ-dzip, (1d) ki:-dzip

### (2) tʃe-dzip 系

(2a) tʃe-dzip, (2b) tʃɛ-dzip, (2c) tʃi-dzip

この単語は現在も第1音節に長母音を持つ方言が見られるが, 小倉進平の資料ではなぜか, (1d) ki:-dzip のみ長母音の表記がされている。

## 3 その他の語形

この項目に関しては済州島のデータが抜けているが, 玄平孝 (1962, 修正版 1985) による제집(稀, 全域), 지집(全域), 기집(全域)となっている。(稀)とされる제집を除くと, 지집が代表的な語形と考えられるが, 口蓋音化を起こさない語形も共存する。

## 4 語形の地理的分布

まず, (1) kje-dzip 系は大きく見れば半島北部に多く分布するが, 南部にもかなり多くの地点に点在する。その中で, ke-ではない kje-を持つとされる地域は平安道<sup>1</sup>, 咸鏡北道の北部と京城である。次に(2) tʃe-dzip 系は全羅道, 忠清道, 慶尚道と江原道南部など南部地域を中心に分布するほか, 咸鏡道では, 咸鏡北道南部と, それに隣接する咸鏡南道に分布する。

<sup>1</sup> 但し, 金履浹編著 (1981) 『平北方言辞典』によれば平安北道は제집ではなく계집であるとされており, 小倉進平の kje-dzip がはたしていつまで存在したのか明確ではない。

一般的に、口蓋音化を起こす項目では、咸鏡道では咸鏡南道はほぼ全域で口蓋音化が見られるが、この項目はそうでないという点で注目される。また、kje-dʒip 系が南部地域にも比較的多く点在する点も、典型的な口蓋音化を起こす項目とは異なる。

## 5 過去の文献上の記録

(1) の kje-dʒip 系については、中世語・近代語において、겨집, 계집という2つの形が見られる。

如來 太子入 時節에 나를 겨집 사므시니 <1447 釈譜詳節 6:4a>

그저긔 拘尸城엿 남진과 겨집과 無數ᄃᆞᆫ 菩薩 聲聞 <1447 釈譜詳節 23:36b>

자내ᄃᆞᆫ 겨집 ᄃ리고 ᄃᆞ히 살건다 <15-- 順天金氏諺簡 60:6>

계집을 어두되 동성을 取취티 마를 디니 <1518 翻譯小学 3:12a>

던시 울고 날오되 ᄃ마 기뵈 계집이 도여시니 <1727 年重刊統三綱行実凶烈女凶 3a>

この2つのうちで겨집は15世紀以降20世紀初頭まで使われ、계집は16世紀に初めて登場し、それ以降、表記上は現在まで引き継がれている。中世語では、15世紀にはもっぱら겨집が使われ、16世紀になっても계집が登場した後でも、それより겨집の方が主流である。例えば『順天金氏諺簡』、『翻譯朴通事』(1517頃)、『翻譯老乞大』(1517頃)、『訓蒙字会』(1527)、『小学諺解』(1588)などではもっぱら겨집が用いられる。それに対して、『翻譯小学』(1518)などでは、依然として겨집が主流ながらも、계집がいくつか出始める。なお、流布している電子化資料に含まれる『重刊統三綱行実凶』において계집の例が多く見られ、これはその資料では1581刊とされているが、実際には17世紀以降に刊行されたものと考えられる<sup>2</sup>。

こうした傾向は17世にも引き続いて見られるが、18～19世紀にかけて徐々に계집の比率が多くなり、19世紀末にはこれが圧倒的に多くなる。なお、계の発音はもともと [kjəi] のような重母音であったが、18～19世紀にかけて二重母音の [əi] が [e] と短母音化するので、19世紀末の계집は小倉進平が記録したものと同一 kje-dʒip であったはずであるが、それ以前(特に17, 18世紀)の資料に見られるものは [kjəidʒip] (小倉進平式の表記では kjəi-dʒip) という二重母音であったと考えられる点に注意する必要がある。

一方、口蓋音化を起こした語形、つまりㅍで始まる語形は20世紀初頭まで文献上には見られない。

<sup>2</sup> これはおそらく1983年刊の弘文閣影印『統三綱行実凶 原刊本・重刊本(合本)』によっていると推測されるが、そこに収録されている重刊本は「丁未閏三月 日箕當開刊」とありこの「丁未」は澁谷秋氏のご教示によれば1727年の可能性が高いとのことである。

## 6 考察

現在、標準語で계집と書かれていてもその発音は kje-dʒip ではなく、ke-dʒip である。小倉進平のデータでは、この2つの語形が使い分けられており、前者は平安道、咸鏡北道北部、そして京城に分布する。また小倉進平は表記していないが、もともとこの単語は上声をもっていた点を考慮すると、この単語の中央語における変遷は次のようになる。

I kje:dʒip > kjəidʒip > kje:dʒip > ke:dʒip  
(または kjə:jdʒip)

一方、口蓋音化を起こした語形に関しては、ki で始まる語 (길, 기둥, 기름, ...) のような典型的に口蓋音化を起こす項目では南部地方と咸鏡南道のほぼ全域がその地域となるのに対して、この項目は上で述べたように、それとは分布が異なる。すなわち、口蓋音化を典型的に起こす南部方言と咸鏡南道方言において、南部方言には口蓋音化を起こさない地域が点在し、また咸鏡南道方言はほぼ全域が口蓋音化を起こさない地域になっている。

まず、口蓋音化を起こさない地域について、上記以外の場合、すなわち ki:-dʒip あるいは ke-dʒip は ke:dʒip から次のような変化を経たと考えられる。

II ke:dʒip > ki:dʒip (狭母音化)  
III ke:dʒip > ke-dʒip (/e/ と /ɛ/ の弁別性喪失)

次に、口蓋音化を起こす地域の場合は、次のような変化が考えられる。

IV kje:dʒip > tʃe-dʒip > tʃi-dʒip  
V ki:dʒip > tʃi-dʒip

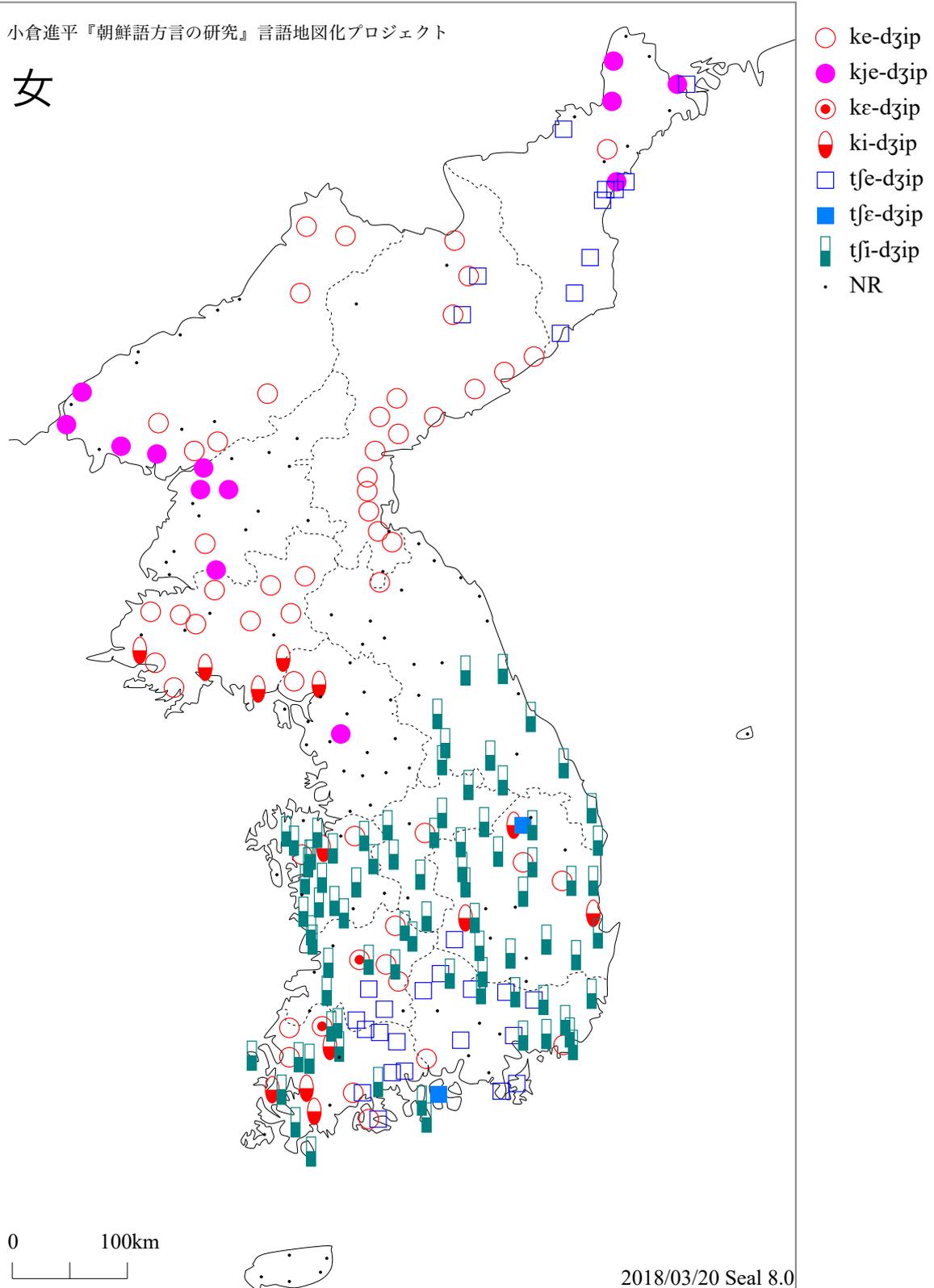
実際には tʃe-dʒip よりも tʃi-dʒip を持つ地域がはるかに多いことを考えると、IV よりも V の変化を起こした地域が多かったと考えられる。

## 参考文献

金履浹編著 (1981) 『平北方言辞典』 城南：韓国精神文化研究院。

玄平孝 (1962, 修正版 1985) 『済州島方言研究』 (資料篇・論考篇) ソウル：二友出版社。

# 女



## 顎

前田夏菜

### 1 はじめに

日本語の「顎」にあたる韓国語の標準語は턱であり、小倉進平(1944: 上 55-56)には「身体」類の中に「頤」という項目名で合計 22 個の語形が記録されており、『標準国語大辞典』によると턱は“사람의 입 아래에 있는 뾰족하게 나온 부분. (人の口の下にある尖って出た部分)”と定義されている。

### 2 語形の分類

22 個の語形は 2 通りの方法で分類することができる。

まず第一音節の母音による分類 A である。これは第一音節の母音が /a/, /ʌ/, /o/, /o/, /ɛ/, /e/ の 6 通りの分類方法がある。また, a-gu-tʰak は tʰak に接頭辞がついたものであると考え、(1)に分類した。

#### 分類 A

- (1) tʰak, tʰak-su-ga-ri, tʰaŋ-ne-gi, taŋ-ne-gi, a-gu-tʰak
- (2) tʰʌk, tʰʌ-ga-ri,
- (3) tʰɔk, tʰɔk-tʃu-ga-ri, tʰɔ-gɔ-ri, tʰɔ-ga-dʒi, tʰɔk-pʰɛ-gi
- (4) tʰok-su-ga-ri
- (5) tʰɛk, tʰɛk-su-ga-ri, tʰɛk-sa-ga-ri, tʰɛk-soŋ-a-ri, tʰɛk-tʃo-ga-ri, tʰɛ-gɔ-ri, tʰɛ-ga-ri, tʰɛ-a-ri
- (6) tʰe-a-ri

次に第二音節以降の構成に注目した分類 B である。これは 1 音節のみで形成されている (7) tʰɔk 系。第一音節の終声に /k/ が含まれ、且つ第二音節に歯茎摩擦音 /s/ が現れるか破擦音 /tʃ/ が現れるかによって (8) tʰɛk-su-ga-ri 系と (9) tʰɛk-tʃo-ga-ri 系、第二音節に有声軟口蓋破裂音 /g/ の音が現れる (10) tʰɛ-ga-ri 系、第二音節に /g/ は現れないものの (10) とほぼ同系と言える (11) tʰɛ-a-ri 系、第一音節に軟口蓋鼻音 /ŋ/ の含まれる (12) tʰaŋ-ne-gi 系、そして一地点ずつしか見られない (13) その他語形 tʰɔk-pʰɛ-gi, a-gu-tʰak に分類することができる。

#### 分類 B

- (7) tʰɔk 系
  - (7a) tʰɔk (7b) tʰɛk (7c) tʰʌk (7d) tʰak

(8)  ${}^h\text{ek-su-ga-ri}$  系

(8a)  ${}^h\text{ek-su-ga-ri}$ ,  ${}^h\text{ek-sa-ga-ri}$ ,  ${}^h\text{ek-soŋ-a-ri}$  (8b)  ${}^h\text{ak-su-ga-ri}$  (8c)  ${}^h\text{ok-su-ga-ri}$

(9)  ${}^h\text{ek-tʃo-ga-ri}$  系

(9a)  ${}^h\text{ek-tʃo-ga-ri}$  (9b)  ${}^h\text{ok-tʃu-ga-ri}$

(10)  ${}^h\text{e-ga-ri}$  系

(10a)  ${}^h\text{e-gɔ-ri}$ ,  ${}^h\text{e-ga-ri}$  (10b)  ${}^h\text{ʌ-ga-ri}$  (10c)  ${}^h\text{ɔ-gɔ-ri}$ ,  ${}^h\text{ɔ-ga-dʒi}$

(11)  ${}^h\text{e-a-ri}$  系

(11a)  ${}^h\text{e-a-ri}$  (11b)  ${}^h\text{e-a-ri}$

(12)  ${}^h\text{aŋ-nɛ-gi}$  系

(12a)  ${}^h\text{aŋ-nɛ-gi}$  (12b)  $\text{taŋ-nɛ-gi}$

(13) その他

${}^h\text{ok-p}^h\text{e-gi, a-gu-}{}^h\text{ak}$

### 3 その他の語形

その他の語形として『韓国方言資料集』(1987)によると、濟州島で  ${}^h\text{ɔ-ga-ri}$ ,  $\text{a-gul-}{}^h\text{ak}$ , 慶尚北道で  $\text{tɛk-su-ga-ri}$ ,  $\text{a-gu}$ , 慶尚南道, 江原道, 忠清南道, 全羅南道で  ${}^h\text{ek}$ , 全羅北道で  ${}^h\text{e-ga-ri}$  と小倉進平の記述しているもの以外にも多くの語形がある。

### 4 語形の地理的分布

まず、分類 A によると、(1)の母音が/a/のものは一部濟州島にも例がみられるが主に朝鮮半島北部に分布している。(2)/ʌ/は濟州島にのみ分布がみられる母音であり、(3)/ɔ/は黄海道・京畿道・忠清道に、(3)/o/は黄海道と京畿道北部の一部地域、(4)/ɛ/は北は咸鏡道から南は慶尚道・全羅道まで広い地域に分布しているが、咸鏡道・江原道では海沿いの地域に多く分布している。(5)/e/は忠清南道の一地点にのみ見られる母音である。

次に、分類 B によると(7)の  ${}^h\text{ok}$  系は広い地域で見られたが、現在の標準語である(7a) ${}^h\text{ok}$  は黄海道を中心に分布しており他地域では京畿道, 忠清道の一部にしか見られなかった。(7)の  ${}^h\text{ok}$  系で最も広く分布しているのは(7b)の  ${}^h\text{ek}$  であり、その他(1c)  ${}^h\text{ak}$  と(7d)  ${}^h\text{ak}$  は濟州島のみに見られた。(8)の  ${}^h\text{ek-su-ga-ri}$  系は朝鮮半島中心部と慶尚道, 江原道の南部海沿いの地域に分布している。(9)の  ${}^h\text{ek-tʃo-ga-ri}$  系は(3a)  ${}^h\text{ek-tʃo-ga-ri}$  が慶尚南道と全羅北道, (9b)の  ${}^h\text{ok-tʃu-ga-ri}$  は京畿道の一地点でのみ確認されている。(10)  ${}^h\text{e-ga-ri}$  系は主に忠清道, 全羅道, 濟州島を中心に使用されており、一部江原道にも見られた。(11)  ${}^h\text{e-a-ri}$  系は忠清道にのみ分布し、(12)  ${}^h\text{aŋ-nɛ-gi}$  系は朝鮮半島北部で広く使用されている。(13)その他語形として分類した  ${}^h\text{ok-p}^h\text{e-gi}$  は忠清道,  $\text{a-gu-}{}^h\text{ak}$  は濟州島のそれぞれ一地点でのみ記録されている。

### 5 過去の文献上の記録

最も古いと考えられる語形は𪎐で、一番初めに出てくるのは『訓民正音解例』(1446)にお

いてである。

中聲・如 ㅍ 爲頤 <1446 訓民正音解例 56>

ㅍは以下に挙げたように 16 世紀から 17 世紀においても使用されており、現在でも濟州島において方言形として残っている。

頤 ㅍ <1527 訓蒙字会上 13a>

頤 ㅍ <1576 新增類合上 21a>

下頤 ㅍ 下把領子 ㅍ 下把 ㅍ <1690 約語類解 上 34a>

また、次に古いと考えられる語形はㅍである。この形は 17 世紀より見られる。

문득 눈물이 ㅍ애 흐르더라 <1617 東国新統三綱行実図 4:5b>

狼頭눈 ㅍ 아래 고기를 드디는 듯호도다 <1632 杜詩諺解 重刊本 2:7b>

頤 ㅍ <1700 新增類合영장사 13a>

他の母音に関しては、いつから使用されるようになったのか過去の文献に記載がなかった。

## 6 考察

最も古い語形はㅍであるが、17 世紀にはㅍと併用されるようになっている。/・/は多くの場合第一音節ではㅍの音に変化しているが、ㅍはㅍの音に変化している例であるといえる。分類 A では母音によって分類を行ったが、濟州島に見られる/ㅍ/以外は過去の文献において『顎』の用例として記載されているものを発見することができなかった。

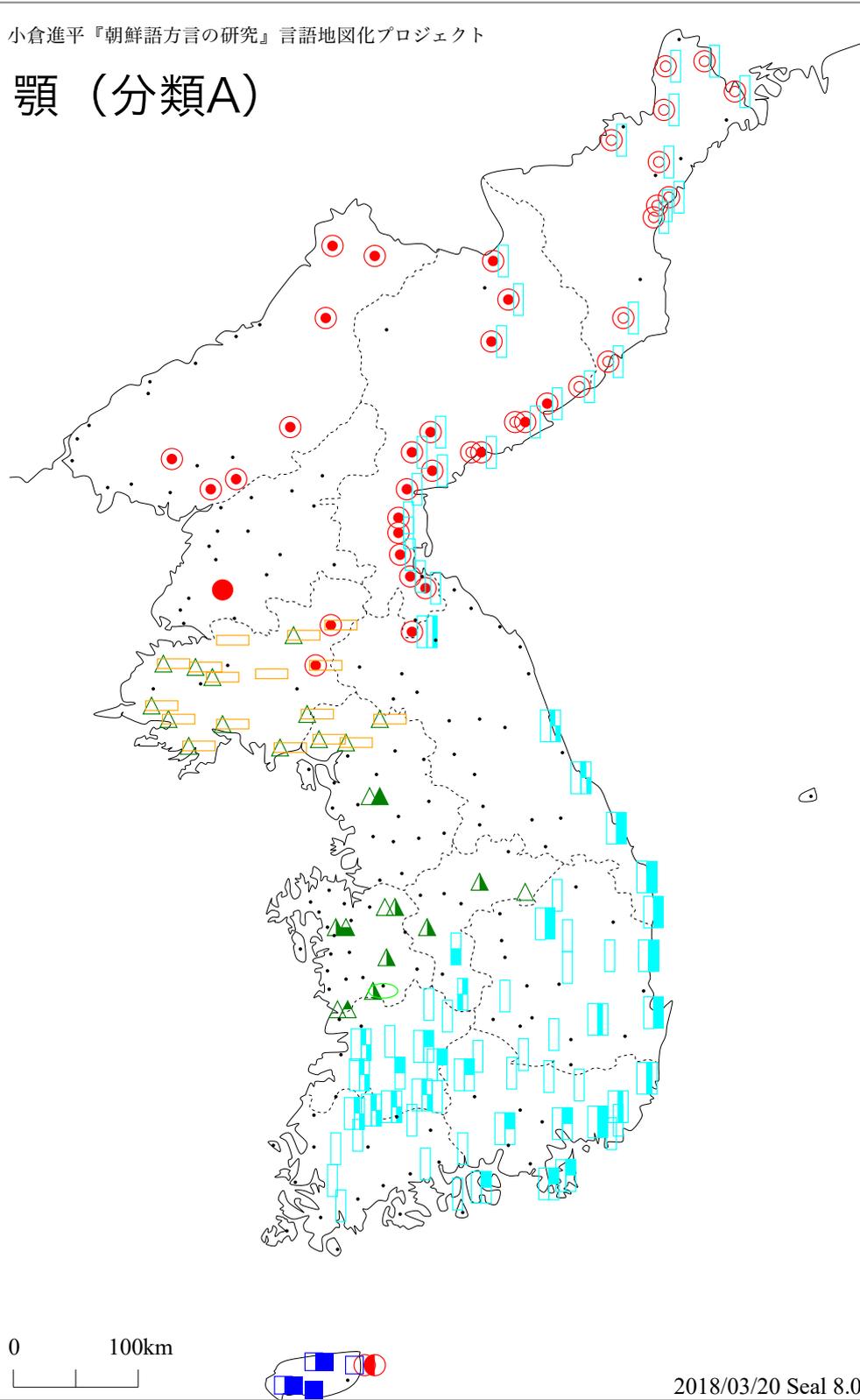
分類 B の(11)<sup>th</sup>e-a-ri 系は(10)の <sup>th</sup>e-ga-ri 系からㅍが脱落したと考えられ、『韓国方言資料集』(1987)には慶尚北道方言として <sup>th</sup>ek-a-ri の記載もみられるが、これは(10)<sup>th</sup>e-ga-ri 系と同じものを指していると思われる。しかし小倉進平の記録によると慶尚北道では(10)<sup>th</sup>e-ga-ri 系のみならず(11)<sup>th</sup>e-a-ri 系も記載されておらず、この地域では(7b)<sup>th</sup>ek のほかには(8)<sup>th</sup>ak-suga-ri 系が 2 パターン見られるのみである。また、(8)から(11)の殆どに共通して a-ri という語尾が見られるがこれは派生語を作り出す際の接尾辞であったと考えられる。

最後に(13)その他に分類した a-gu-<sup>th</sup>ak であるが、小倉進平の記録では濟州島の一地点のみ記載されている。しかしこの他に似た語形として濟州島で a-gul-<sup>th</sup>ak, 慶尚北道で a-gu が確認されている。濟州島ではアンコウのことを a-gul-<sup>th</sup>とあらわすことから、この 3 つの語形に共通する a-gu は顎が特徴的である魚のアンコウと何かしらの関連性があると捉えることができる。

#### 参考文献

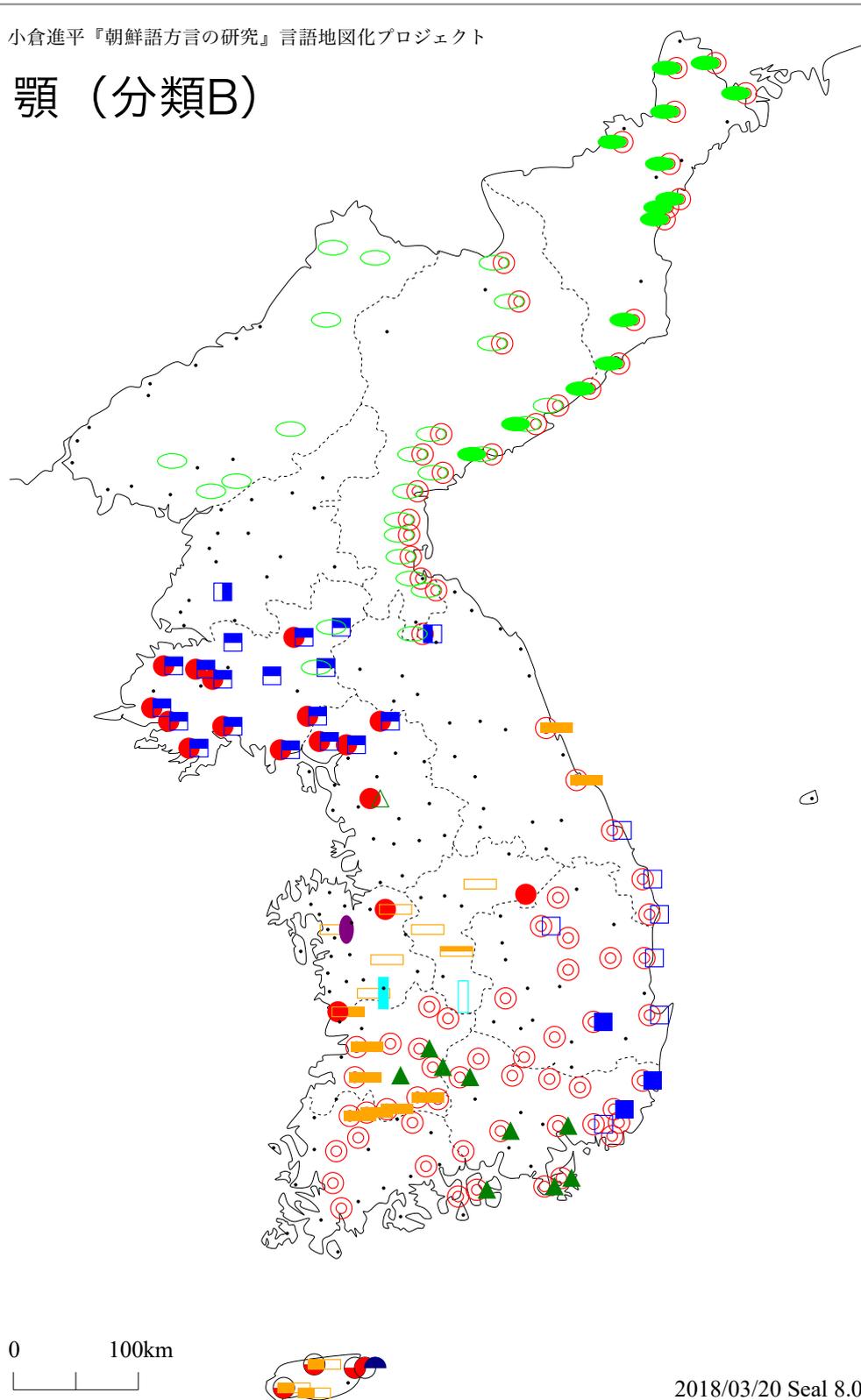
- 韓国精神文化研究院語文研究室 (1987-1995) 『韓国方言資料集』 城南: 韓国精神文化研究院.  
国立国語研究院 (1990) 『標準国語大辞典』 ソウル: 斗山東亜.

# 顎 (分類A)



- t<sup>h</sup>ak
- t<sup>h</sup>k-su-ga-ri
- ◉ t<sup>h</sup>aŋ-nɛ-gi
- ◊ t<sup>h</sup>aŋ-nɛ-gi
- ◐ a-gu-t<sup>h</sup>ak
- t<sup>h</sup>ʌk
- t<sup>h</sup>ʌ-ga-ri
- △ t<sup>h</sup>ɔk
- ▲ t<sup>h</sup>ɔk-tʃu-ga-ri
- ▲ t<sup>h</sup>ɔ-gɔ-ri
- ▲ t<sup>h</sup>ɔ-ga-dʒi
- ▲ t<sup>h</sup>ɔk-p<sup>h</sup>ɛ-gi
- ▭ t<sup>h</sup>ok-su-ga-ri
- ▭ t<sup>h</sup>ɛk
- ▭ t<sup>h</sup>ɛk-su-ga-ri
- ▭ t<sup>h</sup>ɛk-sa-ga-ri
- ▭ t<sup>h</sup>ɛk-son-a-ri
- ▭ t<sup>h</sup>ɛk-tʃo-ga-ri
- ▭ t<sup>h</sup>ɛ-gɔ-ri
- ▭ t<sup>h</sup>ɛ-ga-ri
- ▭ t<sup>h</sup>ɛ-a-ri
- t<sup>h</sup>e-a-ri
- NR

# 顎 (分類B)



- t<sup>h</sup>ɔk
- t<sup>h</sup>ɛk
- ◐ t<sup>h</sup>ʌk
- ◑ t<sup>h</sup>ak
- t<sup>h</sup>ɛk-su-ga-ri
- t<sup>h</sup>ɛk-sa-ga-ri
- ◐ t<sup>h</sup>ɛk-soŋ-a-ri
- ◑ t<sup>h</sup>k-su-ga-ri
- ◒ t<sup>h</sup>ok-su-ga-ri
- ▲ t<sup>h</sup>ɛk-tʃo-ga-ri
- △ t<sup>h</sup>ɔk-tʃu-ga-ri
- ▭ t<sup>h</sup>ɔ-gɔ-ri
- ▮ t<sup>h</sup>ɛ-ga-ri
- ▯ t<sup>h</sup>ʌ-ga-ri
- ▰ t<sup>h</sup>ɔ-ga-dʒi
- ▱ t<sup>h</sup>ɛ-gɔ-ri
- ▭ t<sup>h</sup>ɛ-a-ri
- ▮ t<sup>h</sup>ɛ-a-ri
- t<sup>h</sup>aŋ-nɛ-gi
- taŋ-nɛ-gi
- t<sup>h</sup>ɔk-p<sup>h</sup>ɛ-gi
- a-gu-t<sup>h</sup>ak
- NR

## 煙出し

澁谷秋

### 1 はじめに

韓国の標準語は굴뚝 (kul-ʔtuk) であるが、これにあたる語は『朝鮮語方言の研究』の「家屋」に「煙出し」という項目名で22種記録されている(上: 119-121)。

### 2 語形の分類

これらの語形は kul 系, jɔŋ-gii 系, nɛ 系に分けることができる。

#### (1) kul 系

(1a) kul-ʔtuk / kul-ʔtɔk / kul-ʔtuŋ

(1b) kuil-ʔtuk / kui-ʔtuk / ki-ʔtuk / ke-ʔtuk

(1c) kul-muk / kul-mok / kul-muk-tuk / kul-muk-tʰoŋ / ku-muk / kum-muk

(1d) kul-tʰoŋ

(1e) ku-se / ku-se-tʰoŋ / ku-sa-tʰoŋ

#### (2) jɔŋ-gii 系

jɔŋ-gii-tʰoŋ / en-gi-tʰoŋ / jɔn-tʰoŋ

#### (3) nɛ 系

nɛ-ʔtuk / nɛ-tʰoŋ

小倉進平は(1a) kul-ʔtuk に「煙筒無く、地表に穴のみあるもの」と、(1d) kul-tʰoŋ, (1e) ku-se-tʰoŋ, ku-sa-tʰoŋ, (2) jɔŋ-gii-tʰoŋ / en-gi-tʰoŋ / jɔn-tʰoŋ, (3) nɛ-tʰoŋ に「[tʰoŋ] を附せる語は近代式の煙突あるもの」と注を付ける。ただし(1c) kul-muk-tʰoŋ に注は付けていないため、tʰoŋ がつくすべての語形が近代式の煙突を指すわけではないようだ。

### 3 その他の語形

굴뚝は『韓国方言資料集』(1989)で「飲食」の項目に掲載される。現在の標準語形굴뚝は韓半島全域で記録されている。小倉進平のデータにはない語形としては江原道原城で굴뚝, 慶尚南道密陽, 巨濟で굴뚝, 全羅北道高敞귀새, 全羅北道淳昌, 全羅南道長城, 新安, 康津귀똥の語形が記録されている。굴뚝と굴뚝, 귀똥は(1a), 귀새は(1e)の変種と考えられる。なお、『韓国方言資料集』(1989)の質問用紙には「'연통(煙筒)'과 구별할 것」と注記が付されるため、(2)に相当する語形は記録されない。

#### 4 地理的分布

近代式の煙出しを表す語形(地図上で横長の長方形で表示。(1d) kul-tʰoŋ, (1e) ku-se-tʰoŋ, ku-sa-tʰoŋ, (2) jɔŋ-gii-tʰoŋ, en-gi-tʰoŋ, jɔn-tʰoŋ, (3) ne-ʰoŋ) と, 煙筒無く, 地表に穴のみあるもの(以下, 旧式とする。近代式以外の語形全て)とがあり, それぞれ地域によって使用される語形が明確に分かれる。近代式の煙出しは, 平安道は(1d) kul-tʰoŋ, 黄海道全域と江原道の一部地域では(1e)の ku-se-tʰoŋ, ku-sa-tʰoŋ, 京畿道, 忠清道, 全羅道と, 慶尚南道の一部地域では(2) jɔŋ-gii 系の語形, 濟州島では(3) ne-ʰoŋ の ne 系がそれぞれ使用される。旧式の煙出しを表す語形のうち(1) kul 系は第二音節の要素のより分布様相が明確に分かれる。第二音節に-ʔtuk を持つ(1a)と(1b)は最も分布範囲が広く, 黄海道, 江原道以南の濟州島を含む朝鮮半島南部でみられる。第二音節に-muk を持つ(1c)と-se を持つ(1e)は黄海道以北に分布する。具体的には(1c)は江原道の一部と平安北道, 咸鏡道といった朝鮮半島北部, (1e) ku-se は咸鏡道全域で見られる。(3) ne-ʔtuk は濟州島でだけ見られる。

(2)と(3)は「煙」を表す연기(煙気)あるいは固有語形の내に-tʰoŋ(筒)や-ʔtuk が付加した語形である。「煙出し」の jɔŋ-gii 系と ne 系の語形の分布は「煙」の jɔŋ-gii 系と ne 系の語形の地理的分布とほぼ一致する(澁谷秋(2017)参照)。

#### 5 過去の文献上の記録

文献上に現れる時期は非常に遅く, 最も古い語形は『訳語類解』(1690)に記録される글入毒である。外国語学習書や19世紀以降は字典や新聞記事で用例が見られ, 色々な漢字の訳語にあてられている。

烟洞 글入毒 <1690 訳語類解上 18b>

煙洞 글독 <1778 方言類積 西部方言 21a>

煙洞倒風 글독에 브름치다 <1778 方言類積 亥部方言 10b>

글독 돌 埃 <1781 倭語類解上 33a>

煙洞 글독 <1790 蒙語類解上 26b>

글독 烟突 글독식 글독식 烟突通 <1880 韓仏字典>

이제부터 연기나는 글독은 집 우흐로 놓히 내여 <1896 獨立新聞>

竈突 글독 煤 헛부엌 疥 살광 <18-- 広才物譜>

(1d) の語形は구새통が『韓仏字典』(1880)で見られる。

구새통 烟筒 <1880 韓仏字典 211>

#### 6 考察

「煙出し」に記録される語形は글, 연기, 내에-ʔtuk, -muk, -tʰoŋ を付加させたものであ

る。(1) kul 系の語源はよくわからない。漢字語であるなら굴 (窟), 固有語であるなら現代語で穴を意味する구멍の中世語形구모, 구무と関連するのかもしれない。(1b)は kuil-ʔtuk の第一音節の l が脱落し, さらに第一音節の母音が i となり kuil-ʔtuk > kui-ʔtuk > ki-ʔtuk の変化が想定される。i と e の混同はよく見られる現象であるから, ke-ʔtuk は ki-ʔtuk の変種であろう。(1b)の kuil-ʔtuk や『韓国方言資料集』に記録される귀뜰, 귀새といった第一音節が kuil や kui の語形がどのようにして生じたのか, また kul 系のうち大部分を占める第一音節が kul の語形とどのような関係なのか, どちらがより古い語形なのかよくわからない。第一音節に i を持つ語形はすべて全羅道で記録されるため, 地域的な変種とみるしかなさそう。 (1d)は kul-muk の第一音節の l が脱落した ku-muk, それがさらに重音添加を起こした kum-muk がある。また, kul-muk-tuk や kul-muk-t<sup>h</sup>oŋ のように-ʔtuk, -muk, -t<sup>h</sup>oŋ を組み合わせて複数付加した語形もみられる。(1e)の ku-se / ku-se-t<sup>h</sup>oŋ / ku-sa-t<sup>h</sup>oŋ は現代語の구새, 구새통<sup>1</sup>と直接関係のある語だと推測されるが, よくわからない。

(1) kul 系の変化は次のように想定される。

(1) kul 系

kuil-ʔtuk > kul-ʔtək  
 > kul-ʔtuŋ  
 kuil-ʔtuk > kui-ʔtuk > ki-ʔtuk > ke-ʔtuk  
 kul-t<sup>h</sup>oŋ  
 kul-muk > ku-muk > kum-muk  
 > kul-muk-tuk  
 > kul-muk-t<sup>h</sup>oŋ

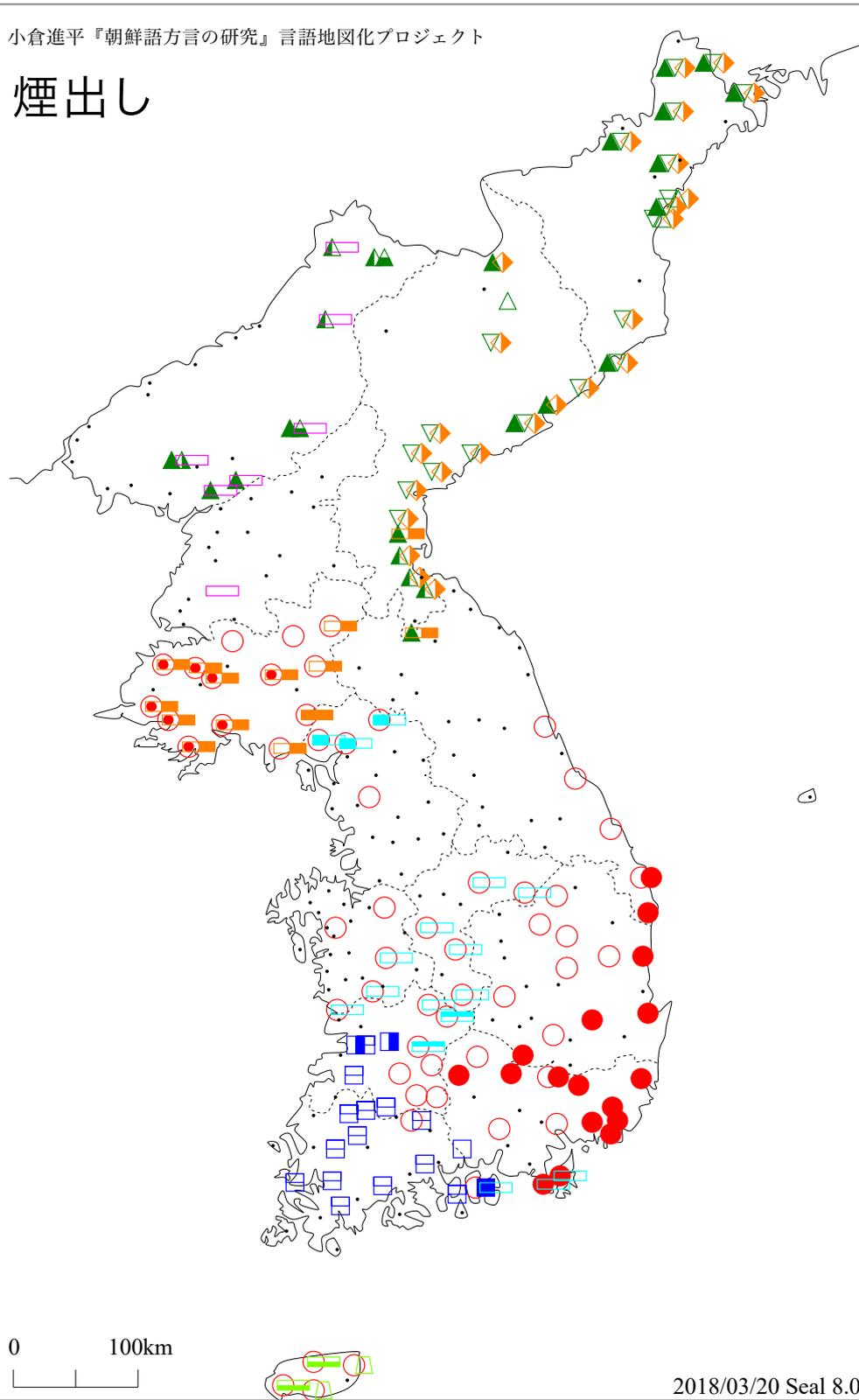
(2) jəŋ-gii 系は jəŋ-gii や, jən (煙), 方言系の en-gi に-t<sup>h</sup>oŋ が, (3)の ne 系は固有語の ne に-ʔtuk, -t<sup>h</sup>oŋ が付加した語形。

参考文献

韓国精神文化研究院語文研究室編 (1987-1995) 『韓国方言資料集』全 9 卷.城南:韓国精神文化研究院.  
 金泰均編著 (1986) 『咸北方言辞典』ソウル:京畿大学出版局.  
 金履浹編著 (1981) 『平北方言辞典』城南:韓国精神文化研究院.  
 澁谷秋 (2017) 「煙」福井玲編「小倉進平『朝鮮語方言の研究』所載資料による言語地図とその解釈」125-128.  
 劉昌惇 (1964) 『李朝語辞典』ソウル:延世大学出版部.  
 한글학회 (1991) 『우리말 큰사전』ソウル:語文閣.

<sup>1</sup> 표준국어대사전 구새통: 나무로 만든 굴뚝. 원래는 구새가 먹은 나무로 만들었다. ≡ 구새.

# 煙出し



- kul-ʔtuk
- kul-ʔtək
- ◉ kul-ʔtuŋ
- kuil-ʔtuk
- kui-ʔtuk
- ki-ʔtuk
- ke-ʔtuk
- ▲ kul-muk
- ▲ kul-mok
- ▲ kul-muk-tuk
- ▲ kul-muk-tʰoŋ
- ▽ ku-muk
- △ kum-muk
- kul-tʰoŋ
- ◇ ku-se
- ku-sa-tʰoŋ
- ku-se-tʰoŋ
- jən-gii-tʰoŋ
- jən-tʰoŋ
- en-gi-tʰoŋ
- △ nɛ-ʔtuk
- nɛ-tʰoŋ
- NR

## 肉魚

岩井亮雄

### 1 はじめに

項目名は「肉魚」であるが(上: 162), 索引の見出しには「肉・魚」とあるので(索引: 8), 「にく・さかな」または「にく・うお」などと読める。

韓国の標準語は ko-gi (고기) である。これにあたる語は『朝鮮語方言の研究』の「飲食」に「肉魚」という項目名で11種の語形が記録され(上: 162-163), ko-gi 系と po-si-si-ri 系に分類できる。

#### (1) ko-gi 系

(i) ko-gi

(ii) ko-i-gi

(iii) kɔ-gi / kwe-gi / kwɛ-gi / ke-gi / kɛ-gi / kui-gi (=kwi-gi) / ki-gi

#### (2) po-si-si-ri 系

po-si-si-ri / pɔ-ʔsi-si-ri

(1)は ko-gi とそのバリエーションである。kui-gi は小倉進平の転写の原則に従うと kwi-gi のようになる(下: 13-14)。

(2)は山人参採取業者の隠語である(上: 163)。平北の江界には, tʃuŋ-mi-ri po-si-si-ri (猪肉), oŋ-tʃi(sic) po-si-si-ri (牛肉)という補足説明がある(上: 163)。tʃuŋ-mi-ri は「猪」を表す山人参採取業者の隠語である(上: 292)。uŋ-tʃi は「牛」を, uŋ-tʃi po-si-si-ri は「牛肉」を表す山人参採取業者の隠語である(上: 295-296)。

### 2 その他の語形

『増補 韓国方言辞典』(1990) には ko-gi 系の変種として kje-gi (全南・咸南・咸北), ko-i (慶北), ko-ri (慶北), ʔko-gi (咸南), ʔko-i (忠北・忠南)が見られるほか, 咸北・平北で je-ri という語が見られる。je-ri は「魚」を表す山人参採取業者の隠語である(上: 308)。

### 3 地理的分布

ko-gi 系は全道的に, 山人参採取業者の隠語の po-si-si-ri 系は咸南・平北に見られる。

ko-gi 系のバリエーションの分布は次のとおりである。

- (i) ko-gi : 慶北・江原・咸北・平南・平北
- (ii) ko-i-gi : 忠南(舒川)
- (iii) (a) kɔ-gi : 全南・全北・忠南・忠北・京畿・黄海・咸南・咸北
- (b) kwe-gi / kwɛ-gi : 濟州・全南・慶南・慶北・忠北・咸北
- (c) ke-gi / kɛ-gi / kwi-gi / ki-gi : 慶南・慶北

#### 4 文献上の記録

陳泰夏(1975)の「鷄林類事之重要板本」を参照すると、『鷄林類事』では「魚肉皆曰姑記」とある<sup>1</sup>。

後期中世語文献の語形は‘고기(LH)’である。なお, ‘고기’に属格助詞‘·이’が付いた‘고기(LH)’の用例も以下に示す<sup>2</sup>。‘고기’は後述の現代語文献の用例‘고기’と関係があるかもしれない。

수을 고기 먹디 마름과 <1447 稷譜詳節 6:10b>

龍은 고기 中에 위두흔 거시니 <1459 月印稷譜 1:14a>

近代語文献の語形は‘고기’である。

물고기(魚), 고기(肉), 사슴의 고기(鹿肉) <1690 訳語類解上:50a>

なお, 17世紀中葉の全南方言を記したとされる単語資料には koikie とある(F. Vos 1975: 33)。また, 『和漢三才図会』には「魚(こき) 古木」とある。『朝鮮物語』には「魚(うを)ヲ こき」とある(京都大学文学部国語学国文学研究室編 1970)。

現代語文献の語形は‘고기’や‘괴기’, ‘고기’である。

고기 먹는 짐승(肉食動物) <1907 京郷宝鑑 2:2>

괴기 어(魚) <1910 歴代千字文 9a>

고기 육(肉) <1917 通学径編(行文速成通学径編) 9a>, 고기 어(魚) <同 13b>

上記以外の ko-gi 系の語および po-si-si-ri 系の語は文献上で確認できなかった。

#### 5 考察

ko-gi(고기)の語源について『우리말語源辞典』(1997)は未詳とする。『比較言語学的語源辞典』(2010)はこの語源をアイヌ語の koiki と推定するが(姜吉云 2010: 116–117), アイヌ語の

<sup>1</sup> ただし, 「香港大学図書館蔵明鈔說郭本」では「魚曰皆曰姑記」である。

<sup>2</sup> なお, 『우리말 큰사전』(1992)では곡(L)を見出し語に挙げて곡+이(属格)のように分析し, 고기의用例を載せている。

koiki は「…を怒りつける, …を叱りつける, …をいじめる, …を襲う, (鳥や魚)を取る」という意味で cep koiki で「魚を取る」という意味なので(田村すず子 1969: 354), アイヌ語の koiki を韓国語の ko-gi の語源とするのは無理がある。また、『東言攷略』では「魚와 肉을 皆稱호대 「고기」를 者는 高嗜 | 니 그 高氏를 啖噉함을 魚와 肉의 嗜함과 如코져 함이오」として「高嗜」(高氏を啖噉することが魚と肉を嗜むことのようなこと)のような由来を考えている。

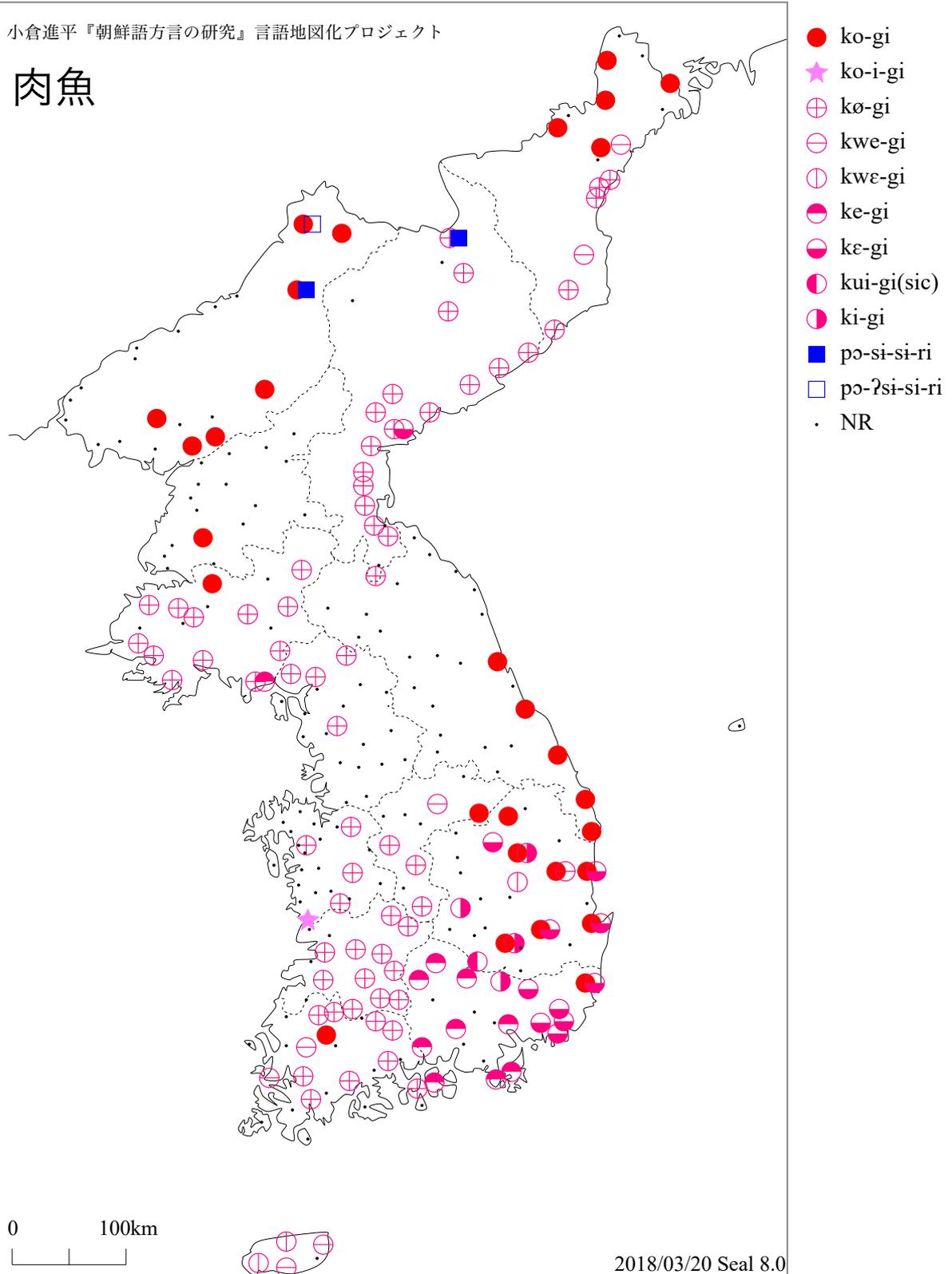
ko-gi 系の語形の変化経路は、文献上で最も古い語形の ko-gi を始点にすると、前舌母音化(ウムラウト)により、‘고기’>‘괴기’のように推定できる。ここで、‘괴기’の第一音節母音‘괴’の発音は、本書の既出項目(第2集の「外」など)からも分かるように、共時的に地域差がある。通時的にも、音環境や地域差などを考慮に入れて発音の変化の方向性を考量する必要がある。こうした点を踏まえ、およそ以下のような変化経路を推定してみた。最初の‘>’は前舌母音化(ウムラウト)によるもの、これ以降の‘>’は狭母音化か w 脱落によるものと見ている。

ko-gi > ko-i-gi  
 kø-gi  
 kwe-gi > kwi-gi > ki-gi  
 ke-gi  
 kwe-gi > kɛ-gi

#### 参考文献

- 姜吉云(2010)『比較言語学的語源辞典』ソウル：韓国文化社.  
 京都大学文学部国語学国文学研究室編(1970)『朝鮮物語』京都：京都大学国文学会.  
 金敏洙(1997)『우리말語源辞典』ソウル：太学社.  
 崔鶴根(1990)『増補 韓国方言辞典』ソウル：明文堂.  
 田村すず子(1969)『アイヌ語沙流方言辞典』東京：草風館.  
 陳泰夏(1975)『鷄林類事研究』再版. ソウル：塔出版社.  
 한글学会(1992)『우리말 큰사전(ウリマル大辞典)』ソウル：語文閣.  
 Vos, Frits (1975) Master Eibokken on Korea and the Korean language: Supplementary remarks to Hamel's narrative. *Transactions of the Korea Branch of the Royal Asiatic Society* L: 7-42.

# 肉魚



## 饅頭

前田夏菜

### 1 はじめに

「饅頭」にあたる韓国語の標準語は만두であるが、小倉進平(1944: 上 165-166)には「飲食」に「饅頭」という項目名で、「朝鮮式饅頭」が5種類と「支那式饅頭」が9種類の合計14種類の語形が記録されている。

ここで、朝鮮式饅頭と支那式饅頭との区別は明確にはなされていないが、一般的には朝鮮式饅頭の方は皮が薄く中の材料として様々な食材が入っており、支那式饅頭は皮が厚く中身は単純なものであるとされている<sup>1</sup>。

### 2 語形の分類

#### I 朝鮮式饅頭

朝鮮式饅頭は5種類の語形が記録されており、音節数に応じて man-du 系と man-du-gi 系の2つに分類できる。

(1) man-du 系 : man-du, man-dui, man-dii, man-dju

(2) man-du-gi 系 : man-du-gi

#### II 支那式饅頭

支那式饅頭は9種類の語形が記録されている。これらは第一音節によって man-系, ʔpaŋ-ʔtək 系, ho-系の3種類に分類できる。

(4) man-系 : man-du, man-dju, man-tʰu, man-tʰui

(5) ʔpaŋ-系 : ʔpaŋ, ʔpaŋ-ʔtək, ʔpan-ʔtək

(6) ho-系 : ho-man-du, ho-ʔtək

### 3 その他の語形

『咸北方言辞典』(1986)によると上に挙げた語形のほかに만디, 만티, 맨세<sup>2</sup>, 맨세의5つの

<sup>1</sup> (編者注) ただし、平安道、咸鏡道では man-tʰu という語形が多く使われており、これは中国語の馒头(mántou)の借用と考えられるので、「支那式饅頭」の指すものも、それと同じもの(肉、野菜等の入っていない蒸しパン)を指す可能性もある。

<sup>2</sup> (編者注) 맨세については、中国の延辺地域では一般的に맨새, 맨세という形でよく用いら

語形が見られたが、いずれも朝鮮式と支那式の区別がなされていないため、地域によってこれらの使い分けが明確に記されているものは小倉進平の記録のみである。

## 4 地理的分布

### I 朝鮮式饅頭

(1)の man-du 系は咸鏡道を除くほぼ全域に見られた。濟州島では man-du 系の 4 つの語形のうち 3 つが記録されており、その中でも主に man-dii が多く記録されている。また、man-dju に関しては全羅南道の一部地域にのみ記録されている。咸鏡南道の海岸沿いの地域に一部のみ man-duit が見られるが、咸鏡道は主に(2)の man-du-gi 系がみられ、他に man-duit という語形が見られるのは濟州島のみであることから誤植の可能性が高いと考えられる。

### II 支那式饅頭

(4)の man-系は半島北部に多く分布しており、このうち黄海道と平安南道の多くの地域と、京畿道の漣川では朝鮮式と支那式の両方が man-du となっている。また、朝鮮式饅頭の語形としては全羅南道の一部でのみ見られた man-dju という語形は、支那式饅頭の場合咸鏡南道から江原道にかけて見られる。(5)の?paŋ-系は主に半島南部に見られるが、一部咸鏡南道の南部にも分布している。(6)の ho-系は黄海道と京畿道にのみ分布する。

## 5 文献上の記録

最も古いと考えられる語形は상화で、これは『翻譯老乞大』(1517), 『翻譯朴通事』(1517), 『訓蒙字会』(1527)に見られる。

혹 효근 상화 먹고 (或是些點心) <1517 翻譯老乞大 下 53b-55b>

닐굽젯 미수엔 스면과 상화 (第七道粉湯饅頭) <1517 翻譯朴通事 上 6b>

また、『訓蒙字会』(1527)には상화と만두の両方が見られた。

饅 상화 만 餛 상화 투 <1527 訓蒙字会 中 10b>

餛 만두 혼 餛 만두 둔 <1527 訓蒙字会 中 10a>

このほか、17世紀の『老乞大諺解』には상화という語形も見られる。

상화소에 쓰니라 (饅頭餡兒裏使了) <1670 老乞大諺解 下 35a>

---

れている。これは、文献上の記録では17世紀の『訳語類解』などに見られる변시「匾食」につながるものと考えられる。

このように古文献において상화, 상화もしくは만두という語形が現れるが, 만두と상화를区別していないように見える。しかし、『飲食知味方(음식디미방)』(1670)には상화법と만두법은別に記載されており, 作り方をそれぞれ確認すると全く異なっている(백두현(2006)による)。材料の面では상화는小麦粉を使用し만두はそば粉を使用する。また, 中身に関して만두は今日の焼き餃子, 상화는蒸餃子と非常に類似している。

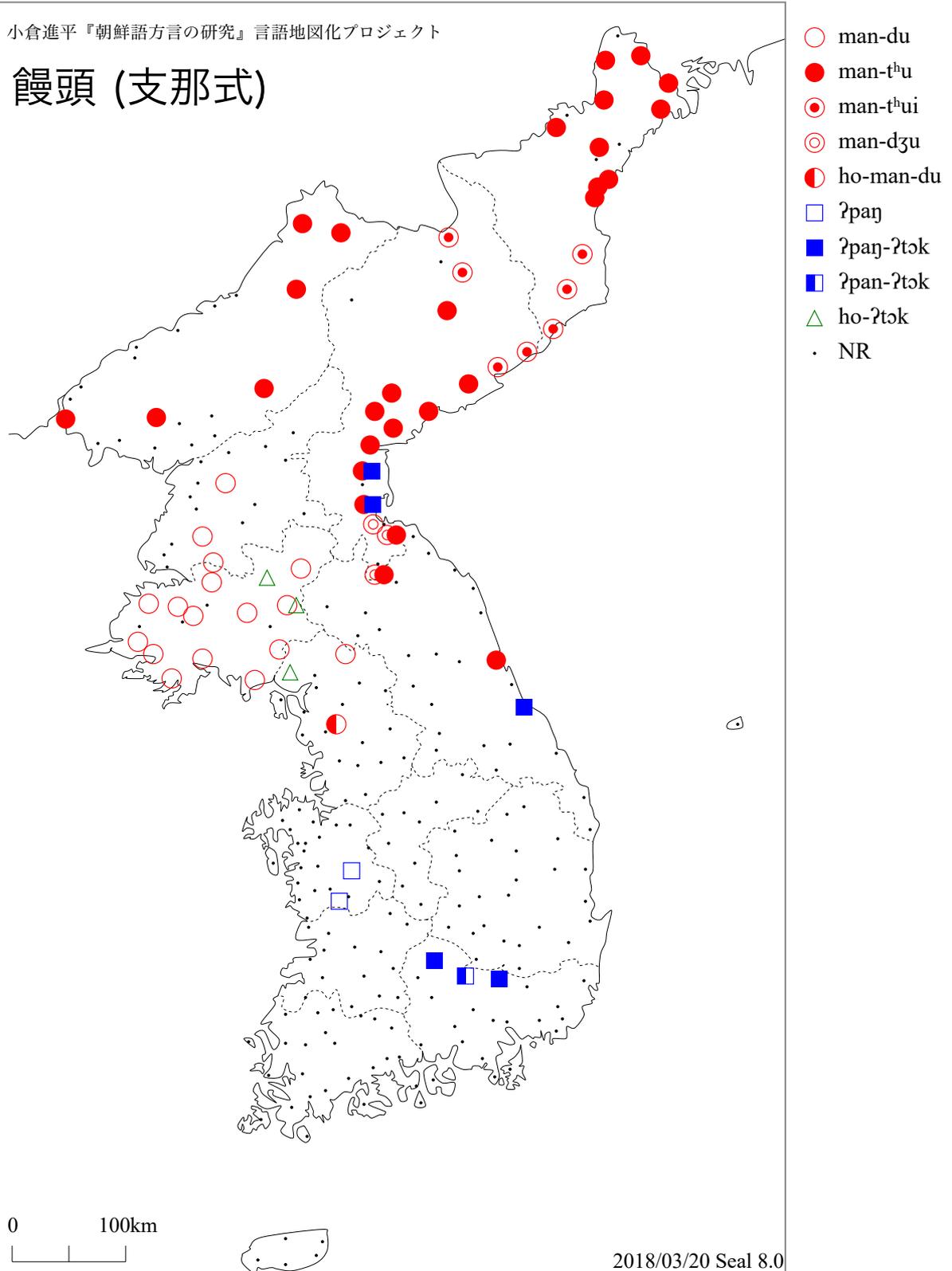
## 6 考察

最も古い語形は상화であるが, そこから成立したと考えられる語形は見受けられず, 朝鮮式饅頭, 支那式饅頭のどちらも最も多く分布が見られたのは만두から派生したと考えられる語形であった。特に man-du と man-dʒu はどちらの語形にも見られたが, 支那式饅頭を指す際に man-du を用いる地域では朝鮮式饅頭も同じく man-du で表すのに対して man-dʒu という語形は朝鮮式饅頭と支那式饅頭とは全く異なる分布が見られた。また小倉進平(1944: 上 165-166)によると支那式饅頭のʔpaŋ-系と ho-系に現れる語形にはそれぞれʔpaŋ は麵包, ʔtɔk は餅, ho は胡と注釈がありこれらも古い語形の影響を受けているとは考え難く, 朝鮮式饅頭にはこれらの語形が現れないことから支那式饅頭を表すために新たに作られた語である可能性がある。

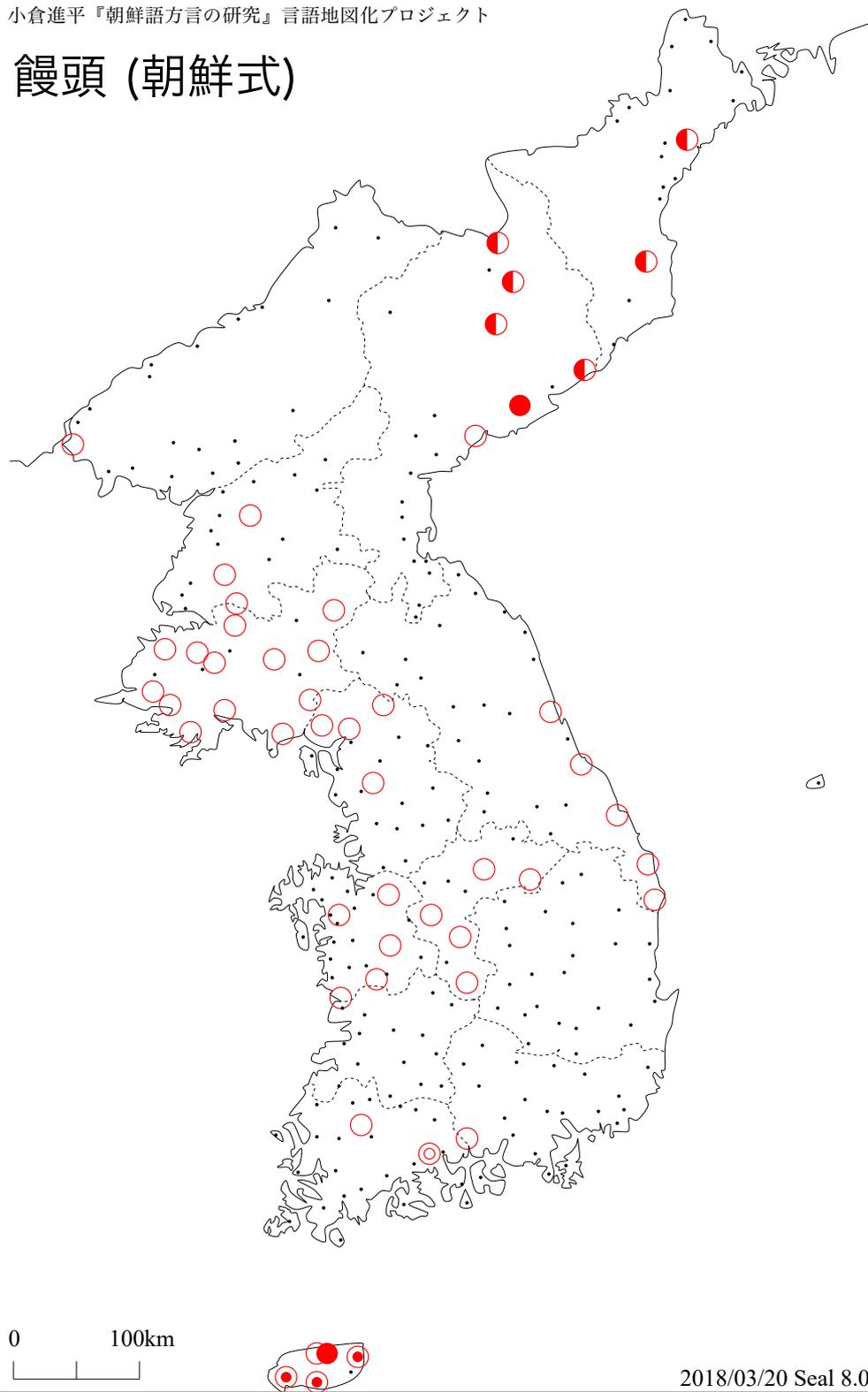
## 参考文献

- 国立国語研究院(1999)『標準国語大辞典』ソウル：斗山東亜.  
金泰均(1986)『咸北方言辞典』ソウル：京畿大学校出版局.  
劉昌惇(1997)『李朝語辞典』ソウル：延世大学校出版部.  
백두현(2006)『음식디미방 주해』ソウル：글누리.

# 饅頭 (支那式)



# 饅頭 (朝鮮式)





## 榛の実

許 秦

### 1 はじめに

韓国の標準語は개암 (kɛ-am) であるが、小倉進平 (1994 上: 185-186) には「花果」類の中で「榛の実」という項目名で 19 の語形が記録されている。『標準国語大辞典』では개암について、「개암나무의 열매. 모양은 도토리과 비슷하며 껍데기는 노르스름하고 속살은 젓빛이며 맛은 밤 맛과 비슷하나 더 고소하다. ≒ 진자(榛子). (榛の実。形はドングリに似て、皮はやや黄色く、果肉は乳白色で、味は栗と似ているがより香ばしい。)」と説明している (日本語訳は筆者。以下同様)

現在、개암よりも、外来語の Hazelnut による音借語헤이즐넛, 헤즐넛がよく使われる。

### 2 語形の分類

これらの語形は大きく 3 つに分けられる。現代標準語に近い kɛ:-am 系、第二音節の子音が g として現れる kɛ:-gam 系、第二音節の子音が d として現れるʔkɛ:-doŋ 系の 3 つである。

#### (1) kɛ:-am 系

(1a) kɛ:-am / kɛ-jam / kɛ-am-al (1b) kɛ:m / kɛ:mi / kɛ:-mal / kɛ:m-da-ri

(1c) ʔkɛ:m / ʔkɛ:-mi / ʔkɛ:-mal (1d) ke-am (1e) ka-jam

#### (2) kɛ:-gam 系

(2a) kɛ:-gam / kɛ:-gim / kɛ-gu-mi (2b) ʔkɛ:-gom / ʔkɛ:-gim (2c) kʰɛ-gim

#### (3) ʔkɛ:-doŋ 系 ʔkɛ:-doŋ

(1) kɛ:-am 形の中で、(1a)は第二音節に子音が存在せず、母音 a が保たれているもの、(1b)は第二音節の母音 a が脱落したもの、(1c)は(1b)と同じく第二音節の母音 a が脱落するが、第一音節の子音が濃音で現れるもの、(1d)は第一音節の母音が e であるもの、そして(1e)は第一音節の母音が a で、第二音節に半母音が現れるものである。(2) kɛ:-gam 系の(2a)は第一音節の子音が平音で現れるもの、(2b)は第一音節の子音が濃音で現れるもの、(2c)は第一音節の子音が激音で現れるものである。第二音節の子音が d で現れる(3) ʔkɛ:-doŋ 系はʔkɛ:-doŋ ひとつの語形しかない。

### 3 その他の語形

『韓国方言資料集』(1987-1995) には小倉進平 (1944) で掲載されていない 20 の語形があ

る。そのうち6つの語形はいずれも第一音節の母音が単母音で記録されているが、語形は小倉進平(1944)のものと一致するため、ここで新たな語形として扱うことはしない<sup>1</sup>。それ以外14の語形を一定の基準によって分類すると大きく3つに分けられる。

1 ke-am 系<sup>2</sup>

ke-jaŋ (忠清南道), ka-jɔm (京畿道), ko:m (慶尚北道), ?ke-am (京畿道), ?ke-jaŋ (慶尚北道)

2 ke-gim 系

mul-ke-gim (全羅南道), ke-gum (江原道), ke-gɔm (江原道, 慶尚北道),

?ke-gum (江原道, 慶尚北道, 慶尚南道), ?ke-gɔm (慶尚北道)

3 ?ke-muk 系

?ke-muk (慶尚南道), ?ke-mok (慶尚南道), ?kem-muk (慶尚北道)

これらの語形は小倉進平(1994)で挙げている語形とそれ程の大差はない。全羅南道の莞島で mul-ke-gim という語形がみられるが、これは榛の実を表す語形の前に形態素 mul が付いた形であると思われる<sup>3</sup>。更に、慶尚道では?ke-muk 系に分類される幾つかの特殊な語形がみられ、これらと似たような語形は小倉進平(1994)で確認できない<sup>4</sup>。

次いで、『咸北方言辞典』(1986: 47)では咸鏡北道の方言形として、小倉進平(1994)でみられない ke-ma-ri, ?kem の語形が確認される。ただ、ke-ma-ri は?ke:-mal という語形に似ており<sup>5</sup>、?kem は?ke:m という語形の長母音が失われた形であると考えられ、両方とも特別な語形であるとは言えない。

尚、『平北方言辞典』(1981: 21)では kem-da-ri がみられる。小倉進平(1994)の資料では平安道の語形が全く挙げられていないが、黄海道の方方言形として ke:m-da-ri が記されている。この二つの語形は第一音節の母音が長音か否かだけで対立を成すため、大差がある訳ではない。従って、この2つの語形が黄海道と平安道に跨って、広く分布している可能性が高い。また、榛を表す語形として kem-dal-na-mu が確認されることから、\*kem-dal という語形の存在も充分あり得る。

最後に、『韓国言語地図』(2008: 266-267)で kwem, ?ke-gim, ke-dok などの語形が挙げられているが、分布は狭く、朝鮮半島の東側に限ってみられる。

<sup>1</sup> ke-am (京畿, 慶北, 忠南), kem (江原), ke-gim (全北, 全南, 江原, 忠北, 忠南), ke-gam (京畿, 忠北, 忠南), ?ke-gim (全北, 全南, 江原, 慶北, 慶南, 忠北, 忠南), ?ke-gom (全北, 慶北, 慶南)の6つ。

<sup>2</sup> これらの語形のローマ字表記は、『韓国方言資料集』(語彙: 植物 508)で挙げられている韓国語表記を、本資料集の表記の原則に従って書き換えたものである。以下で『韓国方言資料集』以外の文献上の語形をローマ字で表記する際も、同じく元の文献上の韓国語表記を本資料集の表記方法に基づいて書き換えた。

<sup>3</sup> 「水」を指すか、「嘔む、銜える」を意味する動詞語幹「물-」を指すかは考証が必要。

<sup>4</sup> これらの語形は音韻変化のある段階で子音の倒置が起こったと考えられる。

<sup>5</sup> 仮に、?ke:-mal の第一音節が平音で現れる語形の\*ke:-malが存在するとすれば、ke-ma-ri は\*ke:-mal の後ろに接尾辞の i が加えられた語形としてみることができる。

#### 4 語形の地理的分布

全体的にみると、京畿道を中心とする朝鮮半島の中央部は(1) ke:-am 系が主に分布しており、北部と南部は第二音節の子音がㅍである(2) ke:-gam 系が分布し、いわゆる周圈的分布の様相をみせる。ところが、咸鏡北道で(1) ke:-am 系がかなり現れており、完全な周圈的分布を成すとは言いにくい。以下ではその具体的な分布の様相をまとめて示す。

先ず、(1) ke:-am 系は黄海道、京畿道、咸鏡道に広く分布しているが、黄海道と京畿道は第一音節の子音がいずれも平音の語形が分布しているのに対し、咸鏡道は主に第一音節が濃音の語形が分布している。咸鏡道の中で咸鏡南道は第一音節の子音が平音である語形と濃音である語形が混在しているが、咸鏡北道では第一音節の子音が濃音である語形しかみられない。(1c) <sup>h</sup>ke:m は咸鏡道に分布しているものの、唯一、慶尚北道の盈徳でもみられる。また、(1d) ke-am と(1e) ka-jam は、それぞれ慶尚南道の河東と京城の一か所でしか現れない。

次に、(2) ke:-gam 系は朝鮮半島の南部を中心に分布しているが、(2a)の一部が咸鏡南道と江原道の北部でみられる。また、(2a) ke:-gim は忠清南道と全羅道の西海岸沿いに分布し、語頭子音が濃音で現れる(2b)は中部と東部に広く分布している。更に、(2a) ke:-gam は忠清南道の天安でしか見られず、語頭子音が激音で現れる稀な語形(2c) k<sup>h</sup>e-gim は全羅北道の南原の一か所でしか確認できない。

最後に、(3) <sup>h</sup>ke-don 系は慶尚南道の陝川及び慶尚北道の高霊の二か所で現れる。

#### 5 過去の文献上の記録

文献上の記録をみると、現代標準語の「개암」を含む개음, 개암, 개염, 개음, 개음, 기암, 가암などの語形がみられるが、第二音節にㅍが現れる語形は確認できない。最も早い時期に現れるのは15世紀の文献上でみられる개음と개음である。

그를 이푸되 披榛<sup>하</sup>야 到孝子廬호니 개음나모 헤오 <1481 三綱行実図孝子图 32>  
개음을 시버 머그라 마닐 마<sup>하</sup>를 갖가 고해 <1489 救急簡易方 2: 83b>  
榛 개음 진 <1576 新增類合上 10a>

17世紀に入ると가암と개염が現れるようになる。가암は20世紀初頭まで用いられる。

榛子 가암 <1613 東医宝鑑二 25b>  
아비와 그를 읍프되 개염남글 헤혀고 <1617 東国新統三孝行実图 1b>  
榛 가암 진 <1913 賦別千字文 23b>

17世紀後半になると、現代語と同じ語形の개암がみられる。それと同時に개암も現れ始めるが、개암は17~20世紀にわたって広く用いられる。

내 너와 개암 더늑기 흐자 저근 덧에 두되 나쁜 개암을 이기어다 <1677 朴通事諺解下 28a>

둘재 줄 열여섯 덩시에는 개암과 잣과 마른 葡萄와 <1677 朴通事諺解上 4b>

18 世紀後半になると「・」を持つ개음や기암が現れ, 기암は 19 世紀末まで用いられる。

개음 진 榛 <1781 倭語類解下 07a>

기암 (榛子) <1799 濟衆新編 8: 23a>

기암 棒子 <1895 国韓会語 13>

## 6 考察

小倉進平 (1944 下: 100) では, 方言形の一方に於いて k/g が現れ, 他方に於いて k/g が現れない語形の若干例を示しており, その中で榛の実も含まれている。小倉進平によると, この様なパターンを示す項目の中で, 幾つかの項目を除き, 京畿道と忠清北道で, k/g を欠いた語形が現れることから, 半島中央部に於いて, k/g がかなり古い時代から失われていると推測できるという。もし, これが正しければ, 개암の最も古い語形は, 第二音節にㅏが含まれていた筈である。また, 『韓国言語地図』(2008: 267) でも同じく, 개암の古い語形にはㅏが含まれていたと推測し, 가암と개금の語形が広く使われていることから가금(\*ka-gΛm) という語形を再構している。これに従い, (1) ke:-am 形と(2) ke:-gam 系の変化を大まかに示すと以下の通りになる。

### (1) ke:-am 形

\*ka-gΛm > \*ka-Λm > \*ka-jΛm > ka-jam > kai-jam > ke:-jam > ke:-am > ke-am  
>kai-Λm > ke:m > ke:mi

### (2) ke:-gam 形

\*ka-gΛm > \*kai-gΛm > \*ke:-gΛm > ke:-gim

ところが, この説には幾つかの問題がある。先ず, 『韓国言語地図』(2008) は古形として \*ka-gΛm という語形を挙げているが, これの第一音節の母音は a であり, 半母音を含んでいない。つまり, 音韻変化の段階で半母音を加えられたことになる。しかし, 中世朝鮮語で語中の軟口蓋破裂音が脱落する条件が幾つかあり, その条件の中の一つが軟口蓋破裂音の前に半母音 j がくる場合である。言い換えれば, 音韻変化の段階で半母音 j が加えられたのではなく, 元々第一音節の母音が二重母音 ai であり, その音韻的な環境で第二音節の g が脱落したと考えた方がより適切であると思われる。

もう一つの問題は, \*ka-gΛm の第二音節の母音が「・」(Λ)で正しいかどうかである。確かに方言形をみれば, 第二音節の母音が a と i で現れる語形が多いことから, それらが元々Λ

であった可能性が考えられる。ところが、文献上の記録を検討すると、語形の中で  $\Lambda$  が現れる時期がかなり遅いことがわかる。 $\Lambda$  を含んだ語形が現れる時期は 18 世紀の後半であり、他の  $\Lambda$  を含まない幾つかの語形はその前から文献上で確認できる。もし、第二音節が  $\Lambda$  であったとしたら、古い段階から  $\Lambda$  を含む語形がみられる筈だが、実際そのような痕跡が見当たらない。早い段階の文献で確認できる語形が개옴と개옴であることから、古形の第二音節の母音が  $o$  であった可能性が高い。

以上のことから、榛の実の古形は「개곰」(\*kai-gom)と再構できる<sup>6</sup>。この語形には形態素として「개」(犬)が含まれているように見えるが、犬の개は元々가히であり、16 世紀に子音  $\text{ㅎ}$  の弱化に伴って生まれた語形として、常に上声で現れる。ところが、幾つかの榛の実を示す語形の개の部分の平声になっていることからすると、語形中の「개」は犬の개であると言い難い。また、現代語で接頭辞「개」が「野生の状態の」などの意味があることから<sup>7</sup>、語形中の개もそれと同じ意味を表すと想定することもできるが、正確な語源は不明である。

「개암」の古形に関する考察以外にも、小倉進平 (1944) で挙げられている語形の中で、一部の特殊な語形が如何に形成されたのかについて検討する必要がある。(1a)の ke-am-al, (1b)の ke:-mal と(1c)の<sup>?</sup>ke:-mal などの語形は, al(玉)という形態素が結びついた語形であると思われる。また, (1b) ke:m-da-ri などの da-ri は恐らく動詞語幹「달리-」と何らかの関係があると思われる。つまり、榛の実が木で実り、吊り下がっている様を基にこの様な語形が生まれたと推測できる。最後に, (3) <sup>?</sup>ke-dog 系の語形の第二音節で、子音が何故 d で現れるのかは未だ適切に説明できない。実の形が丸いことから「둥그라미」との関係が浮上する。しかし、以上はあくまでも仮説であり、今後の課題として残される。

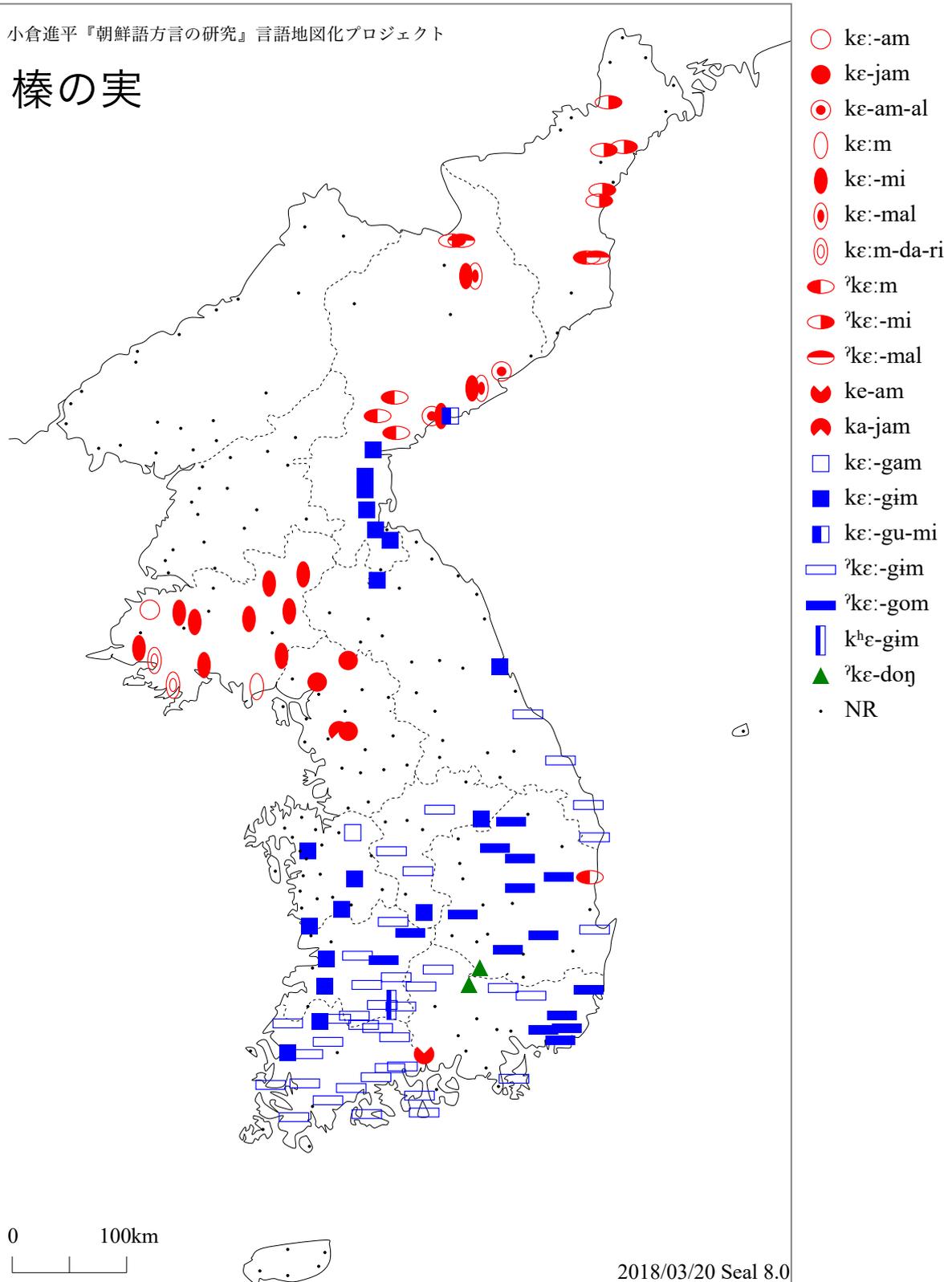
## 参考文献

- 金敏洙 (1997) 『우리말語源辞典』ソウル：太学社。  
金泰均編著 (1986) 『咸北方言辞典』ソウル：京畿大学出版局。  
金履浹編著 (1981) 『平北方言辞典』城南：韓国精神文化研究院。  
韓国精神文化研究院語文研究室編 (1987-1995) 『韓国方言資料集』全 9 卷, 城南:韓国精神文化研究院。  
『標準国語大辞典』 <https://ko.dict.naver.com/#/entry/koko/aba55d102c8e433daa7168d46b784eb>  
2 最終アクセス日: 2019.12.10.

<sup>6</sup> 上述したことは別に、全く異なる語源説がある。『우리말語源辞典』(1997)によれば「개암」の古形は「개탐」に遡れるというが、信憑性が低い。

<sup>7</sup> 接辞「개」: 1. (일부 명사 앞에 붙어) ‘야생 상태의’ 또는 ‘질이 떨어지는’, ‘흡사하지만 다른’의 뜻을 더하는 접두사. [(一部の名詞の前について)「野生の状態」, 若しくは, 「質が劣る」, 「似ているが異なる」の意味を加える接頭辞。] (『標準国語大辞典』による。)

# 榛の実



## 山葡萄

梁紅梅

### 1 はじめに

日本語の「山葡萄」にあたる韓国語の標準語は머루である。小倉進平(1944 上:188-189)では「花果」の中の「山葡萄」という項目で都合 14 個の語形が記録されている。

標準国語大辞典による定義には“「식물」 포도과의 왕머루, 까마귀머루, 새머루, 개머루, 털개머루 따위를 통털어 이르는 말”(意訳：いろいろな種類の葡萄科の植物をまとめていう言葉)とある。また小倉進平のこの語彙項目には『訳語』山葡萄, 『訳補』臭李子という解釈も記されている。中国語では山葡萄と臭李子は違う種類の植物で山葡萄は葡萄科の植物, 臭李子はバラ科の植物にあたる。臭李子は現在の韓国語で귀룽나무というが, 갈매나무, 참갈매나무, 서리자ともいう。

### 2 語形の分類

大きく -lg- の有無によって mo-ru 系と mol-gu 系の二つに分けられるが, その他に特定の地域でのみ使われる ta-re と san po-du という語形も存在する。(1)の mo-ru 系は第二音節の母音の違いと第一音節の母音の違い, また -ll- の挿入によって 3 種類に分かれる。(2)の mol-gu 系は第二音節の母音の違いのほか, 第一音節での半母音の挿入と母音が -e-, また第二音節の子韻が -lg- として現れることによって 4 種類に分けられる。その他, ta-re は恐らく現代の다래にあたるが,サルナシの実で머루とは違う種類である。san po-du は恐らく山葡萄の漢字語の訳だが, ta-re とともに慶尚南道で一か所ずつ現れる。

#### (1) mo-ru 系<sup>1</sup>

(1a) mo-rui, mo-ru, mo-re, mo-re, mo-ri

(1b) mo-re

(1c) mol-l

#### (2) mol-gu 系

(2a) mol-gu, mol-gui, mol-gi

(2b) mjol-gu

(2d) mel-gu

#### (3) その他

(3a) ta-re

<sup>1</sup> 第二音節が二重母音の -ui- になっているのは, 実際は -wi- の発音だった可能性が高い。

(3b) san po-du

### 3 その他の語形

河野六郎の『朝鮮方言学試考』(河野六郎(1979)所収)では小倉進平のデータにない語形として mǎrwi, mǎllwi, milgu, mǎlgwi などが記録されている。また『韓国言語地図』にはその他に mǎ-reʔtal, mǎ-rim, mǎ-u, mo-ru, mǎl-lu, mǎl-gu, ʔteŋ-ʔkwǎl, mǎkʔte-wǎl, pǎdi (pode) などのバリエーションが豊富に現れる。mǎ-reʔtal, ʔteŋ-ʔkwǎl, mǎkʔte-wǎl など濃音で現れたものは ʔkwa-li (ホオズキ), ʔtal-gi (イチゴ) の表現を借りた語形で, pǎdi 系は葡萄の漢字音と関係があるらしいが『翻訳老乞大』には乾葡萄に마른보도と記録されている。また『韓国方言資料集』の江原道編に mǎ-gu, 慶尚北道編に ʔtuk mǎl-gu, se mǎl-gu, 全羅南道編に mel-gu などが記録されている。全体的にみると (1) の場合第一音節の母音が -ǎ-, -o- の他, 第二音節では -i-, -e-, -ε-, -u-, -ui(-wi-) などが現れ, (2) の場合は第一音節の母音が -lg- の前で -i-, -ǎ-, -jǎ-, -e-, -o-, -ε- など現れるが, 全羅道に特にバリエーションが多い。

### 4 地理的分布

まず, (1)の mǎ-ru 系は黄海道, 京畿道, 忠清道, 全羅道, 慶尚南道を中心に分布し, 慶尚北道の一部地域にも及んでいる。京畿道, 忠清道は mǎ-ru だけあるが, 全羅南道と慶尚南道では特にバリエーションが多い。mo-re は慶尚南道だけにある。(2)の mǎl-gu 系は忠清道の他のほとんど全域で分布しているが, 京畿道では一か所でしか現れてない。mjǎl-gu と mel-gu は全羅道に分布し, mǎl-li は済州道にのみみられる。(1)と(2)は分布として大体河野六郎と『韓国言語地図』と同じ傾向である。ta-re と san po-du はそれぞれ慶尚南道の一地点(晉州と南海)にしか現れない。

### 5 文献上の記録

過去の文献上の記録を見ると, 16 世紀は葡萄を指す言葉として現れ, その他に山葡萄, 臭李子, 稠梨子, 蓼蓂などの語形として記録されている。中世語から近代語にかけて mǎl-wi, mǎl-ε, mjǎl-ε, mǎl-ø, mǎi-zǎ, mǎ-ru と mǎ-ri 系がみられるが, 用例数はそれほど多くない。mǎi-zǎ と他の語形の関連性に関してはさらに検討する必要がある。

葡멸위 포 萄멸위 도 在家者曰葡萄, 在山者曰山葡萄 <1527 訓蒙字会上 12>

藟 류 멸애 穉 멸의 <1613 詩經諺解 1:目録 1b, 4:目録 2a>

蓼 산디즈 멸위 <1613 詩經諺解 7:目録 3a>

山葡萄 멸위 <1690 訳語類解上 55>

臭李子 멸위 <1775 訳語類解補 31a>

山葡萄 머루 <18-- 物名考 卷3(無情類・草, 純祖朝刊)>

머르 (稠梨子) <18-- 物譜 草果>

머루 蓏菓 <1799 濟衆新編 8:22b>

蓏菓は葡萄科で山葡萄の別名だが、稠梨子は稠李子とは同じものである可能性が高く、臭李子の別名でもある。中国では葡萄は中西アジアからの輸入種でその名前も外来語(大宛語から来た説がある)だが、山葡萄にあたる蓏菓の方が固有種だそうだ。

## 6 考察

① 地理的分布からみると mɔ-ru 系は京畿道を中心とする中央部分に分布し, mɔl-gu 系は南北に分かれながら多くの地域に分布している。従って, mɔl-gu 系が古形で, mɔ-ru 系が新しい語形だと言える。また語形の特徴からみると恐らく모래と同じ変化を辿ったことがわかる。河野六郎では『訓蒙字會』での말위は [mɔl-<sup>h</sup>ui]<sup>2</sup> で, [mɔl-gui] からの変化を辿ったと述べているが, その変化をまとめてみると次の通りになる。

mɔl-gui → mɔl-gi  
→ mɔl-<sup>h</sup>ui → mɔ-rui → mɔ-ru/ mɔ-ri/mɔ-re/mɔ-re  
→ mɔl-lui → mɔlli

② 全羅南道で mjɔl-系, mel- (全体的には mil-, mel-) 系がみられるが, 地域の特徴である。河野六郎によるとこれは -ɔ- 母音の古い姿を知る上で重要な材料になるそうだ。例えば, 全羅道では거울(鏡) kɔ-ul が ke-/kjo- になる(河野六郎 1979)。

③ ta-re 系は標準国語大辞典では「식물」다랫과의 낙엽, 활엽 덩굴나무と書いてあり, 歌などでは머루とよく一緒に出てくる。강원도 아리랑では머루나 다래 인간에 귀물と書いてあり, 『青山別曲』では「말위랑 ㄷ래랑 먹고 青山에 살어리 랫다」(『高麗歌謠』(1968)) などがある。

④ san po-du 系は 19 世紀後半になってから san p<sup>h</sup>o-do が『国漢會語』や『漢英辞典 (Korean-English Dictionary)』に現れる。

## 参考文献

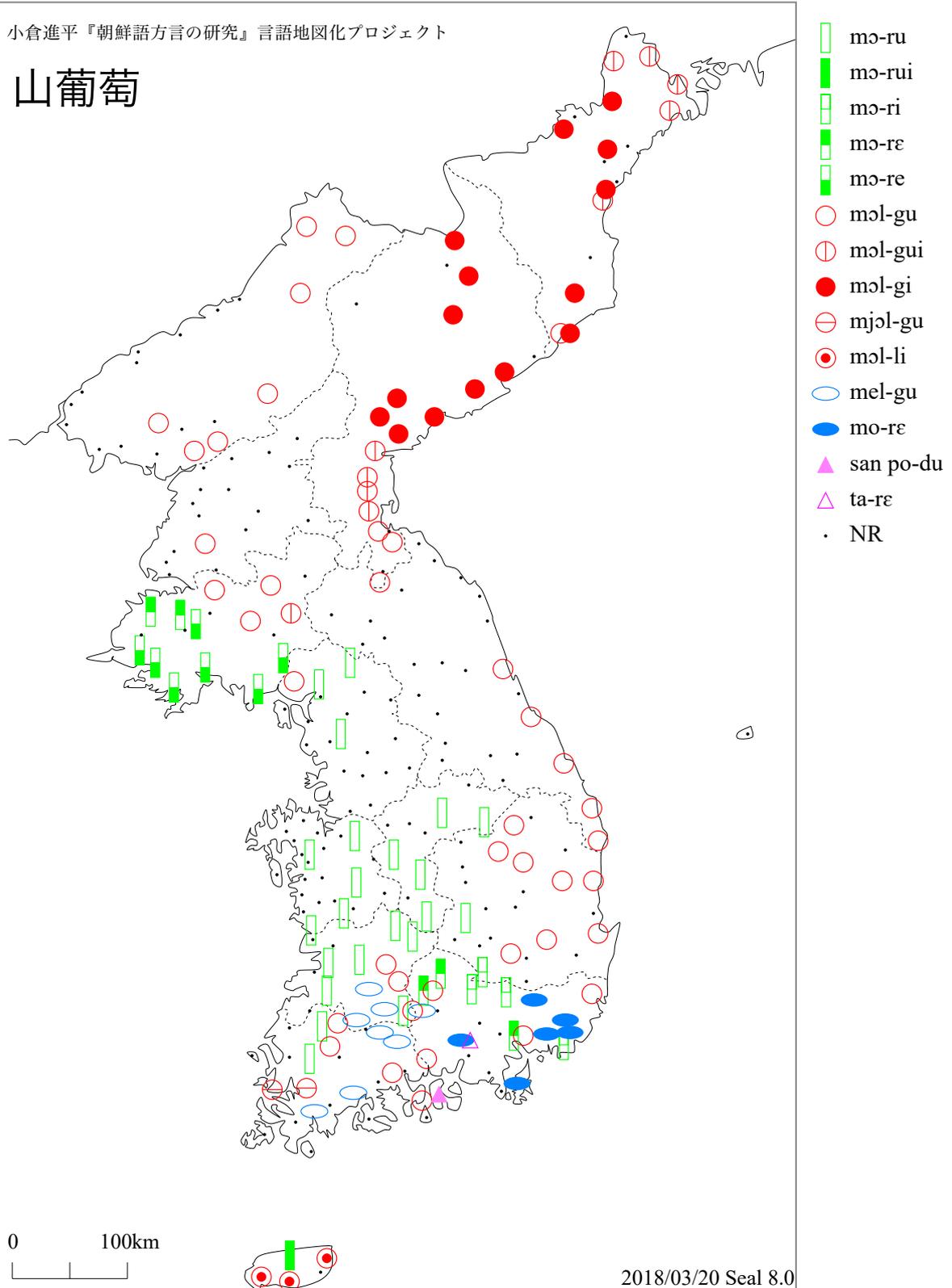
河野六郎(1979)『河野六郎著作集 1』東京：平凡社。

韓国精神文化研究院語文研究室編(1987-1995)『韓国方言資料集』全 9 卷. 城南：韓国精神文化研究院。

李秀雄・世宗大王紀念事業会(2014)『詩經諺解』ソウル：世宗大王紀念事業会。

<sup>2</sup> [mɔl-<sup>h</sup>ui] の <sup>h</sup> は有聲的 <sup>h</sup> であるが, ここでは河野六郎の表記に従って <sup>h</sup> で記す。

# 山葡萄



## 桃

梁紅梅

### 1 はじめに

韓国語の標準語は pok-suŋ-a (복숭아) であるが、これにあたる語は『朝鮮語方言の研究』の「花果」に「桃」という項目名で19種類記録されている(上: 190-191)。

これらは大きく -ŋ を含まない種類と -ŋ を含む種類に分けることができる。

#### (1) -ŋ を含まない

(1a) pok-sa

(1b) pok-so-a, pok-so-a

(1c) pok-su-a, pok-su-ε, pok-su-we

(1d) pok-se

#### (2) -ŋ を含む

(2a) pok-saŋ

(2b) pok-səŋ

(2c) pok-soŋ, pok-soŋ-ge

(2d) pok-suŋ-a, pok-suŋ-ε, pok-suŋ-ge

(2e) pok-siŋ

(2f) pok-seŋ, pok-seŋ-i

これらの語形をみると2音節或いは3音節で成り立っているが、第一音節はすべて pok- であり、また第二音節は必ず s で始まっている。違いは第二音節の母音と音節末にくる ŋ の有無、第三音節の音の違いである。(2) の第二音節に来る母音は a, ə, o, u, i, ε であるが、そのすべての母音の後ろにまた -ŋ が接続する語形が現れる。

### 2 その他の語形

大きな語形の違いは見られないが、江原道に복숭아, 咸鏡北道に복숭아, 복썰という語形がみられる。

### 3 地理的分布

まず、標準語形の pok-suŋ-a は忠清南道, 京畿道, 黄海道, 咸鏡南道など、主に朝鮮半島中央部で多く分布している。これに対して、pok-suŋ から -ŋ が脱落した pok-su- を含む語形

はもっぱら咸鏡道の北部地域で現われている。また平安北道では pok-swε, 咸鏡南道の北方では pok-sa が使われている。pok-so-a が咸鏡南道, pok-soa が平安南道に一地点ずつ, pok-se が咸鏡北道に一地点現れる。大体北の方では η が脱落した語形が存在してあることがわかる。一方で, 江原道の南部地域, 忠清道, 慶尚道, 全羅道の多くの地域では第二音節の母音に差があるものの, もっぱら η を含む語形がみられる。具体的にみると pok-saη は全羅北道, 慶尚北道, 忠清南北道, 江原道の南地方に分布している。この語形はまた咸鏡南道にも現れる。pok-seη は咸鏡南道に一地点, pok-seη-i は黄海道に一地点, pok-siη は慶尚道にみられる。pok-soη は忠清北道, 全羅南北道, 慶尚南道に現れる。pok-saη は全羅道の多くの地域, 慶尚道の一部に分布している。pok-suη は主に慶尚道に現れる。済州道には pok-soη-ge と pok-suη-ge が現れる。pok-su-a が咸鏡南道, pok-sa が江原道の η を含む地域に一地点ずつ現れることは大きな傾向ではない。ともかく, 全体的には第二音節の η の有無によって南北に分かれる。

#### 4 文献上の記録

桃を表す最古の語形は『鷄林類事』の「枝棘」であるが, これは姜信沆(1980)では tʃi-kiək に再構している。中古音を再構してみると tɕie-kiək であるが(王力), 『西京雜記』: 秦桃, 金城桃…綺 (/kʰie/) 葉桃。「内則」: 桃曰胆之。『尔雅 释草』: 苳楚, 鉞芑 (/ʎiək/)。又桃枝。などいろいろな呼び名があったことと桃は元々中国で一番早くから栽培されていて, それが全世界に広まったことを考案すると, tʃi-kiək も桃の一つの種類の名前だった可能性が高い。

pok-suη-a と関係がある語形として現れたのは『救急方諺解』が一番早い。中期朝鮮語文献で現れる語形をみると第 2 音節がすべて /i/ を含む。15 世紀には 복상화, 복성화, 복성などの語形が現れる。복상 / 성 系の語源は未詳であるが, 복상스럽다 / 복성스럽다 などの語彙も存在することから‘福相’或いは‘福性’に関連する語彙だと推測することが可能である。標準国語大辞典では‘福星’になっている。복상화 は一回しか現れておらず 복성화 が優勢である。

복상화 나모와 <1466 救急方諺解上 21>

복성화 <1466 救急方諺解下 44>

복성화 <1608 諺解胎産集要 9>

복성 고즌 <1481 杜詩諺解 10:8a>

복쇼아 <1690 訳語類解上 36a>

복쇼와 <1690 訳語類解上 55b>

#### 5 考察

pok-suη-a の語形として一番古い語形である‘복상’, ‘복성’が同時に現れている。母音調和からみると‘복상’が正しいが, ‘복성’が多く使われたのは恐らく第二音節が違う漢字借

用語からきた可能性を考えられる。それらが‘福相’ 或いは‘福性’ からきたとすれば、‘相’ の中古音が /s̄iəŋ/ で、‘性’ の中古音が /siɛŋ/ だが、『石千字文』(1583) では‘性’ は 성 になっている。『朝鮮語漢字音研究』(2007) では /s̄iəŋ/ と解釈している。つまり、最初の語形は福相花(/pok-s̄iəŋ-hwa/), 福性花(pok-siɛŋ-hwa)で、母音調和に合わせて pok-sioŋ の語形が出てきて、また第三音節の/h/子音の弱化により pok-siəŋ-wa / pok-sioŋ-wa になり、同時に -w- の脱落により pok-sioŋ-a の語形も現れたと考えられる。17 世紀後半になってからは第二音節の母音が -jə から -jo に変わる。おそらく円唇化の影響だと思われる。

pok-suŋ-a の変化を辿ってみると次のとおりになる。

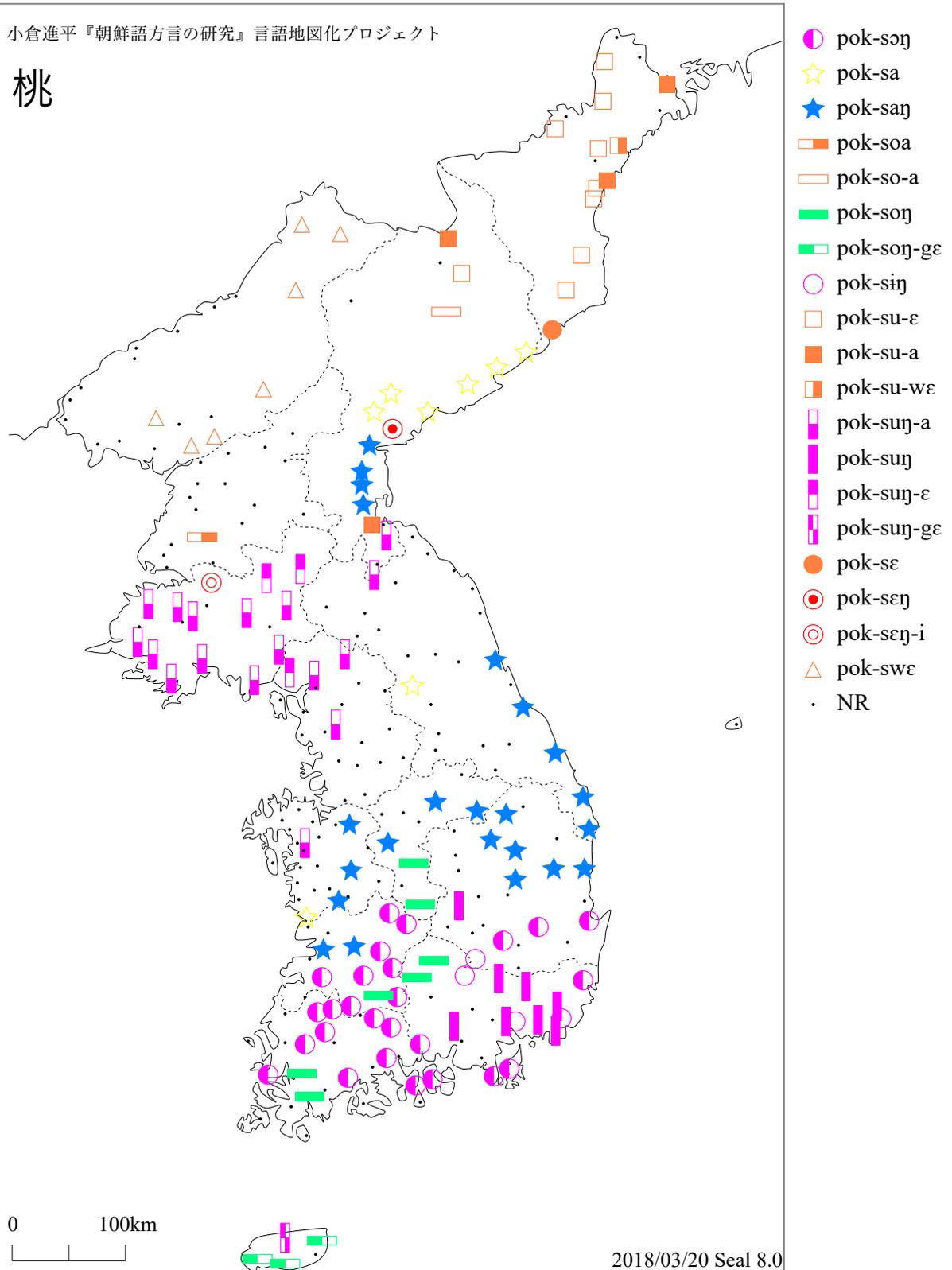
pok-siəŋ-hwa / pok-siɛŋ-hwa > pok-siəŋ-hwa > pok-siəŋ-wa  
 > pok-siəŋ-wa >  
 > pok-sioŋ-a >  
 > pok-sioŋ-wa >  
 > pok-sio-a  
 > pok-sio-wa

つまり、咸鏡道を含む北の地方では -ŋ- を含まない語形のルートを持ち、慶尚道、全羅道などの南の地域では -ŋ- を持っているルートからなり、19 世紀になってから第二音節での半母音の脱落、母音調和の崩れ、円唇化、ウムラウトと第三音節での接尾辞 -ɛ, -gɛ の追加などの変化を辿って今の多種類の語形になったといえる。今の標準語形の pok-suŋ-a は pok-siŋ が存在することからある時期 -i への変化があつてそこから円唇化して u になったと考えられる。

#### 参考文献

- 韓国精神文化研究院語文研究室編(1987-1995)『韓国方言資料集』全 9 巻. 城南：韓国精神文化研究院.  
 金泰均編著(1986)『咸北方言辞典』ソウル：京畿大学校出版局.  
 金履浹編著(1981)『平北方言辞典』城南：韓国精神文化研究院.  
 玄平孝(1962, 修正版 1985)『済州島方言研究』(資料篇・論考篇) ソウル：二友出版社.  
 姜信沆(1980)『鷄林類事「高麗方言」研究』ソウル：成均館大学校出版部.  
 伊藤智ゆき(2007)『朝鮮漢字音研究』東京：汲古書院.

# 桃



## 独楽

李美姫

### 1 はじめに

日本語の「独楽(こま)」にあたる韓国語の標準語は뽕이である。뽕이는国立国語院の『標準国語大辞典』によると、「둥글고 짝은 나무의 한쪽 끝을 뽕족하게 깎아서 쇠구슬 따위의 심을 박아 만든 아이들의 장난감」とされている。

小倉進平(1944: 上242-243)では「器具」の中の「独楽」という項目で都合42個の語形が記録されている。



出典：『標準国語大辞典』

### 2 語形の分類

独楽は語頭音節により、大きく(1)p'εŋ-i系, (2)po-ε系, (3)to-rε-gi, (4)kol系, (5)so-ri系に分けられる。現在の標準語の뽕いと関連がある(1)の p'εŋ-i系は母音の種類や語頭子音の種類により、バリエーションが豊富である。p'εŋ-i系には -gu-ra-mi や-dεŋ-i, -dúi, -do-ri などの様々な接尾辞が付いたものがある。-gu-ra-mi は「丸い」という意味の doŋ-gi-ra-mi と、-do-ri の場合も「回る」という意味の dol-と関連があると思われ、独楽の動きと関連する接尾辞が多いのである。(3)の to-rε-gi も「回る」という意味の dol-に名詞を作る接尾辞-gi が合成したようにも思われるが、詳細は不明である。(4)kol系の kol-beŋ-i は現在、巻貝を意味する単語と発音が一致するし、やはりその形が渦巻いていることが独楽の動きと関連している。

#### (1) p'εŋ-i 系

(1a) p'εŋ-i, p'ε-i, p'εŋ-gu-ra-mi, p'εŋ-dεŋ-i, p'εŋ-dúi, pεŋ-ε, pεŋ-je, ?pεŋ-je, ?pεŋ-i

(1b) p'iq-dúi, p'iq-dúiq-i, p'iq-biq-i

(1c) pa-i, paŋ-ε, paŋ-je, paŋ-i

(1d) pε-ri, ?pε-ri, pε-al, pε-a-ri, ?pεŋ-o-ri

(1e) ?pεŋ-goŋ-i, pεŋ-do-ri, ?pεŋ-do-ri

(1f) ?pεŋ-seŋ-i, ?pεŋ-so-i, ?pεŋ-soŋ-i,

#### (2) po-ε 系

(2a) po-ε, poŋ-ε, poŋ-en, piŋ- dúiŋ-i

#### (3) to-rε-gi

#### (4) kol 系

- (4a) kol, kol-beŋ, kol-beŋ-i  
 (4b) kol-p'εŋ, kol-p'εŋ-i  
 (4c) koŋ-ge  
 (5) so-ri 系  
 so-ri, se-ru, se-ri

### 3 その他の語形

『韓国言語地図』には、小倉進平のデータにはない語形として、뽕, 뽕도리や語中に m が入る 뽕미, 小倉進平の資料ではそれほど多く現れなかった第一音節の母音が i である 핑딩이, 핑뎡이, 핑뎡이, 핑빙이, 핑뎡이, 피뎡이などが見られる。その他, 語中に流音が入る 뽕송이, 뽕소니などの例も見られるが, 뽕소니の場合は, 小倉進平の調査で ?peŋ-so-i であった地域と一致する。

『済州島方言研究』によると, 済州島の地域で 뽕이, 방돌래기, 뽕도로기などの例が見られる。小倉進平の資料では済州島で to-re-gi という語形が見られることから, 방돌래기와 뽕도로기는(1) p'εŋ-i 系の p'εŋ-と to-re-gi が合成して生じた語形であると思われる。しかし『韓国言語地図』では済州島の語形として 뽕이しか現れないので, 一時期 p'εŋ-と to-re-gi の合成語が使われたが, 時間が経つにつれ to-re-gi という語形は失われて現在標準語と一致する p'εŋ-i だけが使われるようになったと思われる。

### 4 語形の地理的分布

まず(1)の p'εŋ-i 系は平安道と済州島を除く全国に広く分布している。(1d)はすべて語形に流音が入っているもので咸鏡北道にだけ現れる。(2)po-ε 系は主に咸鏡南道に現れ, (5)so-ri 系は平安道などの韓国の北西地域に多く分布している。(4)kol 系は咸鏡南道の一部と慶尚南道の一部で現れ, 地域的に離れたところで似た語形が現れるのが特徴的である。(3)to-re-gi は to-re-gi の 1 語形しかなく, 済州島にだけ現れる特殊な語形である。

### 5 過去の文献上の記録

過去の文献上の記録を見ると, 独楽に当たる最も古い語形は『訳語類解』に現れる 핑이である。핑이に関連する語形としては 박핑이があり, 박핑이<sup>1</sup>は핑이よりも古い 1677 年の『朴通事諺解』に現れる。19 世紀の文献には(1)p'εŋ-i 系のバリエーションである 뽕이も見られる。

거리에 박핑이 툄 아히들 마장 혼터라 <1677 朴通事諺解 16b>

<sup>1</sup> 『李朝語辭典』によると, 박핑이는 「박을 팡이같이 공중에 휘둘러 소리내는 장남감」という意味である。

碾掇落子 핑이 돌리다 <1690 訳語類解>

뽕이 轉角子小光威月 뽕뽕 돌다 頻頻回轉 <1896 国漢会語 138>

その他, (2) po-ε 系や(3) to-re-gi, (4) kol 系, (5) so-ri 系の例は管見の限りでは文献上で見られない。

## 6 考察

文献上の記録に現れる最も古い独楽の語形は핑이であることから, 핑이の第一母音が広母音化し, 現在の標準語である뽕이になったと思われる。独楽は(1) p'εŋ-i 系は比較的全国に現れ, その他の(2) po-ε 系や(3) to-re-gi, (4) kol 系, (5) so-ri 系は地理的に偏りを見せる。(2) po-ε 系は咸鏡道に, (3) to-re-gi は済州島に, (4) kol 系は咸鏡南道の一部と慶尚南道の一部に, (5) so-ri 系は平安道に集中して現れる。『韓国言語地図』では(1) p'εŋ-i 系以外の語形は現れないので, 時間が経つにつれ, 比較的周辺地域で話されていた系列の語形は失われ, 京畿道周辺で話されていた(1) p'εŋ-i 系だけが使われるようになったと思われる。

(1) p'εŋ-i 系は一見, カタツムリを意味する달뽕이と関係があるように見えるが, 달뽕이の古形가뽕이であるため, 関係はないだろう。

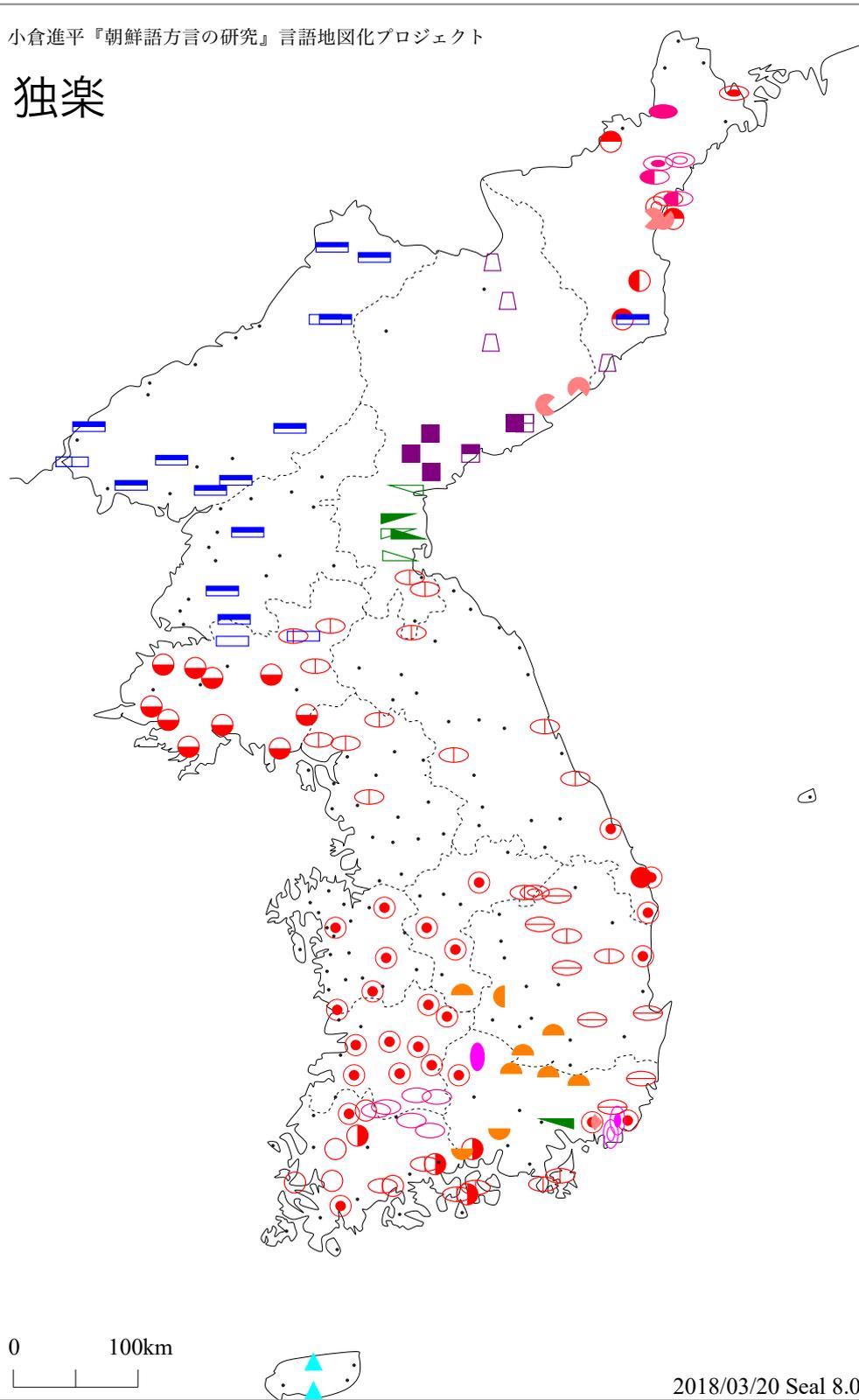
## 参考文献

玄平孝 (1962, 修正版 1985) 『済州島方言研究』(資料篇・論考篇) ソウル: 二友出版社.

李翊燮・田光鉉・李光鎬・李秉根・崔明玉 (2008) 『韓国言語地図』ソウル: 太学社.

劉昌惇 (1964) 『李朝語辞典』ソウル: 延世大学校出版部.

# 独楽



- ʔpeŋ-do-ri
- ʔpeŋ-goŋ-i
- ◉ ʔpeŋ-i
- ◊ ʔpeŋ-je
- ◐ peŋ-ε
- ◑ peŋ-do-ri
- ◒ peŋ-je
- ◓ p<sup>h</sup>ε-i
- ◔ p<sup>h</sup>εŋ-dii
- ◕ p<sup>h</sup>εŋ-gu-ra-mi
- ◖ p<sup>h</sup>εŋ-i
- ◗ p<sup>h</sup>εŋ-dεŋ-i
- ◘ p<sup>h</sup>iŋ-diiŋ-i
- ◙ p<sup>h</sup>iŋ-biŋ-i
- ◚ p<sup>h</sup>iŋ-dii
- ◛ paŋ-ε
- ◜ paŋ-i
- ◝ paŋ-je
- ◞ piŋ-diiŋ-i
- ◟ pa-i
- ◠ pε-al
- ◡ pε-ri
- ◢ ʔpε-ri
- ◣ ʔpeŋ-o-ri
- ◤ pε-a-ri
- ◥ ʔpeŋ-seŋ-i
- ʔpeŋ-so-i
- ◧ ʔpeŋ-son-i
- ◨ poŋ
- ◩ poŋ-ε
- ◪ po-ε
- ◥ poŋ-εŋ
- ◧ to-re-gi
- ◨ kol
- ◩ kol-beŋ
- ◪ kol-beŋ-i
- ◥ koŋ-ge
- ◧ kol-p<sup>h</sup>εŋ
- ◨ kol-p<sup>h</sup>εŋ-i
- ◩ sɔ-ri
- ◪ se-ri
- ◥ se-ru
- NR

## 抽斗 (ひきだし)

福井玲

### 1 はじめに

小倉進平 (1944: 上 251-252) には「器具」の中の「抽斗」という項目で都合 33 種類の語形が記録されている。この中で、最初の語形 (sol-hap) の直後に漢字で (舌盒) と注記されているが、その用字の出典は示していない。あとで述べるように、当時としては一般的な知識だったのかもしれない。また、同じ語形に関して咸鏡北道では「吉州以北 [sol-hap] といへば煙草入れを意味する」と注記している。

### 2 語形の分類

大きく分けると、(1) sɔ-rap 系、(2) ʔpe-da-dʒi 系、(3) ʔpo-bi 系、(4) その他の 4 つに分けられるが、(2) ʔpe-da-dʒi 系とまとめたものの中にはさらにいくつかのグループが存在する。ʔpe-da-dʒi の第 1 音節は、後で見ると用言語幹 ʔpe- (引く、抜く) に由来し、そのあとに他の動詞の名詞形が付いたり、連体形語尾 -r を介して体言が付いたものなど多くの種類が存在する。(3) の ʔpo-bi 系も用言語幹 ʔpop- (引く、抜く) に由来することは明らかである。これに対して(1) の sɔ-rap 系の由来は分かりにくい、これについてもあとで論じる。

(4) の「その他」は、語彙的に以上のものとはまったく関係がないもので、おそらく漢語に由来するものと考えられる。

#### (1) sɔ-rap 系

sɔ-rap, sɔl-hap, sɔl-lap, sɔl-gap

#### (2) ʔpe-da-dʒi 系

(2a) ʔpe-da-dʒi, ʔpe-da-dʒi, ʔpe-ra-dʒi

(2b) ʔpe-do-ri, ʔpe-dɔ-ri, ʔpe-du-ri

(2c) ʔpe-rap, ʔpe-rap, ʔpe-nap

(2d) ʔpel-ham, ʔpe-ram, ʔpe-ram, ʔpe-nam, ʔpe-dam

(2e) ʔpel-kan, ʔpe-ʔkan

(2f) ʔpe-gi

#### (3) ʔpo-bi 系

(3a) ʔpo-bi, ʔpɔ-bi, ʔpɔ-bi, ʔpwe-bi, ʔpe-bi, ʔpe-bi, ʔpi-bi

(3b) ʔpɔ-bɔ, ʔpe-bɛ, ʔpe-bɛ-gi

#### (4) その他

tʃɔŋ-dɛ, tʃʰiŋ

### 3 語形の地理的分布

まず、現代の標準語の語形と同じ(1)so-rap系は、京畿道、黄海道、忠清道および、咸鏡南道、濟州島と3地域に分かれて分布する。次に、(2a)?pe-da-dʒi系は慶尚道、全羅道と江原道の海岸沿い、すなわち南部地域を中心に分布する。また、(2b)?pe-do-riは全羅道の東部地域に見られ、(2c)?pe-rap系は黄海道と咸鏡南道南部、(2d)?pel-ham系は平安道、黄海道と慶尚南道南部、(2e)?pel-kan系は全羅南道、慶尚南道、(2f)?pe-giは平安北道のみに見られる。(3)?po-bi系は、咸鏡道を中心に分布し、そのほか、咸鏡道寄りの平安北道や慶尚道などにも数地点見られる。(4)その他のうち、tʃɔŋ-dɛは咸鏡南道に1地点、tʰiŋは京畿道に1地点見られるのみである。

### 4 過去の文献上の記録

中世語の用例は今のところ見つかっていない。18世紀の資料にいくつか설합という語形がみられる。これは現在の標準語の서랍に繋がる最も古い形である。

抽替 설합 <1775 訳語類解補 44a>

抽替 설합 <1778 方言類積 戊部方言 10b>

また、19世紀の資料には혈합と表記された形も見られる。

挈盒 담비혈합 <18-- 広才物譜 飲食 5a>

혈합 穴檻 <1880 韓仏字典 95>

혈합 舌盒 <1895 国漢会語 355>

この中で『広才物譜』の例は、小倉進平が吉州以北の咸鏡北道についてが注記したように「煙草入れ」を指すものと思われる。『国漢会語』の例は「舌盒」という漢字をあてながらも発音は혈합となっている点が面白い。

この他、開花期以降の小説などには漢字のみで「舌盒」と書かれた例が存在する。

그의 글씨나 볼 양으로 一鴻君의 冊上 舌盒을 열었나이다 <1917 李光洙 어린벗에게>

### 5 考察

(1)so-rap系の語形の語源は小倉進平の注記にもあるように「舌盒」であるかもしれない(金敏洙『우리말語源辞典』でもこの語源が記載されている)。もしそうであれば、sol-hapという語形が最もそれに近いもので、so-rapは第2音節の頭子音のhが脱落したものと説明できる。しかし、中世語および近代語の中にはそれを証明する例は見られず、漢語としての

由来も不明である。また、それに近い語形として存在する sol-lap, sol-gap などはどう捉えるべきであろうか。一見、中世語における語中の -ㄷㅇ- (ㅇは中世語に見られる有声軟口蓋(声門)閉鎖音)の反映形のようにも見られる。もう、そうであれば sol-gap が最も古い語形ということになるが、地理的分布から見ると、これは黄海道に1地点見られるのみであり、しばしば古い語形が残存する南部および北部方言には見られない。このことからすると、この sol-gap はあとから何らかの語源意識(おそらく -gap 「匣」)が働いて新たに作られた可能性がある。一方、上にあげたように19世紀の資料には 헐합 と書かれた例も存在する。もしこちらの語形の方が古いとすると、もともとの語源は「引く」を意味する用言 hjo- の連体形に hap 「盒」が付いたものかもしれない<sup>1</sup>。もしそうなら、18世紀の資料に見られる sjol-hap はそれが変化したものかもしれない。ただし資料の年代は必ずしも整合しないという問題点が残される。また、「舌」の字が当て字のように使われたとすれば、これも「舌」のように奥まった所から引き出せるものという語源俗解が働いた可能性もある。

(2) ?pe-da-dʒi 系は最初にも述べたように、動詞 ㅉ다 に関わるが、後半要素にはさまざまなものが見られる。まず、?pe-da-dʒi の第2音節以下、つまり -da-dʒi の部分は、tat- (閉める) の名詞形である。また、?pe-do-ri は後部要素に tor- の名詞形が付いたもの、?pel-ham は?pe- のあとに連体形の -r + 함(函)、?pel-kan, ?pe-?kan などは 간(間)がついたものと考えられる。また、?pe-gi ㅉ다 の名詞形であろう。

(3) ?po-bi 系は動詞 ㅉ다 を名詞化したものに由来すると考えられる。第1音節の母音が多様に現れるのは、第2音節に表れる母音 /i/ の影響による所謂ウムラウトによるものである。

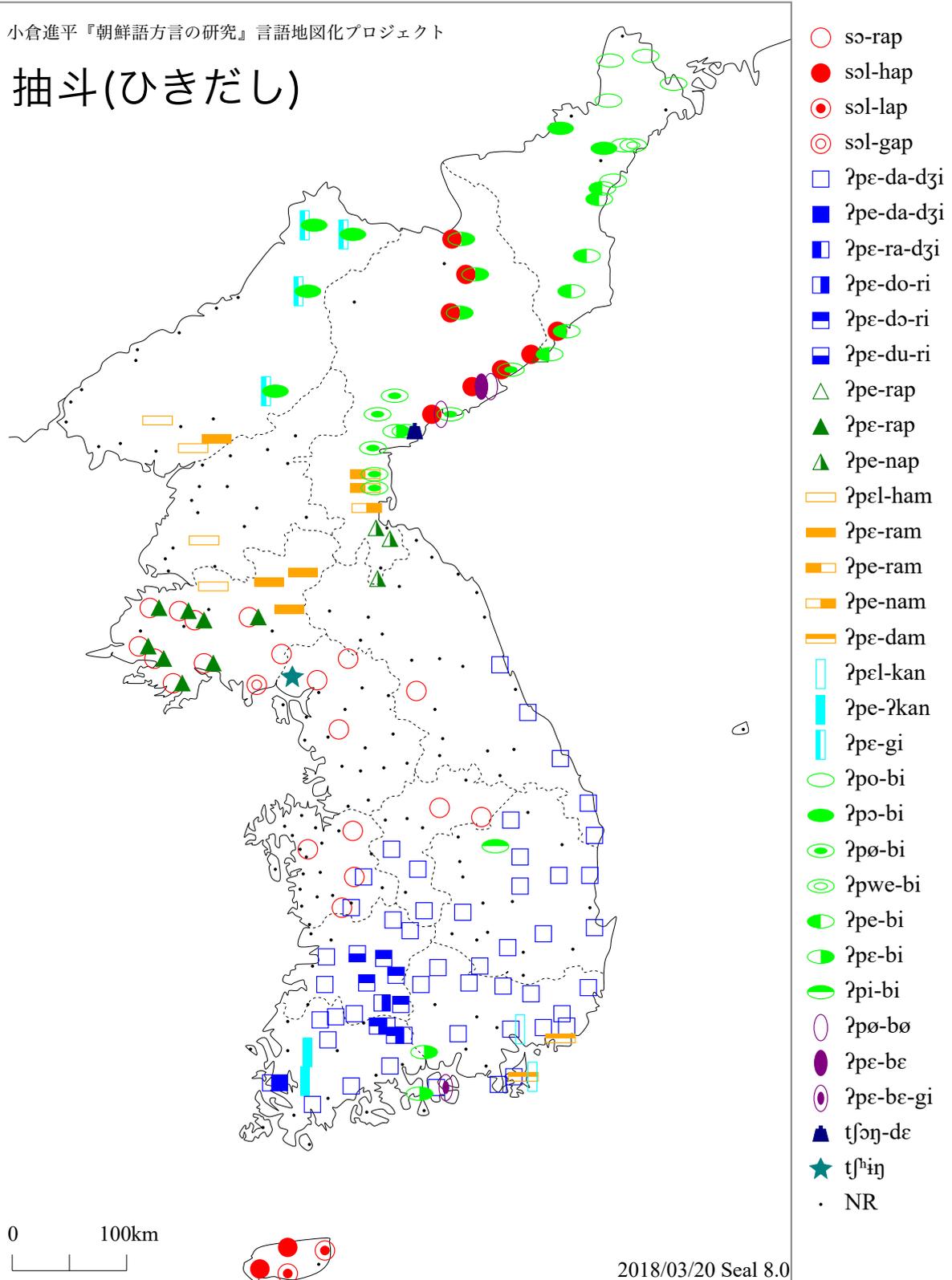
(4) その他にあげた tʃɔŋ-de と tʃʰiŋ については由来は不明である。後者は「層」と関連があるであろうか。

#### 参考文献

金敏洙 (1997) 『우리말語源辞典』ソウル：太学社。

<sup>1</sup> この点は2019年度の授業中に大学院生の許秦さんが指摘してくれた。

# 抽斗(ひきだし)



- sɔ-rap
- sɔl-hap
- ◉ sɔl-lap
- ◎ sɔl-gap
- ʔpe-da-dzi
- ʔpe-da-dzi
- ▣ ʔpe-ra-dzi
- ▤ ʔpe-do-ri
- ▥ ʔpe-do-ri
- ▧ ʔpe-du-ri
- △ ʔpe-rap
- ▲ ʔpe-rap
- ▴ ʔpe-nap
- ▭ ʔpel-ham
- ▮ ʔpe-ram
- ▯ ʔpe-ram
- ▰ ʔpe-nam
- ▱ ʔpe-dam
- ▨ ʔpel-kan
- ▩ ʔpe-ʔkan
- ʔpe-gi
- ʔpo-bi
- ʔpo-bi
- ◉ ʔpø-bi
- ◎ ʔpwe-bi
- ◐ ʔpe-bi
- ◑ ʔpe-bi
- ◒ ʔpi-bi
- ◓ ʔpø-bø
- ◔ ʔpe-bø
- ◕ ʔpe-bø-gi
- ▲ tʃɔŋ-dø
- ★ tʃʰiŋ
- NR

## 啄木鳥

奈良 林 愛

### 1 はじめに

小倉進平(1944: 上 272-273)には「飛禽」類の中で「啄木鳥」という項目名で30の語形が記録されている。

韓国語의 딱따구리는、日本語の「キツツキ」と同様に 딱따구리科に含まれる鳥の総称であり、日本で言うアオゲラ、アカゲラ、コゲラなど、色や模様、分布域などの異なる種類がこの名で呼ばれていることは、一応留意しておくべきだろう。以下、『標準国語大辞典』での「딱따구리」の項の説明を挙げておく。

딱따구리과의 새를 통틀어 이르는 말. 산림에 살며 날카롭고 단단한 부리로 나무에 구멍을 내어 그 속의 벌레를 잡아먹는다. 까딱딱따구리, 쇠딱따구리, 오색딱따구리, 청딱따구리, 크낙새 따위가 있다. ≡ 탁목, 탁목조. (キツツキ科の鳥の総称。山林に棲んで鋭く固い嘴で木に穴をあけてその中の虫を捕え食べる。クマゲラ、コゲラ、アカゲラ、アオゲラ、キタタキなどがある。≡啄木、啄木鳥。)

### 2 語形の分類と地理的分布

30の語形を、下に述べる観点から次の7グループに分類した。

#### (1) ?tak-ta-gu-ri 系

?tak-ta-gu-ri / tak-ta-gu-ri / tak-ta-gui

#### (2) ?tat-tʃo-gu-ri 系

?tat-tʃo-gu-ri / tat-tʃa-gu-ri / ?tak-tʃa-gu-ri / ?tat-tʃa-gu-ri / ?tet-tʃa-gu-ri / ?tʃak-tʃa-gu-ri / tʃek-tʃe-gu-ri / ?tʃek-tʃe-gu-ri / ?tʃet-tʃe-gu-ri

#### (3) ?tek-tɛ-gu-ri 系

?tek-tɛ-gu-ri / ?tet-tɛ-gu-ri / ?tɔk-tɔ-gu-ri

#### (4) ?tak-tak-sɛ 系

?tak-tak-sɛ / tak-tak-sɛ / ?tuk-?tuk-sɛ

#### (5) tʃʌŋ-dʒo-go-ri 系

tʃʌŋ-dʒo-go-ri / tʃʌŋ-dʒo-gu-ri / tʃʌŋ-dʒo-gu-ri / tʃʌŋ-do-go-ri

#### (6) ka-mak-tʃo-gu-ri 系

ka-mak-tʃo-gu-ri / ka-mak-tu-gu-ri / ka-mak-tʃo-ga-ri / ka-mak tʃʌŋ-dʒo-gu-ri

#### (7) その他

ʔtʃik-pa-gui / ta-sot tʃat-kə-ri / ʔtʃək-pak-se / na-mu ʔtʃi-gi

標準語と同じ、あるいはごく標準語に近い形の(1) ʔtak-ta-gu-ri 系は、朝鮮半島中央部に分布し、比較的新しい語形であると考えられる。

第2音節に破擦音を含む(2) ʔtat-tʃə-gu-ri 系(ただし、第1音節が tʃəŋ のものは(5)に分類)は、(1)よりも外側の地域に分布する。後述するように18世紀末以降『蒙語類解』などの文献に見られる語形に対応する。中期語の더고리를後部要素として、その前に1音節の接頭辞的要素が加わり、더고리由来の部分にも音の変化が起こったと推測する。

(3) ʔtek-tə-gu-ri 系は(1)(2)と類似する語形だが、第1音節の母音がεやəで、第2音節が破擦音ではない点で区別されるものである。慶尚南道・全羅北道に分布する。

(4) ʔtak-tak-se 系は、擬態語と思われる前部要素(딱딱は固い物同士が小刻みにぶつかりあうさまなどを表現する)に、鳥を意味する새が組み合わさった語形である。黄海道、咸鏡南道、咸鏡北道南部に分布する。

(5) tʃəŋ-dʒo-go-ri 系の第1音節は、「青」を意味し、dʒo-go-ri は더고りに由来するもので、つまり、「アオゲラ」のような語構成なのではないかと推測される。咸鏡南道に分布する。

(6) ka-mak-tʃə-gu-ri 系の ka-mak-は「鳥」を意味していると推測される。日本で北海道・東北地方北部に生息し、絶滅危惧種になっているクマゲラは、朝鮮半島北部にも生息するが、この種はキツツキの中でも体が大きくて黒く、飛ぶ姿はカラスやカササギに似て見える。したがって、この語はクマゲラを思い浮かべて答えられた語であったのではないかと推測する。このグループにある語形の一つ ka-mak tʃəŋ-dʒo-gə-ri は、「黒青ゲラ」のような成り立ちの語のように見えて興味深い。

最後の(7)は、(6)までのいずれとも共通の要素を持たない語形をまとめたものである。ta-sot tʃat-kə-ri は、最初の要素は現代語でアカゲラを오색딱따구리と呼ぶように、羽の色を五色と捉えたところから来ているかもしれない。tʃat-kə-ri の部分はその地点に現れている tat-tʃə-gə-ri の tʃə-gə-ri との関連が考えられる。ʔtʃik-pa-gui と na-mu ʔtʃi-gi は、動詞を含んだ語構成である。ʔtʃək-pak-se の pak-se の部分は「シジュウカラ」を意味するものだが、ʔtʃək の意味するところは不明である。

### 3 その他の語形

小倉進平のデータがない濟州島については、『韓国方言資料集』で남조르기の語形が記録されている。また、『濟州島方言研究 資料篇』では、濟州島「全域」として「남도르기새」の語形一つが記録されている。『표준어로 찾아보는 제주어 사전』では남도리기새, 남도로기새の形もある。

また、小倉のデータの少なかった江原道だが、『韓国方言資料集』では딱따구리의他に딱따구리의語形が現れている。小倉のデータで咸鏡北道・咸鏡南道に現れている ʔtak-tʃə-gu-ri と同じものであろう。

全羅南道について、小倉のデータでは나무찌기가順天で、적재구리가麗水で記録されているのみだが、『韓国方言資料集』ではこの地域に탁목조, 탁목새, 탁조, 딱새, 조새, 목수새, 딱다구리, 딱자구리, 딱대구리, 때때구리, 딱다꾸리と多様な語形が挙げられている。

#### 4 文献上の記録

더구리가最も早い語形のように、『訓蒙字会』に現れる。以下に、確認できた 19 世紀までの文献上の記録を挙げる。

鴛 더구리 련 啄木也俗呼啄木官 〈1527 訓蒙字会叡山本 8b・東大本 16a〉

啄木鳥 더구리 性平無毒…○此鳥有褐有斑褐者雌斑者…有山啄木뎃더구리 〈1613 東医宝鑑一 39a〉

啄木官 더구리 〈1690 訳語類解下 27a〉

啄木官 뎃저구리 〈1790 蒙語類解下 29a〉

啄木鳥 싹저구리 〈18-- 広才物譜禽林〉

뎃저구리 鴛 〈1880 韓仏字典〉

싹저구리 啄木鳥 A woodpecker. Also 탁목도. 〈1897 韓英字典〉

『東医宝鑑』では、더구리의語形が示されたあと、薬としての効能や、体に褐色の部分や斑があるという外見上の特徴が書かれている。それから、山にいるキツツキとして、「뎃더구리」という名が示され、「鶺鴒のように体が青黒く、頭の上には赤い羽毛がある」と説明されている。この特徴から、「뎃더구리」にあたるのは、「クマゲラ」ではないかと想像される。第 1 音節が?tet のものは、この語形と関連があるかもしれない。

対馬で朝鮮語通詞養成のために使われた朝鮮語学習書『交隣須知』（成立年代未詳）の諸本を見ると、諸本の中でも古い特徴を示す苗代川本（19 世紀初頭の書写か）では、더구리의語が次のような文例で現れる。

鴛 더구리란 새는 엇던 쟈지 아직 아니 보옵넹 / 더구리란 새는 서근 나무가지를 두두리읍넹  
キタ、キト云トリハ ドウシタ トリヤラ マアダ ミマセヌ / (鳥) (腐)  
(木) (枝) タ、キマスル 〈18-- 交隣須知苗代川本 2:4b〉

明治時代に日本の外務省から出された刊本(初刊 1881 年)では、「싹더구리는 썩은 나무를 두두리넹니 키타、키트イフ鳥ハ クチタ木ヲタ、ク」(1:57b) となっている。

キタタキはクマゲラ属の大型のキツツキであり、外見はクマゲラとよく似るが腹の色が白いことが主な違いである。東南アジアや朝鮮半島南部に分布し、日本では対馬北部に生息したが、1920 年以降記録が無く、絶滅したと考えられている。『東医宝鑑』の記録から、뎃더구리>싹더구리はもともとクマゲラ属であったかと推測されるのだが、ここにはまだ

そのイメージが生きているように思われ、興味深い。

前問恭作・藤波義貫校訂の『校訂 交隣須知』(1904年)では、「삿더고리는 썩은 나무를 부리로 쏘니 木つゝきは朽木を嘴でつゝく。」(p.79)となっている。ここで関心を引くのは、20世紀に入ってからでも딱따구리ではなく삿더고리의語形がなおも規範性を持った語形とされていたということである。

朝鮮総督府『朝鮮語辞典』(1920)でも때찌구리가本項目になっており, 짝짝울이はその方言という扱いである。文世栄『朝鮮語辞典』(1938)でもなお, 때찌구리가本項目で딱따구리는方言の扱いである。ハングル学会『큰사전 (大辞典)』(第2巻, 1947)に至ってようやく딱따구리가本項目として取り上げられているのが確認される。どの時期にどのような理由で딱따구리가標準語的地位を獲得したのかが, 今後の検討課題として残されている。

## 5 考察

딱따구리는, 地理上の分布及び文献上の記録から考えて, 比較的新しく生まれた語形であることがわかる。더고리가固有語として, 近代語に至るまで広く使われた語であったと思われる。それが別の要素と組み合わせりながら様々に変化していったのは, 一つには저고리(上衣)と呼び分けようとする意識が働いて, 前に違う要素が加わってきたのかもしれないと想像する。また別に考えられるのは, 特定の種(クマゲラ)を呼び分けるため, 더고리의前に別の要素(땃-)が付けられたのではないかということである。

땃더구리의땃-は何を意味するのか。中期語で他に땃-で始まる名詞として他に땃가치가あり(『訓蒙字会』では鶯〔ウソ〕に宛てられる。また, 『東医宝鑑』では練鵲〔オナガドリ〕に宛てられる。現代語で땃가치는モズである), 後部要素が持つ意味であるカササギとどのように意味が違うかを考えると, 「大」に由来するものではなさそうである(땃가치に比定されるものの方がカササギよりも小さい)。後の時代に初音が濃音化する点でも땃가치의땃-と同じであり, 同じ要素であった可能性は高いが, 今のところその意味は未解明である。

땃더구리가キツツキ種を代表する語となり, 最初の音節の初音が濃音である語形は19世紀から出現する。一方, 文献上では見つかっていないが擬態語を前部要素に持つ(4) ?tak-tak-se系も地方によっては既に存在し, 땃더구리의語形と混交を起こしたのではないか。더고리의더の部分, その前に別の要素が組み合わせると, 音の変化を受けやすく, また고리(>구리)の部分, -구리로終わる生物の名前は他にも見られることも影響して接尾語的に解釈されるようになって딱따구리의語形が生まれたのではないだろうか。この語形がどのように標準語的地位を獲得していったのかについては, さらに20世紀の資料を見て考究していきたい。

## 参考文献

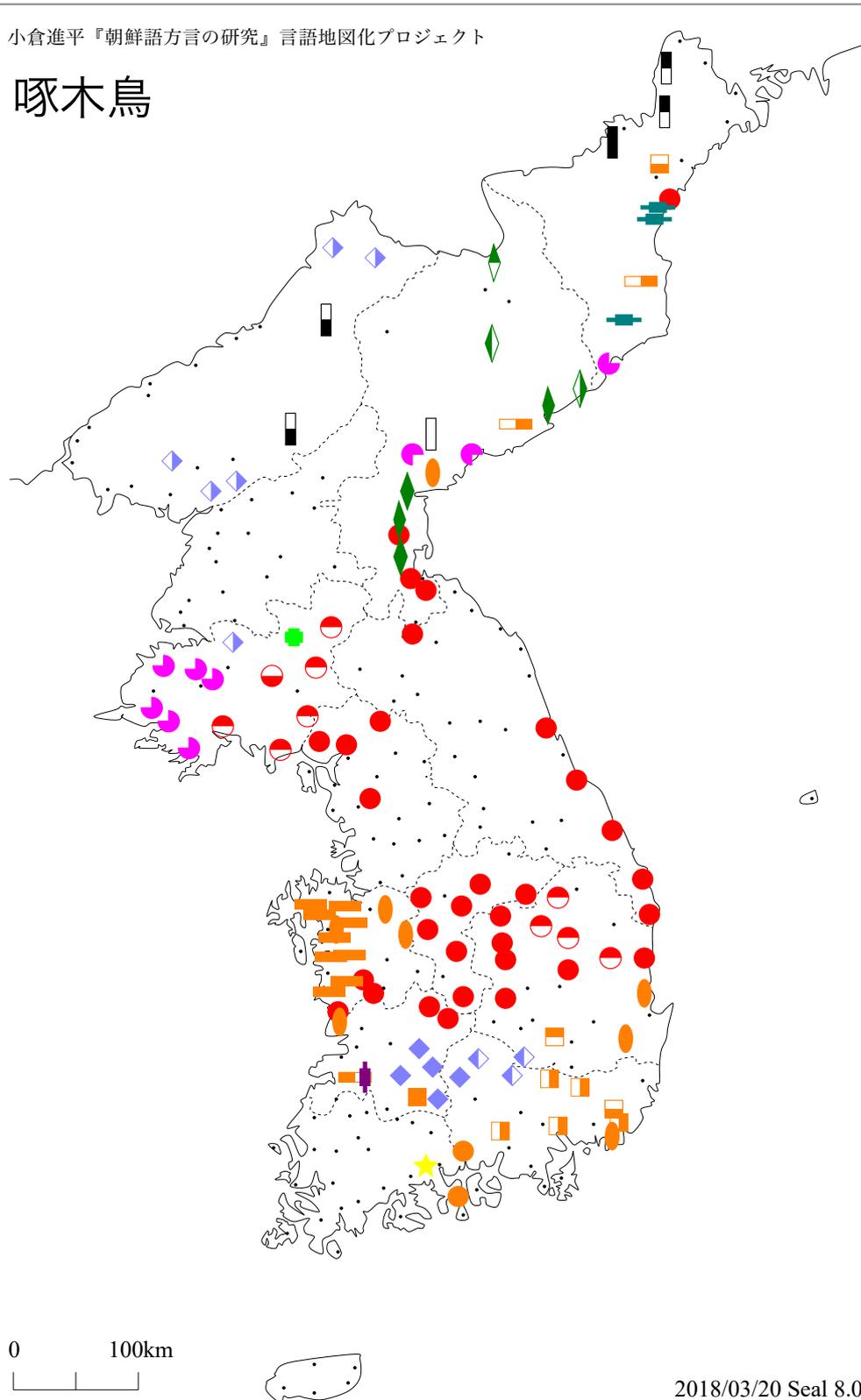
韓国精神文化研究院語文研究室編(1987-1995)『韓国方言資料集』全9巻 城南:韓国精神文化研究院

金泰均編著(1986)『咸北方言辞典』ソウル：京畿大学校出版局  
玄平孝・姜榮峯(2014)『표준어로 찾아보는 제주어 사전』濟州特別自治道：圖書出版社  
玄平孝(1985)『濟州島方言研究：資料篇』ソウル：二友出版社  
国立国語研究院 (1999)『標準国語大辞典』ソウル：斗山東亜  
片茂鎮(2005)『諸本対照 交隣須知』ソウル：J&C  
劉昌惇(1964)『李朝語辞典』ソウル：延世大学校出版部

「キタタキ」出典 小学館『日本大百科全書(ニッポニカ)』

<https://kotobank.jp/word/%E3%82%AD%E3%82%BF%E3%82%BF%E3%82%AD-50908>

# 啄木鳥



- ?tak-ta-gu-ri
- ◐ tak-ta-gu-ri
- ◑ tak-ta-gui
- ▬ ?tat-tʃɔ-gu-ri
- ▭ tat-tʃa-gɔ-ri
- ◻ ?tak-tʃa-gu-ri
- ◐ ?tat-tʃa-gu-ri
- ▬ ?tɛt-tʃa-gu-ri
- ◻ ?tʃak-tʃa-gu-ri
- tʃɛk-tʃɛ-gu-ri
- ◻ ?tʃɛk-tʃɛ-gu-ri
- ◻ ?tʃɛt-tʃɛ-gu-ri
- ◆ ?tɛk-tɛ-gu-ri
- ◊ ?tɛt-tɛ-gu-ri
- ◊ ?tɔk-tɔ-gu-ri
- ?tak-tak-sɛ
- ◐ tak-tak-sɛ
- ◑ ?tuk-ʔtuk-sɛ
- ◆ tʃʰɔŋ-dʒɔ-gɔ-ri
- ◊ tʃʰɔŋ-dʒɔ-gɔ-ri
- ◆ tʃʰɔŋ-dʒɔ-gu-ri
- ◊ tʃʰɔŋ-do-gɔ-ri
- ▬ ka-mak-tʃɔ-gu-ri
- ▬ ka-mak-tu-gɔ-ri
- ▬ ka-mak-tʃɔ-ga-ri
- ▬ ka-mak-tʃʰɔŋ-dʒɔ-gɔ-ri
- ★ na-mu-ʔtʃi-gi
- ?tʃik-pa-gui
- ▬ ?tʃok-pak-sɛ
- ▬ ta-sɔt-tʃat-kɔ-ri
- NR

## 近い

立川 真理恵

### 1 はじめに

韓国の標準語は가깝다 (ka-ʔkap-ʔta) であり, これにあたる語は『朝鮮語方言の研究』の「形容詞」に18種記録されている(上:347-348)。「近い」の語形は, まず「가깝다」と関連があるもの, 標準語で「距離が少し近い」ことを表す「가직하다」と関連があるもの, 及び済州島に見られる pΛ-dii-da の3つのグループに分けることができる。

#### (1) 「가깝다」と関連があるもの

(1a) kat-kap-ta / kɛt-kap-ta

(1b) kat-tʃʌp-ta / kat-tʃap-ta / kɛ-tʃʌp-ta / kɛ-tʃip-ta / kɛ-tʃap-ta / kɛ-dʒap-ta / kɛ-dʒɔp-ta

#### (2) 「가직하다」と関連があるもの

(2a) ka-dʒik-ta / ka-dʒik-ha-ta / ka-dʒik-ta / ka-dʒuk-ta

(2b) kɛ-dʒuk-ta / kɛ-dʒak-ta / kɛ-dʒɔk-ta / kɛ-dʒik-ta

#### (3) pΛ-dii-da

(1) は第二音節の子音が k で現れる語形と硬口蓋音で現れる語形によって, (2) は第一音節の母音における a と ε の交替によって, それぞれ更に2つの項目に分類する。

### 2 その他の語形

小倉進平の記述では江原道のデータがあまり見られないが, 『韓国方言資料集』では標準語の ka-ʔkap-ʔta の他, 第二音節の a が ɔ に交替した ka-ʔkɔp-ʔta という語形が確認されている。また, 慶尚道では「가직하다」関連の語形以外に「가깝다」関連の語形も見られ, その他にも ka-tʃʌp-ta (忠南・全北), ka-tʃɔp-ta (忠南), ka-tʃʌ-up-ta (全南) 等の語形が記録されている。

### 3 地理的分布

全体的に見ると, 「가깝다」関連の語形は南北にわたって広く見られるのに対し, 「가직하다」関連の語形は朝鮮半島の南部地域に集中していることが分かる。「가깝다」関連の語形のうち, 第二音節の子音が k で現れる (1a) の語形は主に半島の西側地域に多く見られる。一方, 第二音節の子音が硬口蓋音で現れる (1b) の語形は広範囲で見られ, 特に kat-tʃʌp-ta は半島全域に分布している。また, (1b) のうち第一音節が ε で現れる語形について

は、(1) と (2) の語形の接触地帯付近に見られるという点が特徴的である。なお、p<sub>h</sub>-dii-da は済州道の4地点でのみ見られる語形である。

#### 4 文献上の記録

まず「가깝다」関連の語形について、文献上最も古い語形と考えられるのは「갓잡-」であり、この語形は15世紀～16世紀前半の文献で見られる。15世紀後半以降は、「뵤」の消失に伴って母音で始まる語尾との接続の際に β > w の変化が現れるようになる。

갓가쁜 남괴 와 안자셔 <1459 月印釈譜 11:4a>

마슬히 멀면 乞食하디 어렵고 하 갓가쁜 면 조티 못하리니 <1447 釈譜詳節 6:23b>

날 덩하고 그 날리 갓가와 오거닐 <1518 二倫行実図 33a>

また、『李朝語辞典』(p.23) では「가즈기」の訳語として「가까이」が掲載されている。「가즈기」は中期語で「齊」「等」という2つの意味を持つ「마즈」との関係が推測され、これは南部方言における「가직다」等の語形とも関連がありそうに見える。ただし、「마즈」及び副詞形「마즈기」が距離的な近さを表す用例は文献上では見られなかった。

なお、済州島方言の p<sub>h</sub>-dii-da の古形については確認できなかった。

#### 5 考察

本項目で特に目を引くのが、kat-tʃ<sup>h</sup>ap-ta や kat-tʃap-ta 等のように第二音節が硬口蓋音で現れる語形である。地理的な分布を見ると、kat-tʃ<sup>h</sup>ap-ta が半島全域で、kat-tʃap-ta が咸鏡南道及び平安北道で見られるのに対し、標準語に近い kat-kap-ta は西側地域に集中しており、圏論的な分布を成していると見ることができる。この点に基づくと、第二音節が硬口蓋音である語形の方が古く、kat-kap-ta が後に勢力を拡大していったと推定できる。

次に歴史的な観点では、一般的に「가깝다」の古形は接尾辞「-잡-」に「\*갓-」(或いは「\*갓-」)のような用言語幹が接続したものとされている。しかし、kat-tʃ<sup>h</sup>ap-ta 等のような方言形を考慮すると、接尾辞「-알/얼-」と「\*갓-」の接続が生じた可能性も考えられる。「-잡-」と「-□/□-」の出現時期については不明であるが、「-잡-」が「-알/얼-」に比べて生産性が低く、かつ歴史的に母音調和を持っていないことから、「-알/얼-」が出現した後に「-잡-」が現れたのではないかと推測できる。この場合、「\*갓-」に「-알-」が接続して第二音節が硬口蓋音である語形が先に出現し、後に「\*갓-」と「-잡-」が接続した語形「갓잡-」が出現して勢力を拡大していったという見方ができる。

また、中期語において「豶/豶」(>팔: 小豆)のように語幹末音でㅅとㅈの交替が見られる語が存在したことを基に、「\*갓-/\*갓-」という用言語幹に「-알-」が接続したと想定することもできる。この場合も、語形の分布を考慮すると「\*갓-」に「-알-」が接続した語形が先に出現し、後に「\*갓-」に「-알-」が接続した語形「갓잡-」が出現して勢力を拡大

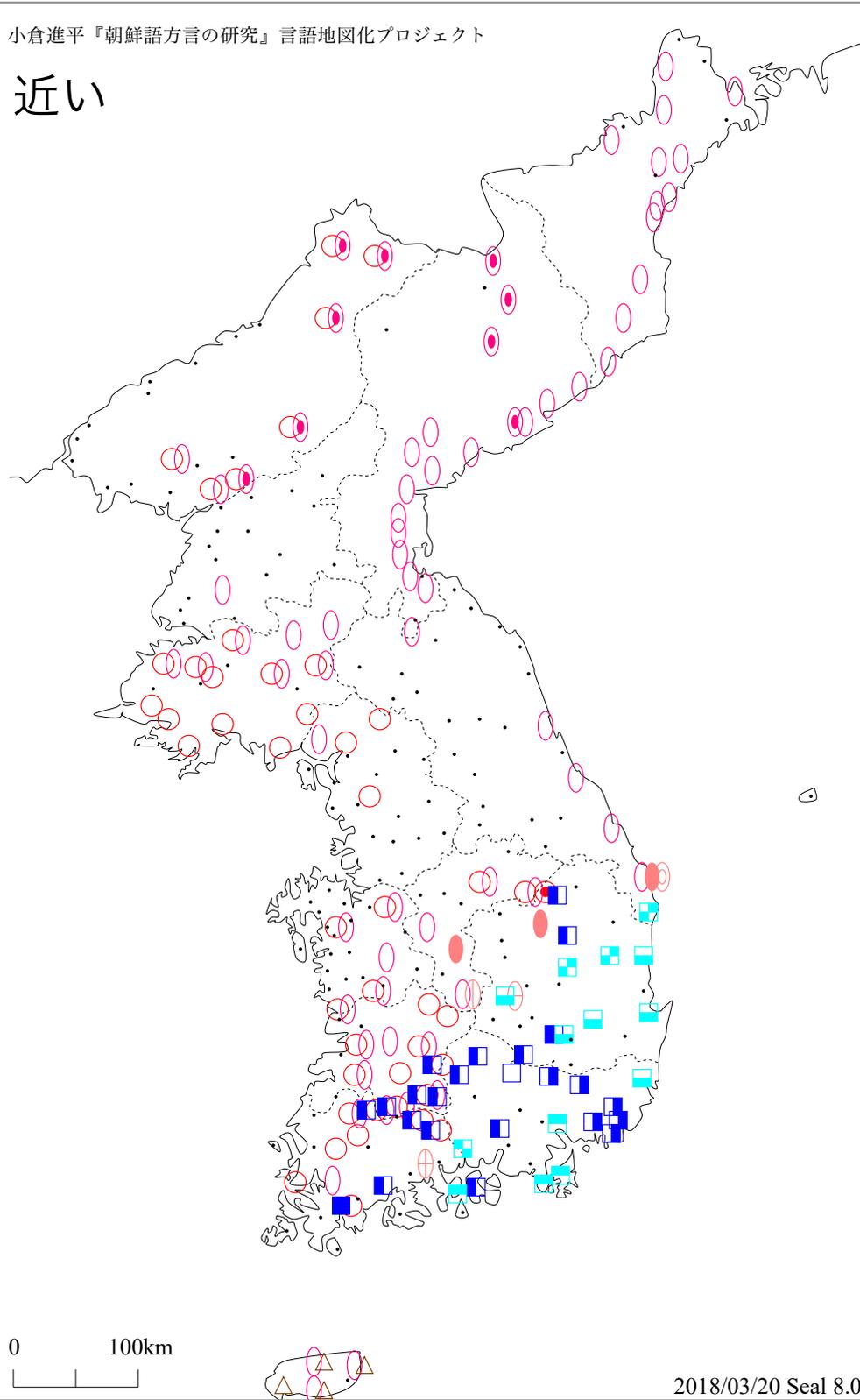
していったと考えるのが妥当であると思われる。

最後に、「가직하다」関連の語の由来は不明だが、上述の通り「マ彡」との関連が考えられる。「-잡-」に用言語幹が接続した語形の1例である「\*잡- (低)」(>\*잡-+-잡-) について見ると、この語は『鷄林類事』において「\*彡」(低曰榛則) と記されている(姜信沆 1980: 113)。「\*彡」からの派生で「\*잡-」という用言が生成された、或いは両者が交替形であったとしたら、「マ彡」との関連で「\*잡-」という用言が出現した可能性も考えられる。この場合「\*잡- (近)」との関連性についても考察の対象となるが、「잡잡-」の第一音節が  $\Delta$  でなかったことを考慮すると、両者の関連性を考える際は慎重な分析が必要である。

#### 参考文献

- 玄平孝 (1962) 『濟州島方言研究』 ソウル：太学社.  
姜信沆 (1980) 『鷄林類事「高麗方言」研究』 ソウル：成均館大学校出版部.  
李基文 (1998) 『新訂版 国語史概説』 ソウル：太学社.  
韓国精神文化研究院 語文研究室編 (1987-1995) 『韓国方言資料集』城南：韓国精神文化研究院.

# 近い



- kat-kap-ta
- ket-kap-ta
- kat-tʰap-ta
- kat-tʰap-ta
- ke-tʰap-ta
- ke-tʰip-ta
- ke-tʰup-ta
- ke-dʒap-ta
- ke-dʒop-ta
- ka-dʒik-ta
- ka-dʒik-ha-ta
- ka-dʒik-ta
- ka-dʒuk-ta
- ke-dʒuk-ta
- ke-dʒak-ta
- ke-dʒok-ta
- ke-dʒik-ta
- △ pʌ-dii-da
- NR

## 酸い

國分翼

### 1 はじめに

韓国の標準語は si-da (시다)であるが、これにあたる語は『朝鮮語方言の研究』の「形容詞」に「酸い」という項目名で20種記録されている(上:352-353)。これらは次のように5つのグループに分類することが出来る。

#### (1) si-da 系

(1a) si-da<sup>l</sup>/si-da

(1b) sɔ-da

#### (2) si-gu-rɔp-ta 系

(2a) si-gi-rɔp-ta/si-gu-rɔp-ta/si-gu-rɔp-ta/si-gɔ-rɔp-ta

(2b) sɛ-gu-rɔp-ta/sɛ-gi-rup-ta/sɛ-gi-rap-ta

(2c) se-gu-rɔp-ta/se-gu-rap-ta

#### (3) si-gup-ta 系

(3a) si-gip-ta/si-gup-ta/si-gɔp-ta<sup>l</sup>/si-gɔp-ta

(3b) sɛ-gup-ta

#### (4) si-gu-da 系

si-gu-da/si-k<sup>h</sup>u-da

#### (5) si-gul-da

(1)の si-da 系は標準語形に最も近い形で、語頭音節の母音の種類によって(1a)と(1b)に下位分類される。(1a)には語頭が濃音で現れるものも存在する。

(2)の si-gu-rɔp-ta 系も語頭音節の母音の種類によって(2a), (2b), (2c)に下位分類される。それぞれのグループは第2および第3音節の母音にバリエーションが存在する。

(3)の si-gup-ta 系も語頭音節の母音で(3a)と(3b)に下位分類できる。そのうち、(3a)において第2音節の母音にバリエーションが存在する。また、語頭子音が濃音化した例もある。

(4)の si-gu-da 系は2種類存在し、第2音節の子音が平音のものと激音のものが現れる。

(5)の si-gul-da は他の語形と異なり、第2音節の終声位置に流音が現れる例である。このタイプの語形は1種類のみが観察された。

## 2 その他の語形

崔鶴根(1978:1226-1227)によれば, これらの語形の他に세거럽다(慶尚北道慶州, 慶尚南道蔚山, 釜山), 세거랍다(慶尚南道梁山), 세구럽다(慶尚北道盈徳), 스다・스:다・스디스다(全羅南道), 십다(慶尚南道)などが確認される。また, 接尾辞-하다が結合した새큼하다(忠清北道), 새곰하다(全羅南道谷城)といった語形も記録されている。

加えて, 宮下(2007:204)では, 中国吉林省琿春市出身の話者のデータとして, si-kʰul-da という語形が紹介されている。このデータは半島のものではないが, 琿春市は延辺朝鮮族自治州の東部に位置し, 六鎮方言を基層とした言語が話されている<sup>1</sup>ため, この語形も半島内六鎮地域で元々使用されていたと推測できる。

## 3 地理的分布

(1)の si-da 系は主に半島西側で広く観察されるが, 東側でも江原道のいわゆる東海岸地域と慶尚南道地域を中心に確認される。また, 咸鏡北道でも羅南と富寧の2地域で見られる。なお, 語頭音節の母音の異なる so-da は, 全羅南道順天のみで見られる。

(2)の si-gu-rɔp-ta 系は咸鏡南道の新興を北限として, 半島東部で見られる。そのうち, (2a)のタイプは咸鏡南道から慶尚南道まで広く見られるが, (2b)と(2c)のタイプは慶尚南北道でのみ見られる。

(3)の si-gup-ta 系は慶尚北道の3地点と忠清北道と江原道で確認される。

(4)の si-gu-da 系は咸鏡南北道でのみ現れる形であり, そのうち si-kʰu-da は六鎮方言地域にのみ分布している。

(5)の si-gul-da は咸鏡南道文川, 高原, 永興の3地点にのみ分布している。

## 4 文献上の記録

文献上に現れる語形は語幹が1音節のものがほとんどである。そのうち, 最も古い語形は15世紀に現れるものであるが, 同じ文献に2通りの語形が現れる。その基本形を示すと, 一方は식다, もう一方は식다である。

밭바다에 식요미 니느니 <1461 楞嚴經諺解 10:79a>

사르미 식 梅를 니르면 <1461 楞嚴經諺解 2:115b>

また, 19世紀末の『韓英字典』には, 接尾辞-하다が結合した次のような語形が現れる。無論, 19世紀の文献であるため, ここでの語頭音節の母音の違いは表記上のバリエーションであり, 音韻上の対立はないものと考えられる。

식큰하다 <1897 韓英字典>

<sup>1</sup> 宮下(2007:13)を参照。

## 5 考察

まず、この項目では語幹が1音節か2音節以上かによって、東西対立型の分布を示している。ただし、標準語形である *si-da* は西側地域のみではなく、慶尚南道と江原道東海岸地域を中心として、東側地域にも浸透していることが見て取れる。

次に、語形変化の方向性について考える。文献上に現れる最も古い語形は *식다*, *식다* であり、各地に現れる語形はこれらの語根である  $\sqrt{sai}$ -,  $\sqrt{sii}$ -を起点として考えることが出来る。(1a)のタイプは文献で現れて語形から、二重母音の単母音への変化を経たものであることは容易に想定できる( $sai-da > sii-da > si-da$ )。また、*so-da* については一見、中期語形から想定できない形であるが、崔鶴根(1978: 1226-1227)で *스다* が全羅南道で確認されていることから、 $sii > si$  の変化を経て、*i* と *o* の混同が起こった(隣接する慶尚南道地域の影響を受けた)ためにこのような語形が現れたと推測される。

以下の語形は全て  $\sqrt{sai}$ -または  $\sqrt{sii}$ -に接尾辞が結合したことにより成立したと考えられる。(2)のタイプは元々、 $\sqrt{sai}$ -/ $\sqrt{sii}$ -に接尾辞 *-kul* が添加されたものにさらに接尾辞 *-ɔp* が結合したものであると推定される。ただし、 $i > u$  の変化を経たと推定すれば、接尾辞 *-kul* は *-kil* に遡ると考えられる。即ち、このタイプで最も古い形は *si-gi-rɔp-ta* であると考えられる。また、(2a)のうち、*si-gɔ-rɔp-ta*, *si-gu-rɔp-ta* という語形は、それぞれ母音の逆行同化及び順行同化によるもの、(2b)の語形は  $\Lambda > \varepsilon$  によるものであり、(2c)で *e* が現れるのは、 $\varepsilon$  と *e* が接近していることにより、混同したものと考えられる。*se-gi-rap-ta* という語形については、第1音節の母音が陽母音であることからの類推で、母音調和が起こった形であると思われる。そう考えると、*se-gu-rap-ta* という語形の形成について説明が出来なくなるが、*se-gu-rɔp-ta* が使用される地域の隣接地域かつ *se-gi-rap-ta* の使用される地域にも近いことから、混交によって形成されたと推測できる。なお、*se-gi-rup-ta* については説明が難しいが、これも *se-gu-rɔp-ta* から第3音節の母音の順行同化( $o > u$ )と *si-gi-rɔp-ta* との混交によるものと推定できるだろう。

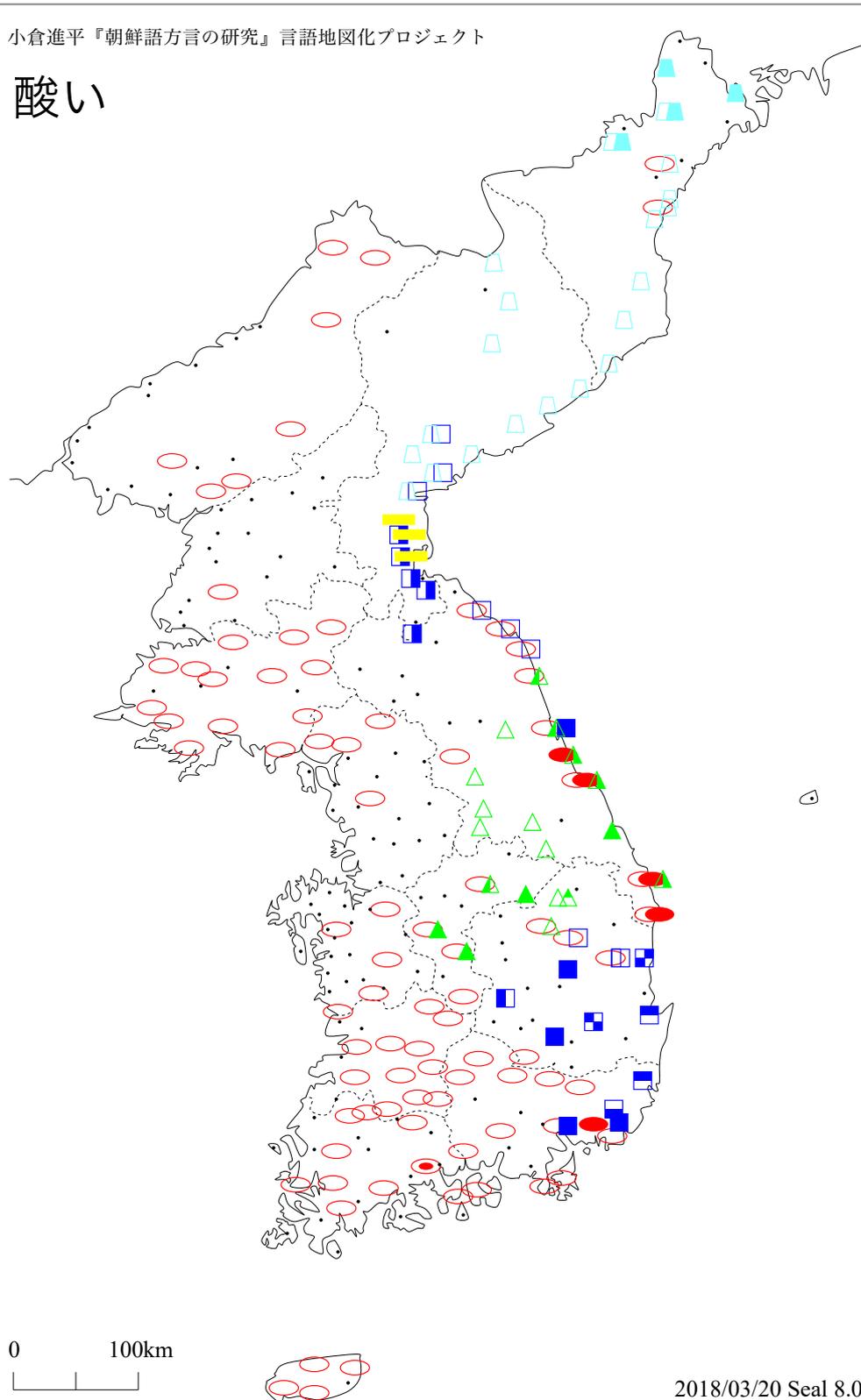
(3)のタイプについては、語幹の第3音節の母音 *ɔ* が第2音節の母音 *u* に同化し、*r* の脱落を経て縮約することにより生じたと考えられる<sup>2</sup>。また、*si-gɔp-ta*, <sup>ʔ</sup>*si-gɔp-ta* については *si-gɔ-rɔp-ta* からの変化として説明できる。

第2音節末に *l* 音が現れる(5)の *si-gul-da* は接尾辞 *-kul* の後ろに *-ɔp* が結合しないで成立したものであると考えられる。前述の通り、中国琿春市で *si-k<sup>h</sup>ul-da* という語形が観察されていることから、咸鏡北道でも古くから(5)のタイプが用いられていたことが推測される。そして、(5)のタイプから第2音節の *l* が脱落して成立したものが(4)のタイプであると考えられる。つまり、半島東部では咸鏡南道定平~文川を境界として、*-ɔp* が後続するタイプ((2), (3))とそうでないタイプ((4), (5))が対立して分布していることがわかる。

<sup>2</sup> (3)のタイプの語形については、 $\sqrt{sai}$ -/ $\sqrt{sii}$ -に接尾辞 *-gup* が結合したことにより成立したとする説も考えられ、金亨奎(1974)ではこのような立場を取っている。



酸い





## 眠い (ねむい)

徐 旻 廷

### 1 はじめに

『朝鮮語方言の研究』には「形容詞」類の中の「眠い」という項目で18種の語形が記録されている(上:355)。「眠い」に当たる韓国語の標準語는 졸리다であるが、『標準国語大辞典』によると, 졸리다は動詞(意味: 자고 싶은 느낌이 들다)と、形容詞(意味: 자고 싶은 느낌이 있다)の2つ品詞として分類される。

### 2 語形の分類

『朝鮮語方言の研究』の下巻研究編(下:83-85)で tʃa-o-rop-ta 「眠い」についての解説があり, それによると「眠い」の語形には tʃam-i o-da 系と tʃol-li-da 系, tʃa-o-rop-ta 系があり, 多くの語形が tʃa-o-rop-ta 系に属している。tʃa-o-rop-ta 系はさらに語中に -b- が入るか否かを基準に分類されている。『朝鮮語方言の研究』の後編研究編による「眠い」の語形の分類は以下の通りである:

- (1) tʃam-i o-da 系: tʃam-i o-da
- (2) tʃol-li-da 系: tʃol-li-da, tʃol-ljɔp-da
- (3) tʃa-o-rop-ta 系: (3a) tʃa-bu-rap-ta, tʃa-bu-rɔp-ta, tʃa-bu-rop-ta, tʃa-bu-rom-i o-da,  
tʃa-bi-rɔm-i o-da, tʃo-bu-rɔp-ta, tʃo-bil-li-da,  
(3b) tʃa-u-rɔp-ta, tʃa-go-dzap-ta, tʃo-rap-ta, tʃo-rɔp-ta, tʃo-rjɔp-ta, tʃo-ru-da

しかし, 上巻資料編には語形 tʃa-o-rop-ta が見当たらず, 語形 tʃo-rap-ta, tʃo-rɔp-ta, tʃo-rjɔp-ta は tʃol-li-da 系の tʃol-ljɔp-da と第1音節の母音, 第2音節の初声と終声など, 類似した形を見せているため同系と分類できると考えられる。また, tʃam-i o-da 以外に tʃa-bu-rom-i o-da, tʃa-bi-rɔm-i o-da も動詞 o-da が付いている特徴が類似している。さらに「眠い」の語形は第1音節の母音が a であるか, o であるかによっても二分することができる。ここでは, 後編研究編を参考し, 語中に b が含まれているか否かによっても二分し, 語形によって細分することにする。語形を再分類すると, 以下のようになる:

- (1) 語中に b が含まれていない語形
  - (1a) tʃol-li-da, tʃol-ljɔp-da, tʃo-rap-ta, tʃo-rɔp-ta, tʃo-rjɔp-ta, tʃo-ru-da
  - (1b) tʃa-u-rɔp-ta, (1c) tʃam-i o-da, (1d) tʃa-go-dzap-ta

## (2)語中に b が含まれている語形

- (2a) tʃa-bu-rap-ta, tʃa-bu-rɔp-ta, tʃa-bu-rop-ta, tʃa-bi-rɔp-ta,  
tʃo-bu-rɔp-ta, tʃo-bi-rap-ta, tʃo-bil-li-ta,  
(2b) tʃa-bu-rom-i o-da, tʃa-bi-rɔm-i o-da

語中に b が含まれていない語形の中, (1a)の語形は全て第 1 音節の母音が o で始まる 3 音節語で, 第 2 音節の初声が r である特徴がある。また, tʃol-ljɔp-da, tʃo-rap-ta, tʃo-rɔp-ta, tʃo-rjɔp-ta は第 2 音節の終声に p があり, (2a)の多くの語形の第 3 音節と類似した特徴がある。(1b), (1c), (1d)の語形は第 1 音節の母音が a で始まることは共通しているが, (1b) tʃa-u-rɔp-ta は(2a) tʃa-bu-rɔp-ta から第 2 音節の b が脱落した形で, tʃa-bu-rɔp-ta と類似している。また(1c)の tʃam-i o-da 動詞 oda が付いているため, (2b)の語形と類型している。(1d) tʃa-go-dzap-ta のみは他の語形と異なる構成を成している。

(2)語中に b が含まれている語形には, 動詞 oda が付いていない語形(2a)と, 付いている語形(2b)がある。(2a)の語形は全て 4 音節語であり, tʃo-bil-li-da 以外の語形の第 3 音節は rɔp/rap/rop のように母音のバリエーションを見せているが, 初声 r と終声 p は同じである。さらに(2a)の語形は第 1 音節の母音が a で始まる語形と o で始まる語形に分けられる。(2b)の語形は動詞 oda が付いているという点で, 上述のごとく, (1c)と特徴が類似している。

## 3 その他の語形

『咸北方言辞典』(1986)によると자브럼이오다가城津, 鐘城, 茂山に見られる。また, 『韓国方言資料集(忠清北道編)』には자올리다가, 『韓国方言資料集(全羅北道編)』には졸루다, 조올리다のような語形も見られる。いずれも第 2 音節に b を含んでいない語形である。

## 4 地理的分布

(1)の語中に b が含まれていない語形は朝鮮半島の南西部, 中部, 北西部にかけて分布している。(1)の語形の中で最も広い分布を見せている語形は, (1a)の tʃol-li-da であり, 全羅道の一部と忠清道, 京畿道, 江原道, 黄海道, 平安道に分布している。tʃol-li-da 以外に(1a)の tʃol-ljɔp-da は京畿道, tʃo-rap-ta は済州, 全羅南道, 江原道に, tʃo-rɔp-ta に分布し, tʃo-rɔp-ta, tʃo-rjɔp-ta, tʃo-ru-da は各々忠北, 江原, 全北の一か所に分布している。(1b) tʃa-u-rɔp-ta は東海岸の江原道に分布し, 動詞 oda が付いている tʃam-i o-da は全羅道と慶尚南道に分布している。(1d) tʃa-go-dzap-ta は全羅南道の一か所で見られる。

(2)語中に b が含まれている語形は主に朝鮮半島の東南部と東北部を中心に分布している。(2a)の tʃa-bu-rap-ta は慶尚北道と咸鏡道に, tʃa-bu-rɔp-ta は慶尚道と江原道, また咸北の一か所に, tʃa-bu-rop-ta は咸鏡南道に, tʃa-bi-rɔp-ta は慶尚道及び江原道の一部に分布している。第 1 音節の母音が o である tʃo-bu-rɔp-ta, tʃo-bi-rap-ta, tʃo-bil-li-ta は各々江原道, 忠北の一か所

ずつに分布しているが、これらの地域は(1a)の tʃo-rap-ta, tʃo-rɔp-ta の分布地域に隣接している地域である。動詞 oda が付いている語形(2b)の tʃa-bu-rom-i o-da は慶尚南道の一か所, tʃa-bi-rɔm-i o-da は慶尚南道の二か所に分布しているが、(1c) tʃam-i o-da の分布と共に、動詞 oda が付いている語形は南西部に分布していることが分かる。

このように、語中の b の有無を基準に語形の分布を見ると、(2)語中に b が含まれている語形は朝鮮半島の東南部と東北部を中心に分布し、(1)語中に b が含まれていない語形はその周辺の南西部、中部、北西部にかけて分布していることから、‘圏論的な分布’を成していると言えよう。

## 5 文献上の記録

『朝鮮語方言の研究』の後編研究編では、tʃol-li-da は즈올리다の縮約形であると解釈している。즈올-の現代韓国語の標準語는졸다(意味：居眠りする)であり、[-li-]は‘用言の相を変化するに用いられる[i]の変化したもの’と説明している。즈올-の文献上の記録には以下のような例がある：

즈올 時節엔 <1465 円覚経諺解 上 1:2>  
문 미퇴셔 즈오눗다 <1481 杜詩諺解 15:40>  
困곤하면 즈오눗다 <1482 金剛経三家解 3:10b>

しかし、tʃol-li-da に当たる記録は見当たらないため、この語形がいつから使われるようになったのかは定かではない。また(2a) tʃa-bu-rap-ta 等の語形に当たる記録も見当たらなかった。

動詞 oda が付いている(1c) tʃam-i o-da の名詞 tʃam の古い語形は ʃum であり、動詞 o-da が付いて「眠い」を表す記録は 15 世紀の文献でみられる：

밥 오나든 입 버리고 즈오나든 눈 모모매 니르리 <1482 金剛経三家解 20>

但し、同じく動詞 oda が付いている(2b) tʃa-bu-rom-i oda, tʃa-bi-rɔm-i o-da に当たる記録は見当たらなかった。

## 6 考察

『朝鮮語方言の研究』の後編研究編の解釈によると、tʃol-li-da は즈올리다の縮約形であるが、文献上の記録には즈올리다는見当たらず、즈올다のみが確認できる。文献上の記録に즈올리다가ないことから、즈올다はおそらく즈올다>졸다の変化を経た後、-리-が結合し、tʃol-li-da になったと考えるのが妥当だと考えられる。

ところで語形の分布を見ると、語中に b が含まれている語形は慶尚道と咸鏡道に、語中

に b が含まれていない語形はその周辺の地域に分布しているが、この分布は中期朝鮮語の ㅁ に対応する方言形の地理的な分布、即ち ㅁ が殆どの地域では w に対応して現れるのに対し、慶尚道と咸鏡道では ㅁ に対応して現れることに類似している。このことから ㅁ 古形として第 2 音節に ㅁ が含まれている語形を想定することができる。ㅁ の由来に関しては色々な議論があり、李崇寧(1958)などでは母音間で \*ㅁ > ㅁ の変化を経て生じたと見ているのに対し、李基文(1972)では ㅁ は \*ㅁ から由来したのではなく、本来 ㅁ と ㅁ の対立があったとしている。李基文(1972)では、中期語の ㅁ が他の地域では w に対応して現れるが、東南地方では ㅁ に対応して現れることから、他の地域では ㅁ と ㅁ の対立があったが、方言形で ㅁ として現れる地方では ㅁ がなかったとみている。これに対し、崔明玉(1978)では、東南方言でも ㅁ と ㅁ の対立が存在し、殆どの地域で ㅁ > w の変化が起きたが、この方言では ㅁ > ㅁ の変化が起こり、ㅁ が ㅁ に合流したとしている。

성은실(2013)は『韓国方言資料集』の方言資料を用いて, 졸다(居眠る), 졸음(眠気), 졸리다(眠い)の方言分布の様相を論じた論考であるが、この論考でも ㅁ 古形として \*ㅁ ㅁ ㅁ を再構し, \*ㅁ ㅁ ㅁ > ㅁ ㅁ ㅁ > ㅁ ㅁ ㅁ の変化が起きたとしている。さらに성은실(2013)は崔明玉(1978)の論議に従い、東南方言でも ㅁ と ㅁ の対立が存在したとし、ㅁ が方言によって異なる変化、即ち語中に b が含まれていない方言形は \*ㅁ ㅁ ㅁ > ㅁ ㅁ ㅁ / ㅁ ㅁ ㅁ > ㅁ ㅁ ㅁ のような変化を、語中に b が含まれている方言形は \*ㅁ ㅁ ㅁ > \*ㅁ ㅁ ㅁ > \*ㅁ ㅁ ㅁ > 자ㅁ ㅁ ㅁ のような変化を経たとしている。성은실(2013)によると、자ㅁ ㅁ ㅁ は『韓国方言資料集』で ㅁ ㅁ ㅁ の方言形として主に慶尚道で見られる。この変化に従うと、語中に b が含まれていない語形の殆どの第 1 音節の母音が o であること、また語中に b が含まれている語形の殆どの第 1 音節の母音が a であることも、語中の ㅁ の変化によるものと説明できるだろう。

上述ごとく、(1a)の tʃol-li-da は ㅁ ㅁ ㅁ > ㅁ ㅁ ㅁ の変化後、-리-が結合した語形だと考えられるが、(1a)tʃo-rap-ta, tʃo-rɔp-ta のように第 2 音節の終声に p がある語形は ㅁ ㅁ ㅁ の後ろに -ㅁ / ㅁ / ㅁ - のような異なる接尾辞が付いたように見える。但し、-리-と共に -ㅁ / ㅁ / ㅁ - の意味に関しては不明である。さらに(1a)の tʃol-ljɔp-da, tʃo-rjɔp-ta は tʃol-li-da の後ろに -ㅁ - が付いて形成されたことが考えられ、また(2a)の語形 ㅁ ㅁ ㅁ の語形 tʃa-bu-rɔp-ta, tʃa-bu-rɔp-ta, tʃa-bi-rɔp-ta, tʃo-bu-rɔp-ta, tʃo-bi-rap-ta, tʃo-bil-li-ta も -ㅁ / ㅁ / ㅁ - が付いた形だと考えられる。(2a)の語形の中で、忠北の一か所で見られる(2a) tʃo-bil-li-ta のみは 자ㅁ ㅁ ㅁ の後ろに -리- が結合した後、母音が a > o のように変化したと考えられる。このように、(1a), (1b), (2b)の語形は‘居眠る’を意味する動詞に接尾辞-리-或いは-ㅁ / ㅁ / ㅁ - が付いて形成されたと考えられ、他の語形は(1d)を除くと、動詞 oda が付いた語形であるため、語形成の側面からも語形を分類することもできる。接尾辞-ㅁ / ㅁ / ㅁ - が付いたと考えられる語形の数がより多く、また -리- が付いた語形よりより広い地域に分布している。接尾辞-ㅁ / ㅁ / ㅁ - が付いた語形は、主に朝鮮半島の東部に、-리- が付いた語形は西部に分布しており、接尾辞の分布から見ると、東西型分布を成しているとも言えよう。

以上の内容を考慮し、接尾辞が付いた語形の変化過程をまとめると、次のようになる：

\*즈불다>즈올다>졸다>졸리다>졸럽다>조럽다  
> 조랍다/조럽다

> \*즈불다> \*즈불다 >자불다>자부럽다/자부럽다/자부롭다/자르럽다>조부럽다/  
조브랍다  
>자우럽다

>\*자블리다 > 조블리다

動詞 oda が付いている語形には(1c) tʃam-i o-da と(2b) tʃa-bu-rom-i o-da, tʃa-bi-ròm-i o-da  
があり, 同様の構成を成していることから, tʃa-bu-rom と tʃa-bu-ròm は名詞 tʃam の方言形で  
あることが考えられる。しかし성은실(2013)によると, 『韓国方言資料集』の方言資料には  
名詞졸음の方言形として, 자부름, 자부림, 자부럼, 자부렘, 자부람, 자오름, 자우름などが  
ある。성은실(2013)は졸음の古形は 15 世紀の文献で確認できる즈오름であり, 즈오름は즈  
올다から形成されたことから, tʃa-bu-rom と tʃa-bu-ròm の古形として, \*즈불다からの\*즈브  
름を再構している。

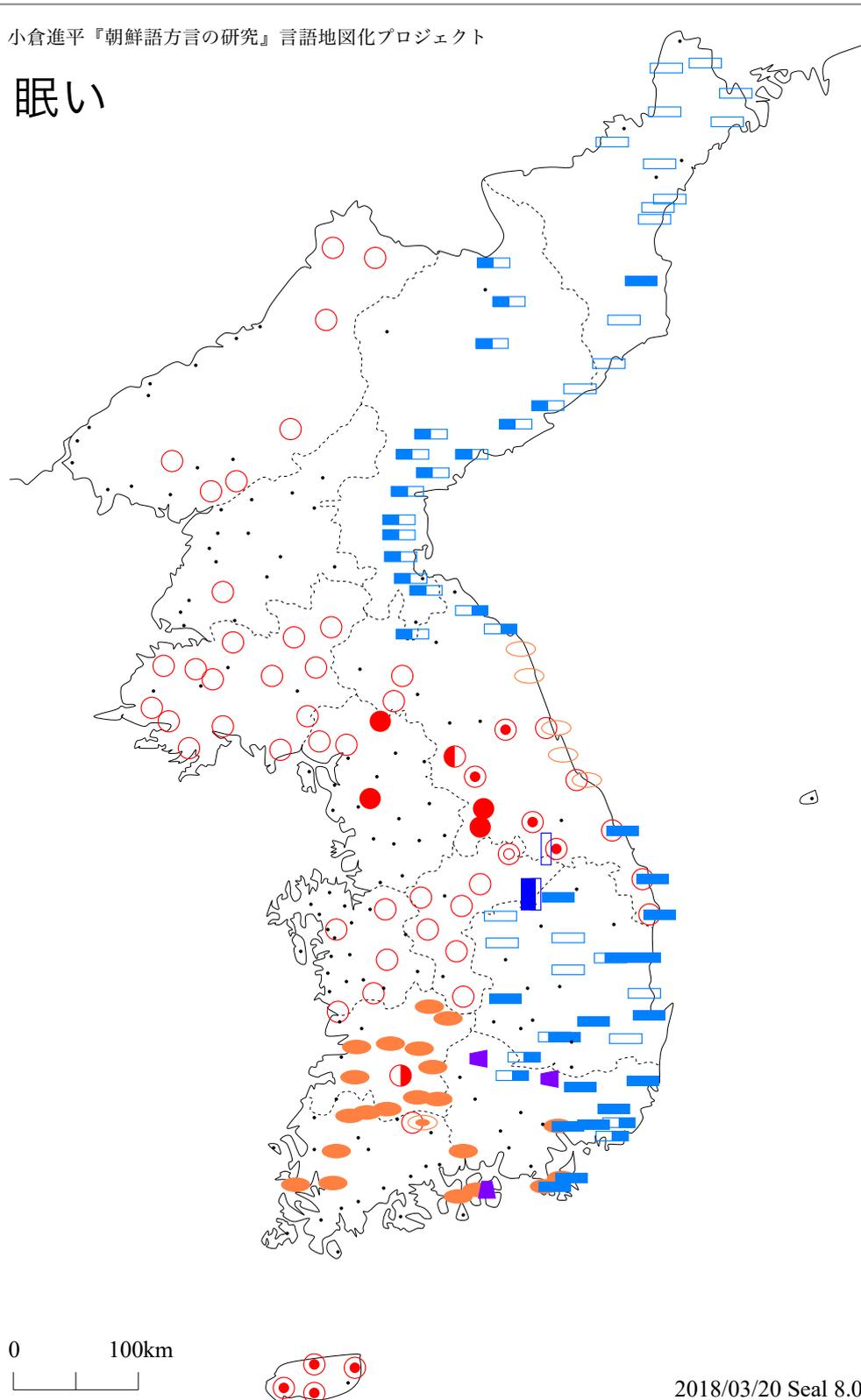
즈올다가 15 世紀の文献上で見られる点, また즈오름も 15 世紀の文献で確認できる点、さ  
らに tʃam-i o-da に当たる記録も 15 世紀の記録に見られる点から, tʃa-bu-rom-i o-da/tʃa-bi-ròm-  
i o-da のような表現も tʃol-li-da に当たる記録がまた 15 世紀文献に見られることから, 動  
詞 oda が付いた語形も古い時期から使われたと推定できる。但し, 方言形として名詞졸음と  
動詞 oda が結合した表現はないことには疑問が残る。

なお, 『朝鮮語方言の研究』ではこれらの語形の実際の使用形について言及していない。  
しかし, tʃam-i o-da 及び tʃa-bu-rom-i o-da, tʃa-bi-ròm-i o-da の形で使われたとは考えにくい  
ため, 時制, あるいはアスペクトを表す語尾が付いた活用形が使われたと考えるのが妥当  
であろう。動詞の oda が付いた語形の活用形に関しても考察が必要である。

## 参考文献

- 国立国語研究院(1999) 『標準国語大辞典』ソウル：斗山東亜.  
金泰鈞編著(1986) 『咸北方言辞典』ソウル：京畿大学校出版局.  
李基文(1998) 『国語史概説』ソウル：太学社.  
劉昌惇(1964) 『李朝語辞典』ソウル：延世大学校出版部.  
성은실(2013) 「‘졸다’, ‘졸음’, ‘졸리다’의 방언 분화」, 『방언학』 18: 265-286, 방언학회.  
최명옥(1978) 「‘빙, △’와 동남방언」, 『어학연구』 14-2: 185-194, 서울대학교 어학연구소.  
최명옥(1982) 『월성지역어의 음운론』 大邱：영남대 출판부.  
韓国精神文化研究院編(1987) 『韓国方言資料集(忠清北道編)』ソウル：韓国精神文化研究院.  
韓国精神文化研究院編(1987) 『韓国方言資料集(全羅北道編)』ソウル：韓国精神文化研究院.

眠い



- tʃol-li-da
- tʃol-ljɔp-ta
- ◉ tʃo-rap-ta
- ◎ tʃo-rɔp-ta
- ◐ tʃo-rjɔp-ta
- ◑ tʃo-ru-da
- tʃa-u-rɔp-ta
- tʃam-i o-da
- ◉ tʃa-go-dʒap-ta
- ▭ tʃa-bu-rap-ta
- tʃa-bu-rɔp-ta
- ◻ tʃa-bu-rɔp-ta
- ◻ tʃa-bi-rɔp-ta
- ▭ tʃo-bu-rɔp-ta
- tʃo-bi-rap-ta
- ▭ tʃo-bil-li-da
- ▲ tʃa-bu-rom-i o-da
- ▼ tʃa-bi-rɔm-i o-da
- NR

## 誦んずる

岩井亮雄

### 1 はじめに

韓国の標準語は  $\emptyset$ -u- (외우-) と  $\emptyset$ - (외-) であるが、後者は前者の縮約形である。これにあたる語は『朝鮮語方言の研究』の「動詞」に「誦んずる」(そらんずる) という項目名で11種の語形が記録され(上: 377),  $\emptyset$ -u-系,  $\emptyset$ -系,  $\emptyset$ -a-系に分類できる。

#### (1) $\emptyset$ -u-系

$\emptyset$ -un-da / we-un-da / e-un-da /  $\varepsilon$ -un-da / i-un-da / o-un-da

#### (2) $\emptyset$ -系

$\emptyset$ n-da / wen-da / uin-da (=win-da)

#### (3) $\emptyset$ -a-系

e-an-da / ui-an-da (=wi-an-da)

(1)は  $\emptyset$ -u- とその第一音節のバリエーション, (2)は  $\emptyset$ - とそのバリエーション, (3)は  $\emptyset$ -a- とその第一音節のバリエーションである。uin-da と ui-an-da は, 小倉進平の転写の原則に従うとそれぞれ win-da と wi-an-da になる(下: 13-14)。

### 2 その他の語形

『増補 韓国方言辞典』(1990)では長母音や母音連続 o-i を含む語形が記録されるが、これは声調やアクセントに由来する。(1)の変種に we-u- (咸北), wi-u- (慶北),  $\emptyset$ -u:- (慶北), e-u:- (慶北),  $\varepsilon$ -u:- (全南), i-u:- (慶北)が, (2)の変種に o-i- (忠北・江原・平北),  $\varepsilon$ - (全南),  $\emptyset$ :- (全北・忠南・京畿・咸南), o:-i- (忠南),  $\varepsilon$ :- (全南), je:- (黄海)がある。このほか,  ${}^h$ ta-ru-ne- (咸南・咸北・平南・平北),  ${}^h$ ta-ru-n $\emptyset$ - (平北),  ${}^h$ ta-ri-u- (平北),  ${}^h$ te-u- (咸北)のように後部要素に  $\varepsilon$ -/ $\emptyset$ -/u- を含む語や, am-gi(暗記)-ha- (忠北・江原)のような語もある。

小倉進平の調査資料では空白地点の地域について補足すると, 『咸北方言辞典』(1986)には(1)の  $\emptyset$ -u- (외우-) やその変種の we-u- (외우-), (2)の変種の  $\emptyset$ :- (외:-) のほか,  $\emptyset$ -ga-ri-ne- (외가르내-), we-ga-ri-ne- (외가르내-) のように前部要素に  $\emptyset$ -/we- を含む語や, ho-ma:ŋ-ha- (허망:하-) などの語が見られる。『平北方言辞典』(1981)には o-i- (오이-) が見られる。

### 3 地理的分布

言語地図上では, (1)  $\emptyset$ -u-系が済州・慶南・慶北・江原に, (2)  $\emptyset$ -系が全南・全北・忠南・忠

北・京畿・黄海・咸南に、(3)  $\sigma$ -a系が慶南に分布する。(1)  $\sigma$ -u系では  $\sigma$  で始まる  $\sigma$ -un-da が黄海に分布し、 $\sigma$  以外で始まる語形(we-un-da / e-un-da /  $\varepsilon$ -un-da / i-un-da / o-un-da)が濟州・慶南・慶北に分布する。(2)  $\sigma$ -系では  $\sigma$ n-da が全南から咸南に分布し、wen-da / win-da が慶南・忠北に見られる。

小倉進平のデータで空白地点の咸北と平北について、前節で参照した方言資料によると、咸北では(1)と(2)の系統の語形が、平北では(2)の系統の語形が見られる。よって、こうした資料と小倉進平のデータを併せて考えるならば、(1)  $\sigma$ -u系が分布する地域を A、(2)  $\sigma$ -系が分布する地域を B とすると、地図上では ABA のように分布する。つまり、(1)  $\sigma$ -u系の方が(2)  $\sigma$ -系よりも古い語形であることを示唆する。これは次節で見る文献上の記録とも一致し、現代語の  $\sigma$ - が  $\sigma$ -u- の縮約形であることとも合致する。

#### 4 文献上の記録

後期中世語は‘외오-(LH)’であり、現代語に至るまで‘외오-’が見られる。

經을 닐거 외오며 <1447 積譜詳節 9:23b>

誦은 외올씨라 <1459 月印積譜 1: 序 23b>

외올 송(誦) <1527 訓蒙字會下 14a> <1576 新增類合下 8b> <1664 類合(七長寺)22b>

<1700 類合(靈長寺)22b> <1781 倭語類合上 37b>

외오다(誦) <1880 韓仏字典>

글 외오다(誦書) <1895 国漢會語 46>

近代語では‘외오-’という語形も見られる。

詩를 외오며 書를 넘어 <1737 女四書諺解 3:58a>

現代語になると、‘외우-’や‘외-’などが見られるようになる。

관원이 지스의 죄를 외야 니로되(吏唱再思罪云) <1852 太上感應篇圖說諺解 1:51a>

외우다(誦詩), 외올 송(誦) <1895 国漢會語 222>

외일 송(誦) <1897 韓英辭典>, 외일 송(誦) <192- 訓蒙排韻 14a>

외올 송(誦) <1917 通學徑編(行文速成通學徑編) 19b>

외아내다(背誦) <1880 韓仏字典 50>

#### 5 考察

文献上の記録や地理的分布の特徴から、語形変化は次のように推定できる。

외오- > 외우- > 외-  
외아-

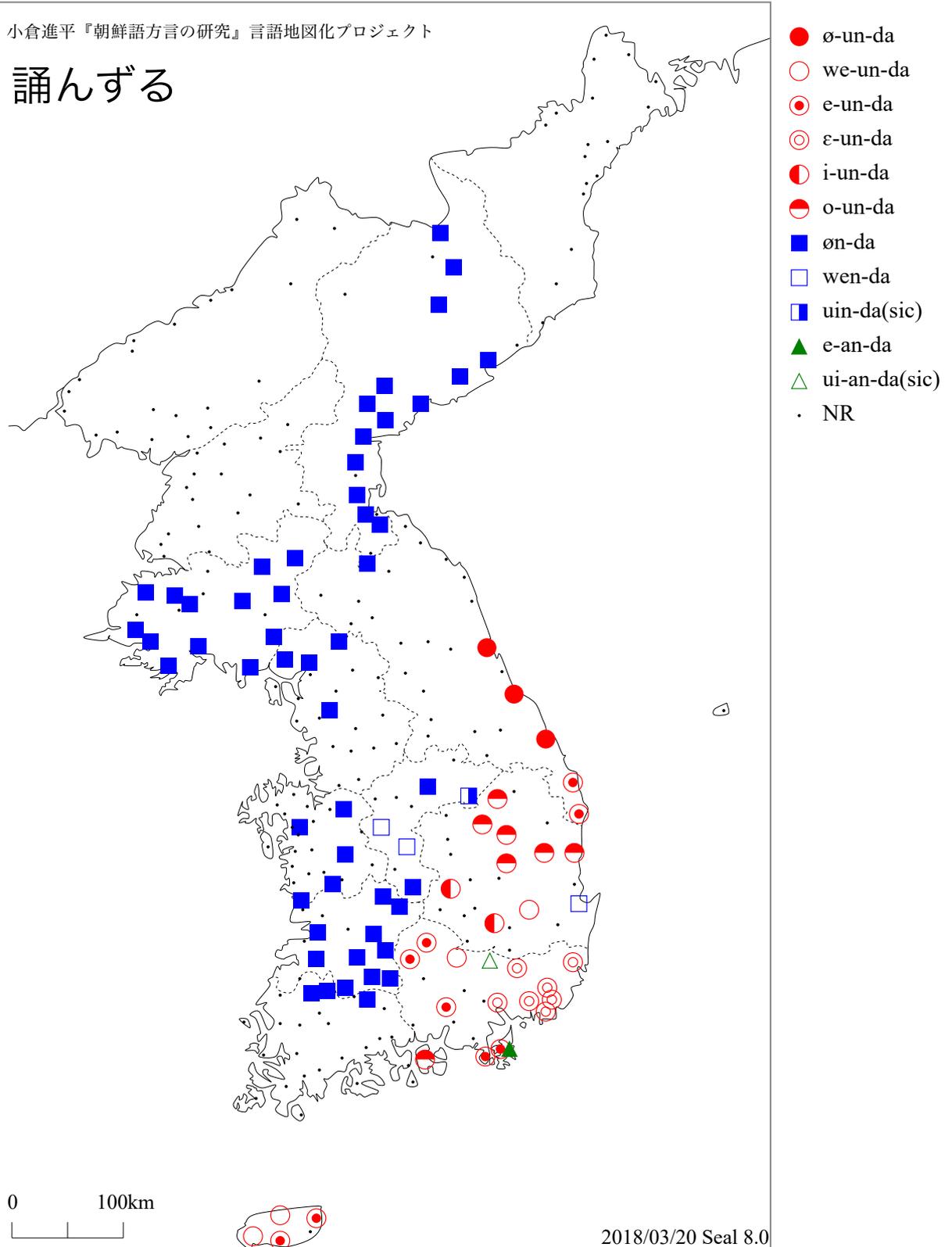
(o-i-o- > o-i-u- >) ø-un-da / we-un-da > e-un-da / ε-un-da / i-un-da ('외'の発音の変化)  
o-un-d (i 脱落)      øn-da / wen-da (u 脱落) > win-da (狭母音化)  
e-an-da / wi-an-da (u が a に変化)

中世語の‘외오(LH)-’は、使役の接辞‘-오/우-’による‘외(R)-’(誤)の派生語である(安秉禧・李珣鎬 1990: 132-133)。<sup>1</sup> ‘외오-’の当初の意味は「記憶」にあり、後に「暗誦」と「記憶」の両方の意味を持つようになった(李男徳 1985: 312)。たしかに現代語の‘외우-’および‘외-’は「暗唱する」と「暗記する」の両方の意味がある。また、上に示した語形変化の推定について補足すると、‘외오-’>‘외우-’は第二音節での母音の変化 (o>u) によるものであり、‘외우-’>‘외-’は縮約によるものである。「その他の語形」で見たように、‘외-’は長母音となる地域が見られるが、これは二音節語の‘외우-’が一音節語の‘외-’に縮約されたときに、その代償として長母音が現れているものと考えられる。なお、‘외아-’は小倉進平のデータでは ø-u-系の語形が分布する慶尚南道に見られるので、上記の語形変化の推定では u が a に変化して e-an-da, wi-an-da のような語形が現れたと見ているが、前節の現代語の用例 ‘외아내다’などからも推定できるように、活用形に由来する可能性も考えられる。

#### 参考文献

- 安秉禧・李珣鎬(1990) 『中世国語文法論』 ソウル：学研社。  
金泰均編著(1986) 『咸北方言辞典』 ソウル：京畿大学校出版局。  
金履浹編著(1981) 『平北方言辞典』 城南：韓国精神文化研究院。  
崔鶴根(1990) 『増補 韓国方言辞典』 ソウル：明文堂。  
李男徳(1985) 『韓国語語源研究Ⅱ—動詞語彙의語源—』 ソウル：梨花女子大学校出版部。

# 誦んずる



## 僅かに

福井玲

### 1 はじめに

小倉進平 (1944: 上 482-483) には「副詞」の中で「僅かに」という項目がとりあげられ、全部で 24 個の語形が掲載されている。それらは大きく分けて現代語の겨우に相当する語形と, 바닷이に関係すると思われる語形の 2 つに分けられる。

この項目は, 他の多くの項目の命名法からみて, 日本語の「僅かに」にあたる朝鮮語というより, 朝鮮語の겨우およびそれと同じ意味で用いられる他の語形が先にあつて, それにたまたま日本語の訳として「僅かに」を当てているものと思われる。

### 2 語形の分類

語形は大きく見れば kjo-u 系と pa-du:-si 系に分けられるが, kjo-u 系はさらに口蓋音化した tje-u 系に分けられる。tje-u 系の中には-gu が付いた語形があり, あとで述べるように語彙史の上ではこれが重要である。

#### (1) kjo-u 系

kjo-u, ke-u, ke-u

#### (2) tje-u 系

(2a) tje-u, tje-wa, tje-wa-ra, tje-u, tje-wa, tje-wa, tji-u, tji-ju

(2b) tje-gu, tje-go, tje:-gu-re, tje-gu, tje-gu-ro, tje-go

(2c) tje-u-si, tji-u-sa

#### (3) pa-du:-si 系

pa-du:-si, ?pa-du:-si, po-do:-si, ?po-do:-si, po-dop-si, po-ro-si

### 3 その他の語形

この項目については平安道と咸鏡北道のデータが抜けているが, 前者は『平北方言辞典』によれば次のような語形が見られる。

겨:우, 가우, 계우, 계우

また, 『咸北方言辞典』によれば, 咸鏡北道方言については次のような語形が見られる。

계:구, 계우, 겨우, 계:구, 계우, 자심히, 저우, 제우

#### 4 語形の地理的分布

(1) の kja-u 系は京畿道, 黄海道その他, 忠清道, 全羅道, 慶尚道といった南部地域でも見られる。また, 小倉進平のデータには含まれないが前節で見たように平安道, 咸鏡道でも見られる。

(2) の tje-u 系は咸鏡道, 江原道, 慶尚道, 忠清道, 全羅道, 濟州島に見られるが, これらか k の口蓋音化を起こす地域と一致する。なお, (2b) tje-gu のように第 2 音節の頭に軟口蓋閉鎖音が入る語形は, 咸鏡道と慶尚道に分かれて存在する。

(3) の pa-du:-si 系は忠清道, 全羅道, 慶尚南道に多く見られるほか, 慶尚北道の南部にも若干見られる。ただし, 多くの地点で(1)や(2)と併用されており, 意味の違いがあるものと思われる。

#### 5 過去の文献上の記録

中世語から近代語にかけて, 겨요, 겨우, 겨유, 계오, 계요, 계우, 계유, 계우, 계유 など多くの形が見られる。15 世紀にはまだこれらの語形を見出していないが, 16 世紀初頭の資料に見られる 계우, 계오, 계요が比較的早い用例である。

어디 날굽 발 츄노 계우 날굽 발 날브다 <1517 翻譯老乞大下 29a>

다섯 사르미 계우 안갓논 거셔 <1517 翻譯朴通詞 41b>

아비 누의 숨겨 내여 계우 사라나니라 <1518 二倫行実図玉山書院本 19a>

纔 계우 즈 僅 계우 근 <類合下 22b>

면화를 구터니마는 계오 어든 거슬 하 모다 뜯드니 <15-- 順天金氏諺簡 7:1>

치위 등 슬혀 계오 왓거닐 <15-- 順天金氏諺簡 31:2>

대텅 알피 계요 들 도로험을 용납홀 만히더니 <1588 小学諺解 6:127a>

このうち, 『順天金氏諺簡』には, 계오の用例が数多く見られ, この単語が主に口語的な資料の中で多く用いられていたことがわかる。

第 1 音節が겨となる겨요, 겨우, 겨유のような現代語に近い語形は 17 世紀以降に見られる。

次に, pa-du:-si 系の語形は用例は少ないが, 次の『火砲式諺解』に見られるㅂ드시がこれに相当すると考えられる。ㅂ드시의他にㅂ듯게としても現われることから, これはㅂ듯히- (現代語마듯하다) と関係のある語形と考えられる。

每子애 각각 브리에 브드시 들 鋤子 ㅎ 낫출 쓰느니라 <1635 火砲式諺解 10b>

檄木으란 二年木으로 쓰되 통 굽게 브듯게 ㅎ고 <1635 火砲式諺解 1b>

小倉進平の集めたこの語形の中に pa で始まるものと po で始まるものの2種類が見られるのは、母音の反映と考えれば, mar > mar / mor (馬) の例と並行的に、一部の方言で両唇音のあとで母音・が o で現れることが説明できる。

## 6 考察

小倉進平のデータの中で慶尚道・咸鏡南道に見られる(2b) tʃe-gu 系と、『咸北方言辞典』において咸鏡北道に見られる 계:구, 계:구などの形はたいへん興味深い<sup>1</sup>。この形は文献上は見られないが、地理的分布と、中世語の中で最も古い語形계우を合わせて考えてみると、考えられる最も古い祖型は\*계구で、中世語の語形はそれから二重母音後半部の i のあとで k が脱落したものと考えられる。

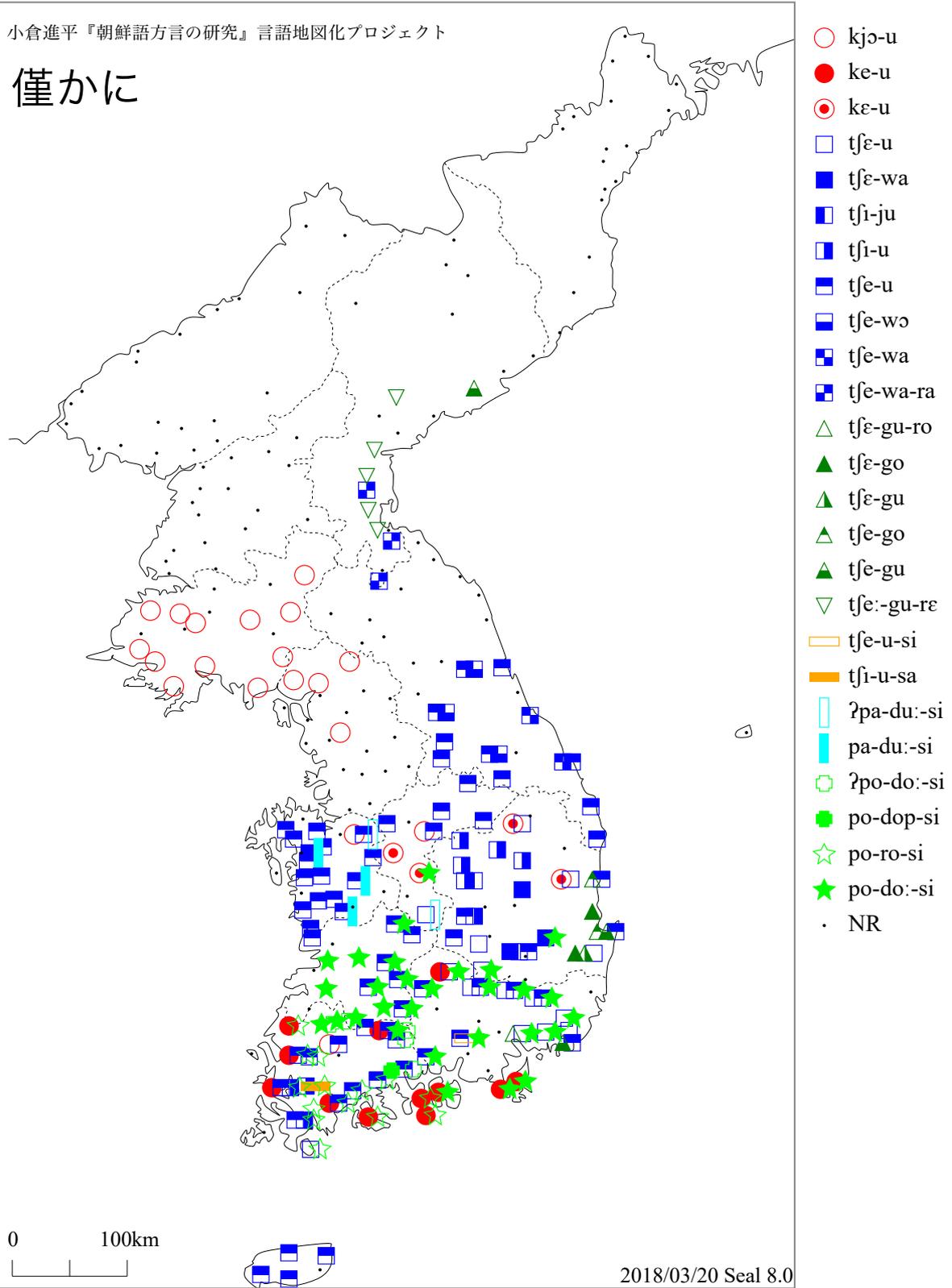
## 参考文献

- 金履浹編著 (1981) 『平北方言辞典』城南：韓国精神文化研究院。  
金泰均編著 (1986) 『咸北方言辞典』ソウル：京畿大学校出版局。  
玄平孝 (1962, 修正版 1985) 『济州島方言研究』(資料篇・論考篇) ソウル：二友出版社。

---

<sup>1</sup> 계:구などの語形は現代の延辺朝鮮族話者にも見られる。大学院生諸氏(許秦, 梁紅梅, 朴美花)のご教示による。

# 僅かに



- kjɔ-u
- ke-u
- ◉ kɛ-u
- tʃɛ-u
- tʃɛ-wa
- ▣ tʃi-ju
- ▤ tʃi-u
- ▥ tʃe-u
- ▧ tʃe-wə
- ▨ tʃe-wa
- ▩ tʃe-wa-ra
- △ tʃɛ-gu-ro
- ▲ tʃɛ-go
- ▴ tʃɛ-gu
- ▵ tʃe-go
- ▾ tʃe-gu
- ▽ tʃe:-gu-re
- ▭ tʃe-u-si
- ▮ tʃi-u-sa
- ▯ ?pa-du:-si
- ▰ pa-du:-si
- ▱ ?po-do:-si
- ▲ po-dop-si
- △ po-ro-si
- ▴ po-do:-si
- NR

## 却って\*

朴美花・福井玲

### 1 はじめに

小倉進平 (1944: 上 483-484) には「副詞」類の中で「却って」という項目名で 27 個の語形が記録されている。これらには現代語の‘오히려’, ‘도리어’ と語源的につながりのある語形とそうでない語形が入り混じっている。但し, 平安道と咸鏡北道のデータが記録されていないため, 他の資料から補う必要がある。

### 2 語形の分類

大きく (1) o-i-rjɔ 系, (2) to-ri-hjɔ 系, (3) tɔp-tui 系, (4) ta-bu 系, (5) tɔp-si 系に分けられる。標準語の‘오히려’と‘도리어’はそのままの形ではどこにも見られない。これらに近い語形は, ‘오히려’は (1), ‘도리어’は(2)のグループに近い。(3), (4), (5)は語中に破裂音の p を含む形を基本とし, (3) は -pt- という子音連続, (4) は母音間に -b-, (5) は -ps- という子音連続を含むという特徴をもつ。

(1) o-i-rjɔ 系 o-i-rjɔ, ɔ-rjɔ

(2) to-ri-hjɔ 系

(2a) to-ri-hjɔ, to-ri-jɔ, to-ri, twe-ri

(2b) to-ro-hjɔ, to-ro-jɔ, to-ro-hi, to-ru-hjɔ

(2c) to-ro, to-ri, tɔ-ro, tɔ-ru tɔ-rjɔ, tɔ-rja, twe-ro, twe-ri, te-rjɔ

(3) tɔp-tui 系 tɔp-tui, tɔp-te, tɔep-ta, tɔet-te, tep-te, tet-te

(4) ta-bu 系 tabu, tɔ-bi

(5) tɔp-si 系 tɔp-sɛ, tɔp-si

なお, (3) の中の tɔp-tui は小倉進平の表記の原則に従えば正しくは tɔp-twi, tɔep-ta と tɔet-te はそれぞれ tɔep-ta, tɔet-te と表記されるべきものである。

### 3 その他の語形

金泰均編著 (1986)『咸北方言辞典』によれば, 도리어にあたる語形として次のような形が記録されている。

---

\* 本稿は, 共著者の一人朴美花による授業中の発表に基づき, それに福井が加筆修正を加えたものである。

도루 (鍾城), 도리어 (城津, 明川, 富寧), 도부 (慶源), 되려 (吉州, 鏡城, 會寧),  
되비 (鍾城, 會寧), 오히려 (慶城, 慶源)

このうち되비는小倉進平の *tə-bi* と同じ語形と考えられるが, 도부는小倉進平の資料には記録されていない。

平安道については, 金履浹編著 (1981) 『平北方言辞典』によれば, 도리어, 오이려, 오리레といった語形が見られる。

#### 4 語形の地理的分布

(1) の *o-i-tjo* と *ø-tjo* は京畿道で使われ, それぞれ京城, 漣川の1地点でのみ見られる。

(2) の *to-ri-hjo* 系は全羅南道, 慶尚道, 忠清道, 江原道, 黄海道にかけて広く分布している。

(3) の *təp-tui* 系は全羅道, 忠清道を中心として分布しつつ, その周辺の慶尚南道, 咸鏡道にも見られる。

(4) の *ta-bu* は慶尚道と咸鏡南道に見られる。

(5) の *təp-si* 系は, 全羅北道と, 全羅北道に接する忠清南道の舒川でそれぞれ1地点のみ見られる。

#### 5 過去の文献上の記録

現代語の ‘오히려’ は15世紀の文献である『積譜詳節』で用例が確認され, それ以降現代まで使われている。(1) の *o-i-tjo* は, その第1音節の子音 *ㅈ* が落ちたものである。この他に, ‘외히려’, ‘오힐여’ のような変種が見られる。

이 經功德을 닐오디 오히려 몬 다 니르노라 <1447 積譜詳節 19:42b>

釋迦도 외히려 아디 몬히시곤 <1569 禪家龜鑑 1a>

부모 상스를 마츠디 오힐여 소히고 흰옷 님고 <1617 東国新統三綱行実図 孝子図 8:74b>

現代語の ‘도리어’ に対応する語形は15世紀の文献で ‘도르혀’ という語形で記録されているが, *ㅎ* が廃止されてから ‘도르혀’ の語形で使われる。第2音節の母音が第1音節の母音の *ㅈ* の影響で *ㅊ* に変化し ‘도르혀’ としても使われる。これはさらに *ㅎ* の脱落により19世紀には ‘도르여’ で現れるが, その一方で, 第2音節の母音 *ㅈ* が *ㅊ* に変化した ‘도리여’ の形も18世紀に1例が現れたのち, 19世紀以降に多く現れるようになる。

이제 도르혀 님미 어시 아드를 여희에 히시니 <1447 積譜詳節 6:5b>

도르혀 世間을 본던 夢中엿 일 끝다 히시니 <1465 円覚經諺解上 2-2:57a>

四時와 八節에 도로혀 禮예 걸위여 <1481 杜詩諺解 8:28a >

외혀는 비 착지 안니혀야도 도로여 좃지 안니혀믈 한혀고 <1880 三聖訓經 24a>

세존하 내 도리여 와 여릭 디장보살 위신 세력 불가스의을 찬탄커시닐 <1752 重刊地  
藏經諺解 下 22a>

그 심명을 구완코져 혀는 자는 도리여 망혀고 나를 위혀여 심명을 망혀 자는 구완혀  
리라 <1887 예수성교전서 2230>

## 6 考察

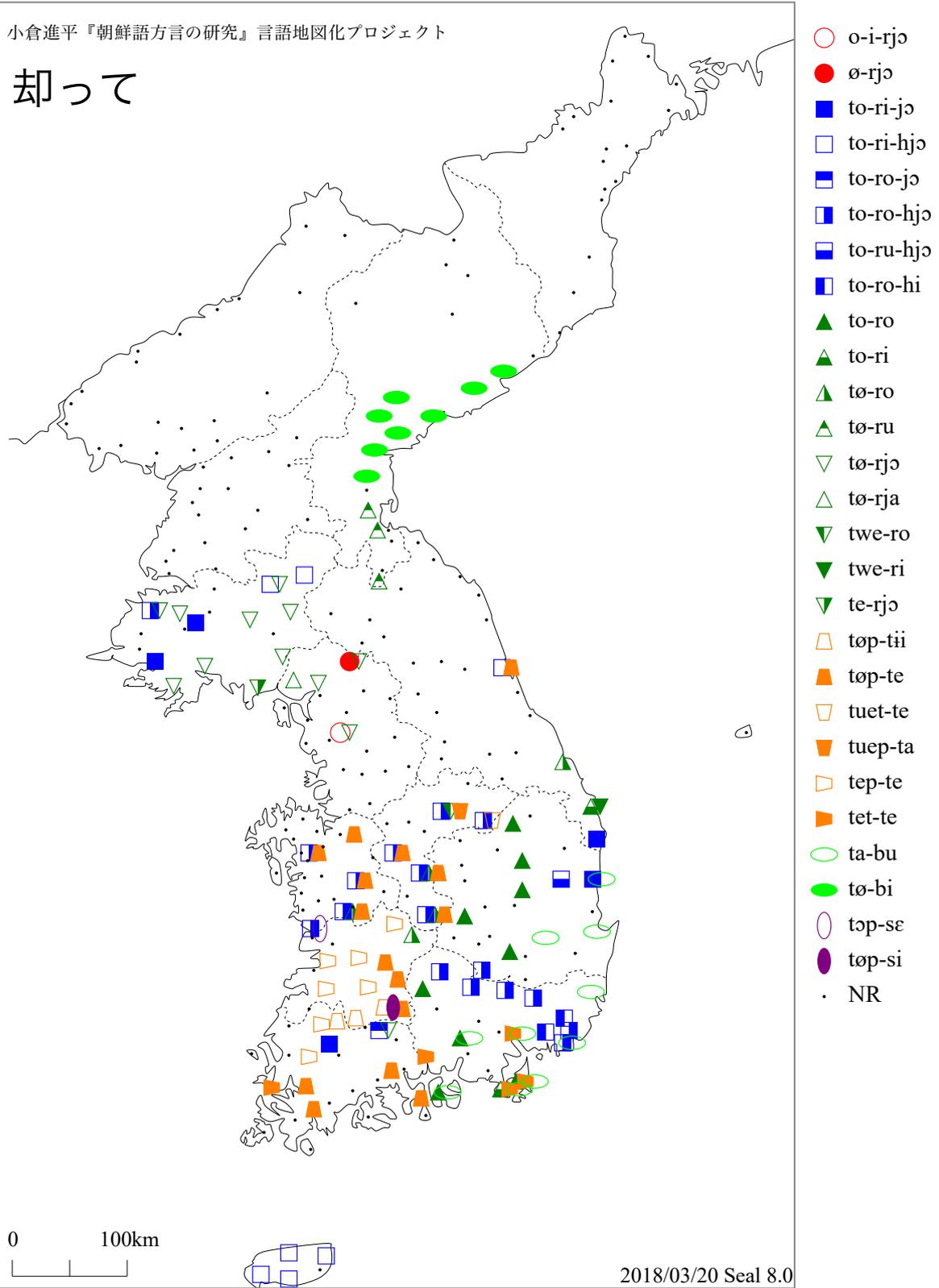
(1) の o-i-rjo 系と (2) の to-ri-hjo 系はそれぞれ文献上記録も古くから見られ, またそれに近い形が今日でも使われている。(2) の to-ri-hjo 系は動詞語幹 tor- (廻, 還) からの派生形であるが, これに対して, (3)~(5) の語形は何に由来するのか不明である。語頭音節の形は (2) に近いが, なぜ語中に -p- などが入るかが説明しにくい。(2)とはまったく関係ない語源を持つ可能性もあるが, あるいは, かつて \*torp- のような語幹が存在し, (2)では p が消失し, (3)~(5)では r が消失したのかもしれない。

## 参考文献

金履浹編著 (1981) 『平北方言辞典』城南: 韓国精神文化研究院.

金泰均編著 (1986) 『咸北方言辞典』ソウル: 京畿大学校出版局.

# 却って



## 速かに

福井玲

### 1はじめに

小倉進平(1944: 上487-488)では「副詞」類の中で「速かに」という項目名で23の語形が記録されている。この中には現在の標準語の빨리, 어서, 얼른などが入り混じっており, これらは意味・用法の面で近似しているが, 同義語というわけではないので, 使い分けに関して問題点がある。『標準国語大辞典』によれば, これらの意味は次のように記述されている(括弧内に筆者の訳文を添える)。

빨리: 걸리는 시간이 짧게. (かかる時間が短く)

어서: (1) 일이나 행동을 지체 없이 빨리 하기를 재촉하는 말. (仕事や行動を遅れることなく速くするように催促する言葉)

(2) 반갑게 맞아들이거나 간절히 권하는 말. (歓迎したり, 懇切に勧める言葉)

(3) 지체 없이 빨리. (遅れることなく速く)

얼른: 시간을 끌지 아니하고 바로. (時間を引き延ばさず直ちに)

このうち, 빨리는日本語の「速く」にあたる時間的な表現であり, 어서는現在では(1)のように催促する場合や, (2)のように歓迎する場合に主に用いられ, (3)のような用法<sup>1</sup>は現在では稀であると思われる。また, 얼른は躊躇なく直ちにということであり, それぞれニュアンスは異なるが, 状況によってはどれも使われうる。

しかし, 小倉進平のデータではこれらが区別されず, 一律に扱われているため, ここでもやむをえず一緒に扱うことにする。なお, 同義語ではないという点を反映してか, この項目では同じ地点で2つ, 3つの語形を併用するケースが多いので, 併用のパターンも見ていくことにする。

### 2 語形の分類

大きな分類としては, (1)ʔpal-li系, (2)ɔ-sɔ系, (3)ɔl-lin系の他, 南部地域で多く使われる(4)ʔsa-ge系があり, その他に各地で独自の語形が使われている。

(1) ʔpal-li系 ʔpal-li, ʔpal-li, ʔpol-li

<sup>1</sup> 『標準国語大辞典』でこれにあたる例文は次のようなものである。

남들은 어서 집으로 가야 할 무슨 바쁜 일이라도 있는지 발걸음이 빠르는데 나는 하릴없이 터벅터벅 걸었다. 《안정효, 하얀 전쟁》 なお, 안정효(安正孝)は1941年ソウル生まれの小説家・翻訳家。

- (2) ㄱ-소 系 ㄱ-소, ㄱ-소-라  
 (3) ㄹ-린 系 ㄹ-린, ㄹ-ㄴㄴ, ㄹ-ㅍ<sup>h</sup>이, ㄹ-ㅍ<sup>h</sup>이ᄇ, ㄹ-신, ㄹ-ㅋ<sup>h</sup>인  
 (4) 'sa-ge 系 'sa-ge, 'se-ge, 'se-gi, 'se  
 (5) その他 ㄷ-ㄷㄱ, ㅍ<sup>h</sup>ㄷ-ㄷㄱ, 'paŋ-dʒi, 'sɔk-ki, nal-lɛ, nɛŋ-k<sup>h</sup>am, tʃɛ-gi, hʌn-dʒɔ

### 3 語形の地理的分布

(1) の 'pal-li 系は半島全体で使われている。(2) ㄱ-소 系はなぜか京城と咸鏡北道の一部についてしか記録されていないが、実際はそれ以外の地域でも多く使われていた可能性がある。(3) ㄹ-린 系は、京城と忠清道、慶尚南道の一部のほか、第2音節がそれとは異なるさまざまな語形が咸鏡道で記録されている。(4) 'sa-ge 系は全羅道、忠清道、慶尚道など南部地域を中心に比較的広く分布する。その他の中では、nal-lɛ は平安道・咸鏡道の多くの地点で使われ<sup>2</sup>, 'paŋ-dʒi は黄海道で多く使われる。nɛŋ-k<sup>h</sup>am は慶尚南道の1地点でしか用いられていないが、実際には nɛŋ-k<sup>h</sup>im という形で標準語としても使われる語形である。tʃɛ-gi と hʌn-dʒɔ の2つは済州島でのみ使われている。

### 4 過去の文献上の記録

(1) 'pal-li 系, (2) ㄱ-소 系, (3) ㄹ-린 系についてはそれぞれ中世語の段階から対応する語例が見られる。

썰리:

入聲은 썰리 긋돋논 소리라 <144- 訓民正音諺解 14a>

昭憲王后 | 榮養을 썰리 ㅅ려시닐 <1459 月印積譜 1: 序 10a>

어셔:

설볼썌 설볼썌 如來의 어셔 가스바사 ᄇ리로다 <1447 積譜詳節 23:40a>

다 모다 讚歎ᄇ습고 닐오디 부테 어셔 드외샤 衆生을 濟渡ᄇ쇼셔 ᄇ거늘 <1459 月印積譜 2:42b>

어른:

瞥은 누네 어른 디날 썌시오 <1459 月印積譜 1: 序 2b>

風塵이 어른어른 ᄇ야시니 音書 | 그췌고 <1481 杜詩諺解 6:15b>

(3) ㄹ-린 系のもっとも古い語形は上にあげたように어른である。なお、어른単独の用例は少ないが、これは어른어른(ちらちらする様子、現代語では어른어른または얼른얼른)の形でよく使われていた(2番目の例を参照)。また、얼른という語形が登場するのは小説や歌辞

<sup>2</sup> これに似た形で、延辺では ne-re という語形も使われるという(延辺出身のゼミ参加者のご教示による)。

など文学作品の中で 20 世紀初頭など比較的遅い時代になってからであるが、口語的な文章の中では実際にはそれより早くから使われていたのかもしれない。

얼른 얼른 속히 ㅎ고 미룩미룩 밀지 말아 <1916 閨房歌辭戒女歌他 13 篇 lg>

답장을 얼른 ㅎ여주셔야 어둡기전에, 셔빙고궁을, 건너가깃소 <1906 鬼의聲 2162>

## 5 考察

最初に述べたように、この項目はいくつかのニュアンスの異なる語形がまとめて扱われているため、各地で複数の語形が併用されている。以下に併用の代表的な例をあげる。

### 3つの併用

?pal-li / ɔ-sɔ / ɔl-lin 京城

?pal-li / ɔl-sin / nal-le 咸鏡道

?pal-li / tʃɛ-gi / hʌn-dʒɔ 濟州島の4地点

?pal-li / ?sa-ge / ɔt-tɔk 慶尙北道の多くの地点

### 2つの併用

?pal-li / nal-le 平安道

?pal-li / ?paŋ-dʒi 黃海道

?pal-li / ?sa-ge 全羅北道, 忠清道

このように各地で併用されている語形が、それぞれの地点でどのように使い分けられているのかを明らかにすることが残された課題となる。

## 参考文献

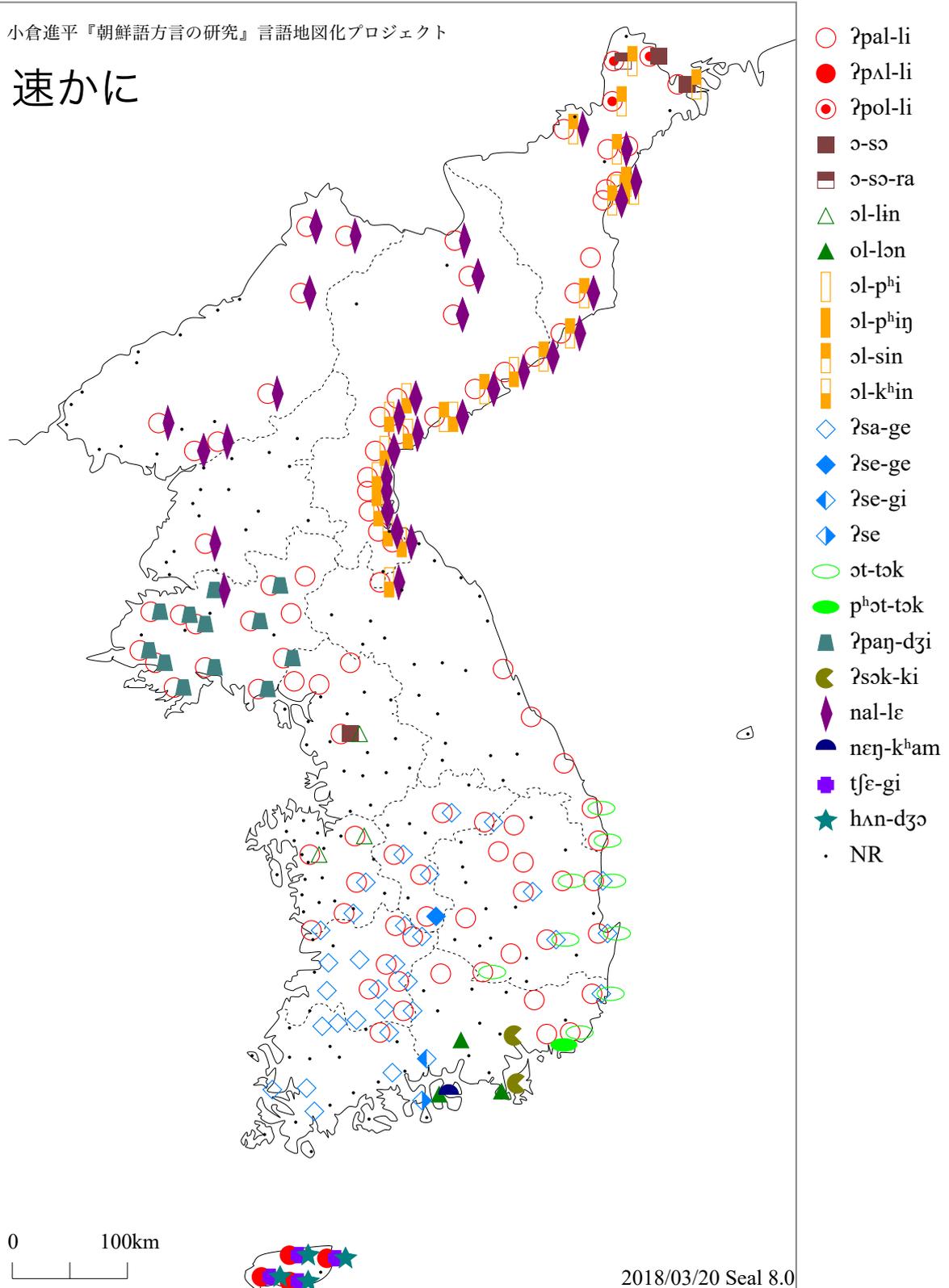
韓国精神文化研究院語文研究室編 (1987-1995) 『韓国方言資料集』全9巻. 城南: 韓国精神文化研究院.

金泰均編著 (1986) 『咸北方言辞典』ソウル: 京畿大学出版局.

金履浹編著 (1981) 『平北方言辞典』城南: 韓国精神文化研究院.

玄平孝 (1962, 修正版 1985) 『濟州島方言研究』(資料篇・論考篇) ソウル: 二友出版社.

# 速かに



## 独り

福井玲

### 1 はじめに

小倉進平 (1944: 上 512-513) には「雑」類の中で「独り(原文は獨り)」という項目名で 13 の語形が記録されている。これらはいずれも現在の標準語である 혼자 と語源的につながりのある語形である。但し、この項目には平安道と咸鏡道のデータが含まれていないので、他の資料から補う必要がある。

### 2 語形の分類

いくつかの観点から分類できる。まず、第 1 音節の母音は o の場合と a の場合がある。また、最後の音節が、-dza のような平音であるか -tʰa のような激音であるかという違いもある。また、語中の鼻音が n であるか m であるかという違いもある。その他に語形の長さが 2 音節か 3 音節かという違いもある。あとで述べるように文献上もっとも古い語形は『龍飛御天歌』に見られる ㅎㅂㅏ なので、これらの違いは音韻史とも密接な関係がある。

#### (1) hon-dza 系

(1a) hon-dza, (1b) hon-dʒɔ, (1c) hon-dʒɛ, (1d) hon-tʰa, (1e) hon-tʰɔ, (1f) hon-tʰɛ

#### (2) hom-dza 系

(2a) hom-dza, (2b) hom-tʰa

#### (3) ho-bun-tʰa 系

(3a) ho-bun-tʰa, (3b) ho-mun-tʰa

#### (4) ham-dza 系

(4a) ham-dza, (4b) ham-tʰa

#### (5) ha-mi-tʰa

この中で、ham-dza という表記は、通常の語中の破擦音の表記 -dza とは異なっている点が注目される。もしこれが誤植でなければ、平安道方言的な特徴を捉えて表記したものかもしれない。

### 3 その他の語形

小倉進平のデータで抜けている平安道については、『平北方言辞典』によると 혼자, 함자, 흠자 という語形が見られる。黄海道に見られる語形と共通している。また、『咸北方言辞典』

によると、咸鏡道では하분자, 호분자, 혼자という語形が見られる。このうち, 하분자, 호분자는小倉のデータでは慶尚道に見られる ho-bun-tʰa 系に類似している。

#### 4 語形の地理的分布

(1) hon-dʒa 系は中部以南全域に見られるが, 第2音節が激音のものは慶尚道・忠清道を中心に分布する。(2) hom-dʒa 系は京畿道と黄海道の2地点にのみ見られる。(3) ho-bun-tʰa 系は慶尚道の海岸沿いに2地点のみ見られる他, 類似した語形が咸鏡北道にも見られる。(4) ham-dʒa 系は黄海道にひろく分布するほか, 慶尚南道南岸, 平安道にも見られる。最後に(5) ha-mi-tʰa は慶尚南道に1地点のみ見られる。

#### 5 過去の文献上の記録

文献資料の上では13種の語形が見られる。現れる資料の古さの順に並べると次のようになる。初出資料名と用例数を併せて示す。

(1) 호분자 (15-16世紀 5例, すべて『龍飛御天歌』(1447))

서름 기벼를 알씨 호분자 나사가샤 모딘 도즈글 물리시니이다 <1447 龍飛御天歌 35>

(2) 호오사 (15-16世紀 多数)

右手左手로 天地 마르치샤 호오사 내 尊호라 호시니 <1447 月印千江之曲 8a>

(3) 호사 (16世紀 2例, いずれも『続三綱行実図』(1514))<sup>1</sup>

有文이 호사 거상을 禮로 마장 삼가호더니 <1514 続三綱行実図孝子図 34a>

(4) 호온자 (16世紀 1例, 『二倫行実図』玉山書院本 (1518))<sup>2</sup>

나웃 도라오면 내중내 그되로 호온자 예 잇게 아니호리라 <1518 二倫行実図 36a>

(5) 호온자 (16世紀 約10例)

유곤니 호온자 이셔 나가디 아니커늘 <1518 二倫行実図 36a>

(6) 호은자 (16世紀 2例, いずれも『翻譯朴通事』(1517頃))

내 호은자 쏘아도 이기요리라 (我獨自箇射時也贏的) <1517 翻譯朴通事 55a>

(7) 혼자 (16世紀以降現代に至るまで 多数)

하 여러 저기니 혼자 아니 인느 디니 <15--順天金氏諺簡 13:13>

큰 벼슬호니 혼자 부귀를 누리고 아스물 어엿비 아니 너기면 <1518 翻譯小学 7:49a>

(8) 호오아 (17世紀 50例余り, すべて『重刊杜詩諺解』(1932))

벼름을 臨호야 호오아 머리를 돌아 브라고 <1632 重刊杜詩諺解 1:29a>

(9) 호오와 (17世紀 6例, すべて『重刊杜詩諺解』(1932))

<sup>1</sup> 『続三綱行実図』に, 호사가1例, 호사셔가1例ある。『李朝語辭典』にはこの2つの第1音節がいずれも上声になっているが, 実際は平声である。

<sup>2</sup> 『二倫行実図』玉山書院本の34aには, 호온자가1例, 호은자가1例見られ, 両者が共存している。

호오와 셔셔 마르맷 비를 보노라 (獨立見江船) <1632 重刊杜詩諺解 7:4b>

(10) 호오야 (17世紀1例のみ)

호오야 셔셔 흰 니예 내눗다 (獨立發皓齒) <1632 重刊杜詩諺解 16:50 a>

(11) 호오야 (? 『李朝語辭典』に『重刊杜詩諺解』の用例1例あるが, その用例は 16:50 a で, 上の호오야と同じ。重刊本の版の違いか?)

(12) 호자 (18世紀頃 約10例。『李朝語辭典』に用例が3例あがっているが, 翻訳小学 10:6a の例は호자ではなく혼자であり, 他の1例は地蔵経上2は未確認。もう1つ『海東歌謠』であり, これには多く見られる。)

우린들 슬진 민아리를 호자 어이 먹으리 <海東歌謠周氏本 1g>

(13) 호자 (鄭勳による16世紀の水南放翁遺稿に数例, その他に丁克仁の『不憂軒集』賞春曲などに見られる。丁克仁は15世紀の人物であり, 『不憂軒集』の成立は18世紀なので, ハングル歌詞がいつの時代のものかは不明。)

微吟緩歩호야 시넛마의 호자 안자 <賞春曲 不憂軒集 17a>

## 6 考察

この項目のさまざまな語形は, 方言データ, 文献上のデータともに, 最も古い形である호오와に関連する語形である。

まず, 文献上のデータに関しては, ㅁの消失, 第1音節と第2音節母音の融合, △からスへの変化あるいは消失, ㄴの挿入などが問題となる。その中で, △の消失は一般的には16世紀に起こっているが(最も早い例は15世紀末にも), 호오와という語形については16世紀中ずっとこの形で保たれるのが特徴的である。また, 鼻音の挿入は, 正確な理由は説明しがたいが, 他にも並行的な例がある。なお, 鼻音が入ると, △は現れず, 호운자, 혼자などのように必ずスになるという点も特徴的である。혼자という, 現代語と同じ(或は近い)語形がすでに16世紀の初めから登場している点も注目すべきである

次に, 方言データに関しては, ham-dzaのように第1音節の母音がaで現れる場合がある点, さらに鼻音がmで現れる点が注目される, また, その他にも3音節の語形や, 第2音節の子音がbであるものも, 中世語の호오와との関連で注目される。

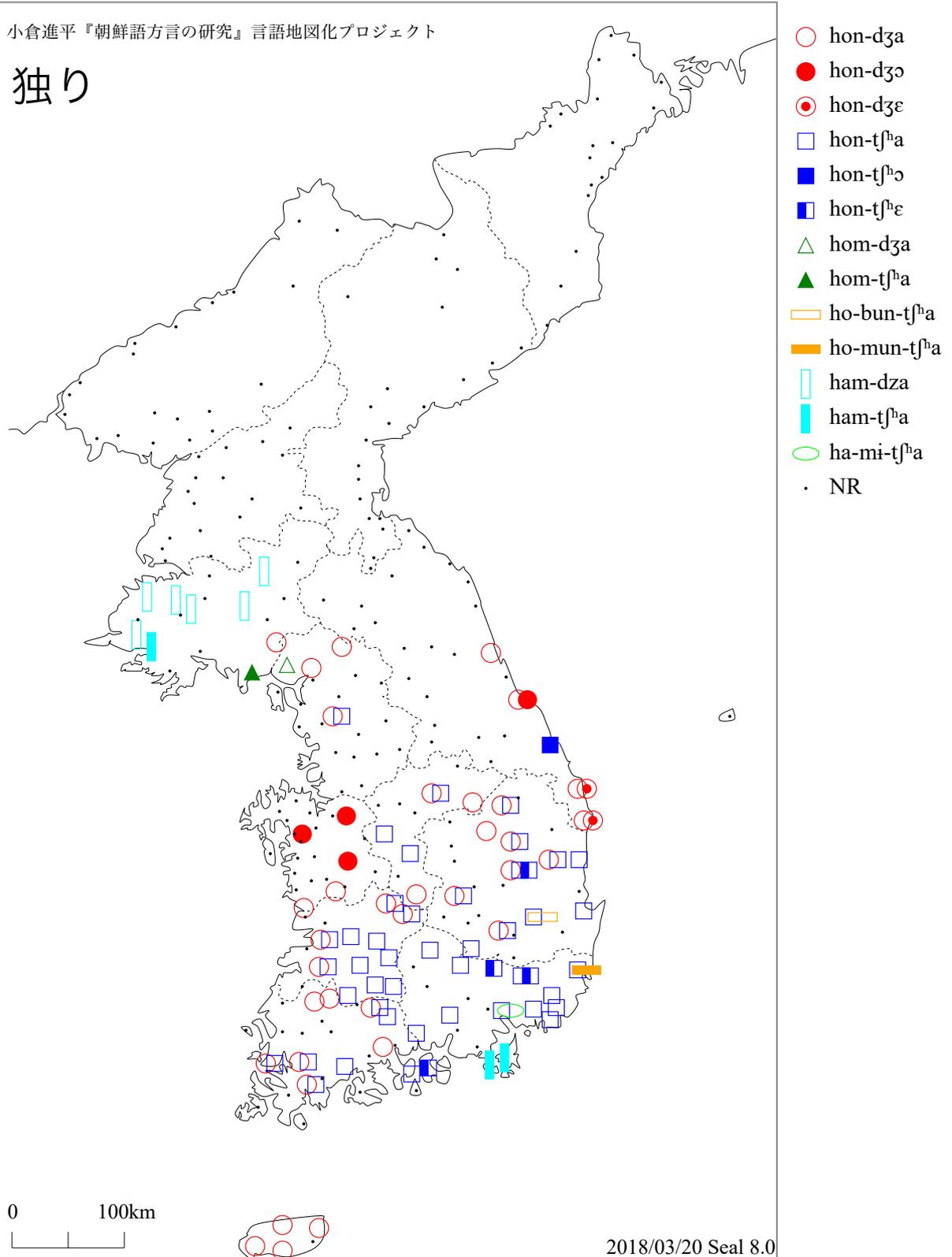
また, 文献には現れていないが, 第2音節が -dzaではなく -tʰaとなっている地域が多い点も解明すべき課題である。これは別語ではあるが, 이제, 인제, 인차「今」などのような方言差とも関連する現象かもしれない。

## 参考文献

金履浹編著 (1981) 『平北方言辞典』城南: 韓国精神文化研究院.

金泰均編著 (1986) 『咸北方言辞典』ソウル: 京畿大学校出版局.

# 独り



## 執筆者一覧（五十音順）

岩井亮雄	大阪大学大学院言語文化研究科
許秦	東京大学大学院人文社会系研究科博士課程
國分翼	東京大学大学院人文社会系研究科博士課程
澁谷秋	東京大学大学院人文社会系研究科
徐攸廷	東京大学大学院人文社会系研究科博士課程修了
立川真理恵	東京大学大学院人文社会系研究科博士課程
奈良林愛	東京大学大学院人文社会系研究科博士課程
福井玲	東京大学大学院人文社会系研究科
朴美花	東京大学大学院人文社会系研究科修士課程修了
堀内唯	東京大学大学院人文社会系研究科修士課程
前田夏菜	東京大学大学院人文社会系研究科修士課程修了
李美姫	立命館アジア太平洋大学言語教育センター
梁紅梅	東京大学大学院人文社会系研究科博士課程